原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第19集

原の辻遺跡

原の辻遺跡特定調査事業発掘調査報告書Ⅱ
（環濠等状況調査）

2000

長崎県教育委員会

原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第19集

原の辻遺跡

（はる　つじ）

原の辻遺跡特定調査事業発掘調査報告書Ⅱ
（環濠等状況調査）

調査区上空より印通寺方面を望む

A・C・D区全景

B区全景

E区全景

1号旧河道(東から)

1号濠(右)・2号濠(左)(南から)

2号旧河道（東から）

土器溜（南から）

1号旧河道木製品出土状況

1号旧河道木製品出土状況

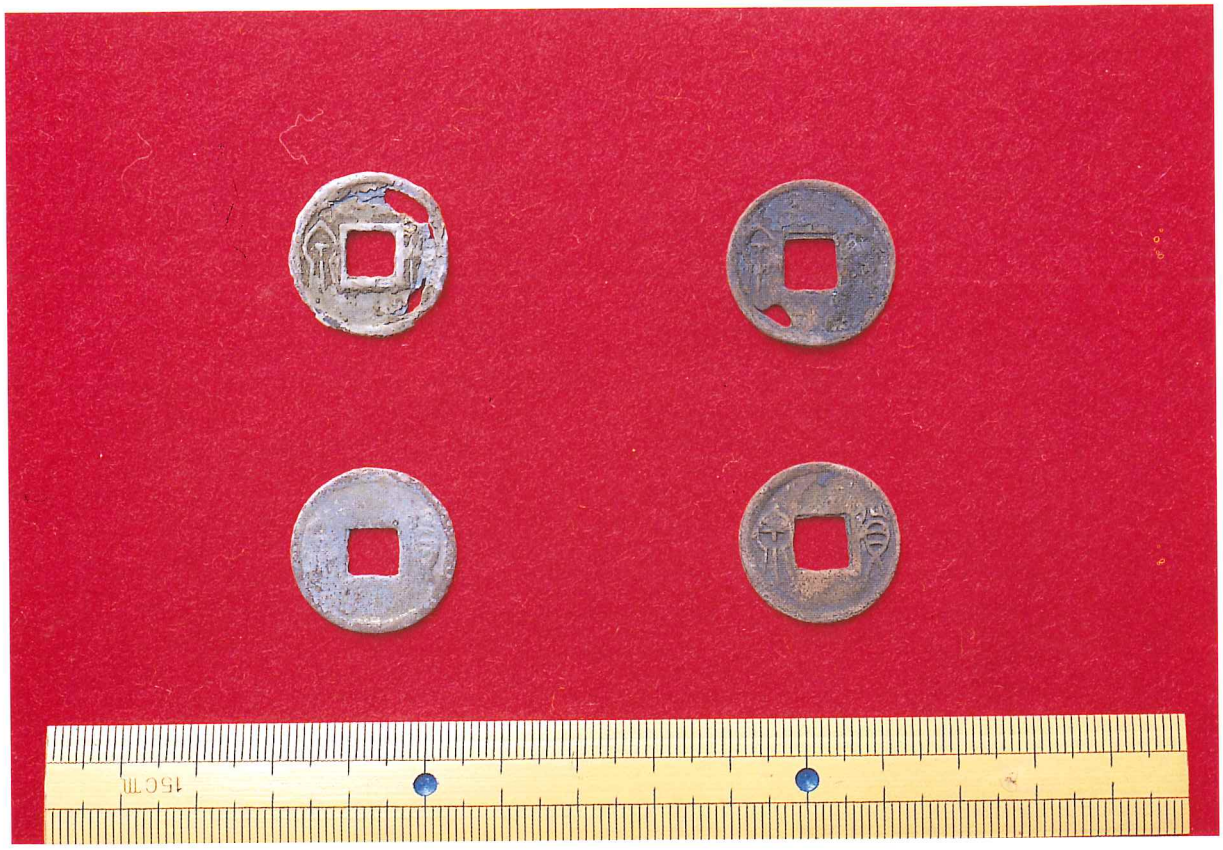
2号溝・3号旧河道木製品出土状況

2号溝・3号旧河道木製品出土状況

2号溝・3号旧河道木製品出土状況

土器溜ト骨出土状況

出土楽浪系馬車具



出土貨泉

出土板状鉄斧

出土鉄鎚(左)・鉄斧(右)

出土鉄鑿

出土鉄鑿

発刊にあたって

本書は，原の辻遺跡特定調査事業に伴って実施した，平成11年度の原の辻遺跡発掘調査報告書です。

原の辻遺跡は，中国の歴史書『魏志倭人伝』に登場する，「一支國（いきこく）」の「王都」として特定されている遺跡です。『魏志倭人伝』に記された３世紀の日本に存在した国々の中で，国の都がはっきりと特定されているのは原の辻遺跡だけで，全国的にも貴重な遺跡であり，平成９年９月に国史跡の指定を受けました。

平成10年度の船着き場付近水路等状況調査では，遺跡の中心に位置する台地下北西部地区において，多くの弥生時代中期の環濠や後期の濠を新たに確認しました。そのため，今年度の調査は環濠等状況調査として，台地下の西部を南下して環濠や濠の追跡調査を実施しました。調査の結果，これまで分からなかった環濠や旧河道の状況を確認し，大陸伝来のものなどの貴重な遺物を数多く発見しました。

原の辻遺跡は，発掘調査のたびに重要な発見が相次ぎ全国的に注目をあつめる遺跡で，一日も早い国特別史跡の指定と保存整備・活用が待ち望まれます。今回の発掘調査の成果を学術的な資料として，また文化材の保護のため役立てていただければ幸いです。

平成12年３月31日

長崎県教育委員会教育長　　木　村　道　夫

例　　言

1．本書は，原の辻遺跡特定調査事業に伴って実施した，平成11年度の原の辻遺跡の発掘調査報告書である。

2．本書に収録した遺跡の調査地区は，長崎県壱岐郡芦辺町深江鶴亀触字不條・八反に所在する。

3．調査は長崎県教育委員会を主体として，原の辻遺跡調査事務所係長（副参事）宮崎貴夫と文化財保護主事杉原敦史が担当した。

4．本書で使用した遺物の実測および遺物と遺構の製図は，原の辻遺跡調査事務所がおこなった。

5．本書に収録した遺物・図面・写真は，原の辻遺跡調査事務所で保管している。

6．本書の写真は，宮崎貴夫が撮影した。

7．本書の執筆は，Ⅲ．3．(1)を宮崎貴夫が，それ以外を杉原敦史が担当した。

8．本書の編集は杉原敦史による。

本 文 目 次

Ⅰ．遺跡の立地と環境……1
　1．地理的環境……1
　2．歴史的環境……2

Ⅱ．調査の経緯……3

Ⅲ．調　　査……7
　1．調査概要……7
　2．遺　　構……7
　3．遺　　物……39
　4．ま と め ……108

表　目　次

第1表　これまでの原の辻遺跡の主な調査の経緯と成果……4

挿 図 目 次

第１図　壱岐島および遺跡位置図……1
第２図　平成10年迄の調査成果による主要遺構配置図（１／8,000）……5
第３図　調査区配置図（１／8,000）……6
第４図　主要遺構配置図（１／1,000）……9
第５図　Ｂ区，Ｅ区遺構配置図（１／200）……11
第６図　Ａ区，Ｃ区，Ｄ区遺構配置図（１／200）……13
第７図　Ａ区北壁土層図（１／60）……14
第８図　Ｂ区北壁土層図（１／60）……15
第９図　Ｅ区北壁土層図（１／60）……17
第10図　Ｄ区北壁土層図（１／60）……19
第11図　１号旧河道土層図（１／60）……20
第12図　濠土層図（１／20）……21
第13図　３号旧河道，２号溝，土器溜土層図（１／30）……22
第14図　１号旧河道内流路（１／200）……23
第15図　２号旧河道遺物出土状況（１／60）……24
第16図　３号旧河道・２号溝遺物出土状況及び足跡状遺構①（１／60）……25
第17図　３号旧河道・２号溝遺物出土状況及び足跡状遺構②（１／60）……26
第18図　３号旧河道・２号溝遺物出土状況及び足跡状遺構③（１／60）……27
第19図　１号土壙実測図・土層図（１／30）……28
第20図　２号土壙実測図・土層図（１／30）……29
第21図　４号土壙実測図・土層図（１／30）……30
第22図　３号・５号土壙実測図（１／30）……31
第23図　６号土壙実測図（１／30）……33
第24図　７号土壙実測図（１／30）……34
第25図　１号建物跡実測図（１／40）……35
第26図　１号旧河道出土土器①（１／３，１／４）……40
第27図　１号旧河道出土土器②（１／４）……41
第28図　１号旧河道出土土器③（１／４）……42
第29図　１号旧河道出土土器④（１／４）……44
第30図　１号旧河道出土土器⑤（１／４）……45
第31図　１号旧河道出土土器⑥（１／４）……47
第32図　１号旧河道出土土器⑦（１／３，１／４）……48
第33図　２号旧河道出土土器（１／３）……50
第34図　Ａ区１号濠出土土器①（１／４）……52
第35図　Ａ区１号濠出土土器②，Ｃ区１号濠出土土器①（１／４）……53
第36図　Ｃ区１号濠出土土器②（１／４）……54
第37図　Ｃ区１号濠出土土器③，Ｄ区１号濠出土土器（１／４）……55
第38図　Ａ区２号濠出土土器①（１／４）……58
第39図　Ａ区２号濠出土土器②（１／４）……59

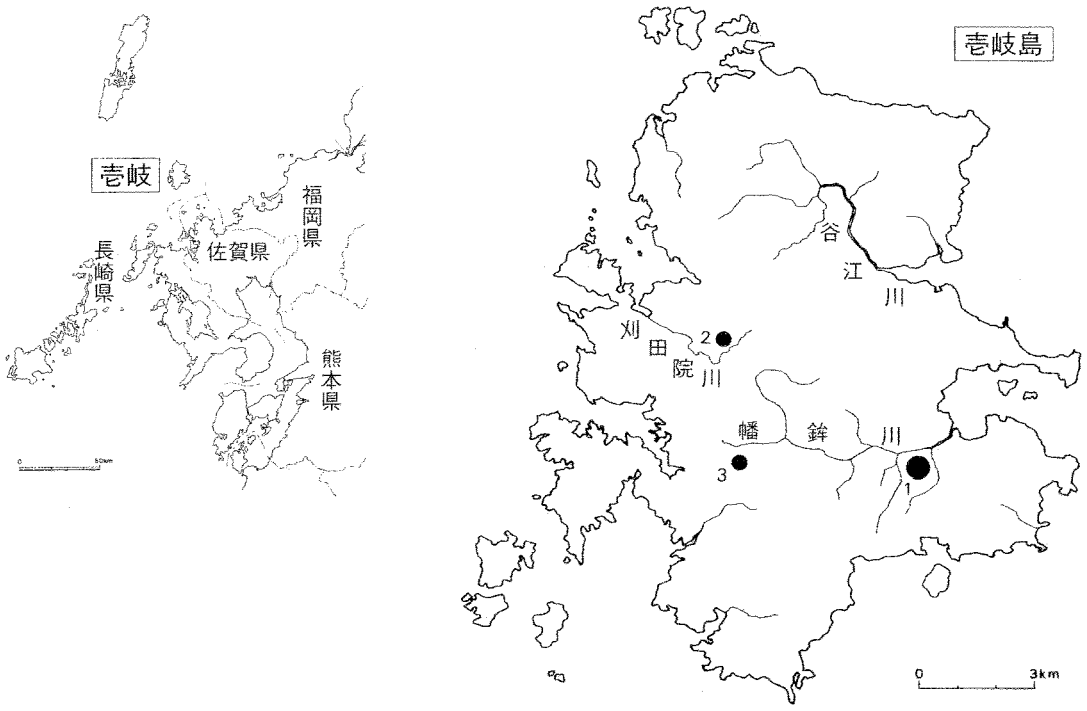
第40図　A区２号濠出土土器③（１／４）……60
第41図　A区２号濠出土土器④（１／４）……61
第42図　C区２号濠出土土器㉘，D区２号濠出土土器①（１／４）……63
第43図　D区２号濠出土土器②（１／４）……64
第44図　A区１号土壙出土土器①（１／４）……67
第45図　A区１号土壙出土土器②，２号土壙出土土器（１／４）……68
第46図　B区３号土壙出土土器（１／４）……69
第47図　B区４号土壙出土土器（１／４）……70
第48図　B区５号土壙出土土器（１／４）……71
第49図　B区６号土壙出土土器（１／４）……73
第50図　D区７号土壙出土土器①（１／４）……74
第51図　D区７号土壙出土土器②，E区土器溜出土土器（１／３，１／４，１／６）……75
第52図　筒形器台資料（１／４）……76
第53図　石器・石製品①（１／２）……79
第54図　石器・石製品②（１／２）……80
第55図　石器・石製品③（１／２）……81
第56図　石器・石製品④（１／２）……82
第57図　石器・石製品⑤（１／２）……83
第58図　石器・石製品⑥（１／２，１／３）……84
第59図　石器・石製品⑦（１／３）……85
第60図　石器・石製品⑧（１／３）……86
第61図　石器・石製品⑨（１／３）……87
第62図　石器・石製品⑩（１／３）……88
第63図　石器・石製品⑪（１／３）……89
第64図　石器・石製品⑫（１／３）……90
第65図　石器・石製品⑬（１／３）……91
第66図　石器・石製品⑭（１／３）……92
第67図　石器・石製品⑮（１／３）……93
第68図　石器・石製品⑯（１／３）……94
第69図　石器・石製品⑰（１／３）……95
第70図　石器・石製品⑱（１／３）……96
第71図　石器・石製品⑲（１／３）……97
第72図　石器・石製品⑳（１／3，１／４）……98
第73図　石器・石製品㉑（１／３）……99
第74図　石器・石製品㉒（１／３）……100
第75図　金属製品①（１／１，１／２）……101
第76図　金属製品②（１／２）……102
第77図　金属製品③（１／２）……103
第78図　骨角製品（１／２）……104
第79図　土製品（１／２）……105
第80図　時期別遺構配置図（１／500）……109

Ⅰ．遺跡の立地と環境

1．地理的環境

壱岐島は，九州と朝鮮半島の間に位置する東西約15km，南北約17km，面積約139㎡の島である。行政的には長崎県に属しているものの，長崎県本土との交通アクセスは航空路のみで直接結ぶ航路は無い。佐賀県呼子町とはフェリーで約１時間，福岡県の博多港とはフェリーで約２時間半，ジェットフォイールで約１時間で結ばれている。経済的・文化的には博多の圏内である。

島の地形を概観すると，全体的に平坦である。標高約213mの岳の辻が島内の最高峰である。同じく玄界灘に位置する峻険な地形の対馬とは対照的な景観を有する。島の基盤は，第三紀の堆積岩で，その上を玄部岩が覆い低平な地形を形成している。島の南東部には「深江田原」と呼ばれる，長崎県内第２の広さを誇る平野があり，県下有数の穀倉地帯となっている。原の辻遺跡は，この平野に舌状に伸びた台地を中心に広がっている。遺跡面積は，約100haの規模で，芦辺町と石田町にまたがっている。台地の標高は最高部でも18m程度であるが，平野全体を見渡すことができる。遺跡の北側には島内最大河川の幡鉾川（全長約９km）が西から東に流れ，約１km離れた内海に注ぐ。この幡鉾川を遡ると，島西部の半城湾等の沿岸に出ることも容易である。また，「深江田原」は周囲を丘陵に囲まれ，盆地状の地形となっている。



1 原の辻遺跡　2 カラカミ遺跡
3 車出遺跡

第１図　壱岐島および遺跡位置図

2．歴史的環境

壱岐島は，博多，対馬へ約67km，佐賀県呼子まで約26km程の距離で，その地理的条件から中国大陸や朝鮮半島と日本とを結ぶ，文物の交流，交通，防衛上の中継地点，拠点として重要な役割を歴史的に果たしてきた。

3世紀の中国の歴史書『魏志倭人伝』には「一支国」として記載され，弥生時代終末期の壱岐の状況が紹介されている。「(対馬国から）南に瀚海という海を渡り，千余里行くと，一大国（一支国）に着く。長官は卑狗，副官は卑奴母離と呼ばれている。広さは四方三百里ばかり。竹林・叢林が多く，三千ばかりの家がある。やや田地があるが，食べるには足らない。南北に海を渡って米などを買ってくる。」短いが当時の壱岐を知る貴重な記述である。

現在，壱岐では約60箇所の弥生時代の遺跡が確認されているが，原の辻遺跡はその中で最大の規模を誇り，検出，出土した遺構と遺物も質，量ともに他をしのいでいることから，一支国の王都に特定されている。遺跡の調査は，古くは大正時代から行なわれてきたが，平成5年からの調査で遺跡の中心となる台地を取り巻く多重の環濠が確認され，全国的に注目を浴びた。そして原の辻遺跡は，「魏志倭人伝」に記載された国の都が唯一特定された遺跡として評価されている。

島内で原の辻遺跡以外の弥生時代の重要な集落遺跡としては，カラカミ遺跡と車出遺跡が知られる。カラカミ遺跡は，原の辻遺跡と同じく弥生時代前期末から始まる。高地に位置し，環濠を巡らしているが，原の辻遺跡と比べると規模は小さく遺物の内容もやや劣る。原の辻遺跡とは別個に発祥した集落が原の辻遺跡の発展過程の中で，原の辻主導で連合したものと思われる。車出遺跡は弥生時代中期に始まり，その発祥時には原の辻遺跡は発展を遂げていたため，また幡鉾川上流に位置するが，その水系により原の辻遺跡とも結ばれているため，発祥時より原の辻主導の連合下にあったと考えられる。原の辻遺跡の集団の一部が分離，形成した集落の可能性もある。西側の低い丘陵を越えると，対馬を臨む半城湾に出る。島内外から原の辻遺跡へ入る物資の搬入ルートの島西部拠点，また島の西部地域の管理拠点として重要な集落であったと推測される。

原の辻遺跡は，集落として古墳時代前期まで続いたことが確認されている。遺跡から北東に位置する丘陵上に5世紀頃のものと考えられる，大塚山古墳が築かれており，このころまでは原の辻遺跡の首長などと繋がる支配勢力が付近に存在したと考えられるが，考古学的には実証されておらず，今後の調査を待つところである。

6世紀から7世紀になると，確認されているだけでも約270基もの古墳が島内で築造されている。これは長崎県の古墳の約半数にのぼり，その中でも県内最大の前方後円墳である双六古墳（全長約93m），同じく県内最大の円墳である鬼の窟古墳（直径約45m），金銅製馬具が出土した笹塚古墳（直径約38m）などが代表的である。壱岐の首長と中央政権との強い結びつきが窺えるが，これもまた，壱岐島の中国大陸や朝鮮半島と日本との中継拠点としての，政略的，国防的重要性に起因することは疑いない。

Ⅱ．調査の経緯

原の辻遺跡の調査は，幡鉾川流域総合整備計画に係わる圃場整備に伴う範囲確認調査及び緊急発掘調査を平成３年度から平成９年度にかけて実施し，弥生時代の大規模な多重環濠や船着き場等の重要な遺構や遺物を発見した。

平成５年度の調査では，遺跡の中心となる舌状の台地の東側一帯の緊急発掘調査と北側から西側一帯の範囲確認調査を実施し，環濠をはじめとする弥生時代の重要遺構を検出した。その結果に基づいて関係各機関で協議を行ない，平成５年度の調査箇所を含めた工事区域の約4.5haについて，非農用地を設定して遺構の保存を図ることとなった。

平成６年度の調査は，台地北側一帯の緊急発掘調査を実施し，環濠等の遺構を検出した。また，遺跡の南側の大川地区では農道拡幅工事中に中国製陶磁器類などの古代の遺物が大量に発見されたため，工事を中断して調査を実施した。

平成７年度には，原の辻遺跡調査指導委員会において，これまでの調査結果に検討が加えられた結果，当該遺跡が「魏志倭人伝」中の「一支国」の王都として特定された。

平成８年度は，遺跡の西部一帯の調査を実施し，弥生時代中期前葉の船着き場跡，それに付属する石組遺構，弥生時代前期末から中期初頭にかけての水田畦畔遺構，弥生時代から古墳時代にかけての旧河道などを確認した。

平成９年度の調査では，幡鉾川の弥生時代中期の旧河道と濠等を確認し，旧河道内から高床建物の部材である床大引材をはじめとする多数の建築部材や100点以上の朝鮮系無文土器等が出土し，低地部分の居住域も確認した。

旧河道の調査については，幡鉾川流域総合整備計画に係わる幡鉾川の河川改修工事に伴って，平成６年度から平成８年度にかけて実施した。その結果，遺跡内での幡鉾川の弥生時代前期末から古墳時代前期にかけての旧河道４条，濠２条，溝１条を確認した。

また，これらの開発に伴う調査と平行して，台地部分の遺構確認調査も平成６年度から平成11年度までの予定で，継続して実施している（高元・原・大川地区）。その結果，台地頂上部分とその周辺部の調査で，祭祀用と考えられる高床建物の柱穴群や区画のための台地を東西に切る濠等を検出し，この付近一帯が遺跡の中核的部分であることが判明した。台地北部の高元地区では，竪穴式住居跡等を検出し，この地区が居住域であることを確認した。

平成10年度の船着き場付近水路等状況調査では，弥生時代中期の環濠を台地下の北西部地域で初めて確認し，また複雑に中継し合う弥生時代後期の濠群も確認した。このため，台地下西部における環濠や濠の状況を追跡する必要が生じた。これを調査目的として，当該調査は平成11年７月14日から平成12年３月31日の期間，長崎県教育委員会を主体に，原の辻遺跡調査事務所が担当して，遺跡の北西部で台地西部縁に沿って面積1,572m^2の調査を実施した。

調査・発見年度	発見者・調査主体	主　な　成　果
大正～昭和初期	松本友雄・山口麻太郎	学会への遺跡の紹介・報告。
昭和14年	鴇田忠正	幡鉾川改修に伴う耕地整理での調査。
昭和26～39年	九学会・東亜考古学会	住居跡，墓域の確認。卜骨，貨泉出土。原の辻上層式の設定。石器から鉄器へ転換した典型的遺跡の評価。
昭和29年	東亜考古学会	圃場整備で大原地区から細形銅剣２・銅戈１出土。
昭和49年	長崎県教委	大原地区で，個人の基盤整備に伴って甕棺墓51・石棺墓19を発見し，戦国式銅剣１・トンボ玉など出土。
昭和51～52年	長崎県教委	大川地区，原の久保Ａ地区，原の久保Ｂ地区などの墓域を発見。大川地区では，方格規矩鏡，有鉤銅釧など出土。遺跡が台地上に広域に拡がることを確認。
平成３～５年	長崎県教委・芦辺・石田町教委	幡鉾川総合整備事業に伴う範囲確認調査。災害に伴う緊急調査。環濠の一部などを発見する。
平成５年	長崎県教委・芦辺・石田町教委	台地東裾で環濠，大溝を確認し，遺跡が大規模な多重環濠集落であることが判明する。各種の膨大な資料が出土する。
平成６年	長崎県教委・芦辺町教委	原地区の高台部分で高床建物群を確認。高元地区で弥生中期～古墳時代初頭の住居跡13軒，土壙30基などを確認し，卜骨，獣帯鏡などが出土する。
平成７年	長崎県教委・芦辺・石田町教委	原地区高台部分で弥生時代高床建物群と古墳時代初頭竪穴式住居跡，濠２条など確認。大川地区の墓域調査。調査指導委員会で一支国の王都であることが特定される。
平成８年	長崎県教委・芦辺・石田町教委	遺跡北側と西側の水田部分に弥生中期の居住域が拡がることを確認する。新たに濠や旧河道なども確認し，ココヤシ製笛など出土する。台地西側の八反地区で，船着き場跡と水田畦遺構を発見する。原地区で濠と竪穴式住居を確認する。原ノ久保地区では墓域を確認し，内行花文鏡などが出土する。
平成９年	長崎県教委・芦辺町教委	遺跡北西部の溜池予定地で，弥生時代中期の旧河道を確認し，高床式建物の床大引材を発見する。池田大原地区で濠を確認する。原地区では濠と竪穴式住居を確認する。
平成10年	長崎県教委・芦辺町教委	不條地区で弥生時代中期の旧河道，弥生時代中期から後期の旧河道，弥生時代中期の濠１条，弥生時代後期の濠５条，弥生時代や古墳時代の溝などを確認し，前漢時代の五銖銭や三翼鏃などが出土する。
平成11年	長崎県教委・芦辺町教委	不條・八反地区で弥生時代中期から古墳時代前期の旧河道，弥生時代中期の環濠３条，弥生時代後期の濠１条，弥生時代中期から後期の土器溜，古墳時代前期の溝などを確認し，新時代の貨泉４枚，楽浪系の青銅製馬車具，板状鉄斧，弥生時代後期から古墳時代前期の金鎚，卜骨などが出土する。

第１表　これまでの原の辻遺跡の主な調査の経緯と成果

第２図　平成10年迄の調査成果による主要遺構配置図（１／8,000）

第３図　調査区配置図（１／8,000）

Ⅲ．調　　査

1．調査概要（第３図，第７図～第10図）

調査区は，遺跡の中心に位置する台地下北西部，原の辻遺跡調査事務所周辺の非農用地に，基本的に北からＡ区（315m²），Ｂ区（575.5m²），Ｃ区（52m²），Ｄ区（94.5m²），Ｅ区（535m²），合計1,572m²を設定した。

基本土層は，若干の色の違いがあるものの，各区で共通である。

１層は現在の水田作土層である。

２層はａ，ｂの２つの層に細分されるが，２ａ層は現在の水田下層土である。２ｂ層は近世から明治頃の陶磁器などが出土し，近世から近代の水田の下層土と考えられる。

３層は，明代の染付等が出土した３ａ層が中世，土師器・須恵器等が出土する３ｂ層が古墳時代から古代のそれぞれ水田層である。

この３ｂ層の下に部分的に黒褐色系の土層が存在する場合がある。この層は，布留式土器等が出土し，古墳時代前期の水田層と考えられる。この層は概ね弥生時代の旧河道上にあり，この層の下は旧河道を埋め立てて作った弥生時代後期から古墳時代前期にかけての水田層が存在する。時期決定と遺構検出の両面においてメルクマールとなる重要な土層である。

なお，遺物の取り上げ層位と土層図との相関は次の如くである。Ａ区１号旧河道出土遺物のⅣ層は第７図の土層にはなく，１号溝と１号旧河道に挟まれた，旧河道の東岸付近で出土したものである。Ｂ区１号旧河道出土遺物のⅣａ層が第８図の７ａ～７ｇ層と第11図の７ｂ層，Ⅳｂ層が第８図の７ｈ～７ｌ層と第11図の７ｃ～７ｅ層，Ⅳｃ層が第11図の８ｃ層を除く８ａ～８ｎ層，Ⅳｄ層は土層図には現れていないが，河道内にあった島状に残っていた残土層から出土したものである。２号旧河道出土遺物のⅠ層は第９図の７層，Ⅱ層は８・９層，Ⅲ層は16層から出土したものである。土器溜出土遺物のⅠ層は第９図の10層，Ⅱａ層が11層，Ⅱｂ層が12層，Ⅱｃ層が13層，Ⅲ層が14層から出土したものである。

また，全調査区において古代以降度重なる水田造成のための削平をうけており，弥生時代の遺構も上半部分に損傷をうけている。

2．遺　　構（第４図～第６図）

(1) 旧河道（第11図，第13図～第18図）

旧河道は，３条確認した。３条ともに，現在の幡鉾川の支流に相当すると思われる。

１号旧河道は，Ａ区で東岸部分，Ｂ区で両岸を確認した。また，今年度環濠等状況調査に先だって実施した，国補事業調査不條地区調査区においても検出している。昨年度の船着き場付近水路等状況

調査のC区で東岸部分，E区で西岸部分を確認した河道に繋がるものである。

昨年度の調査では，推定幅約15mで，南から北方向へ流れて本流と合流したものと考えられた。東岸寄りの川底部から須玖Ⅰ式・Ⅱ式土器が出土したが，中央部分と推定される部分から弥生時代後期の遺物が出土したため，徐々に埋没しながらも河道中央部分は弥生時代後期まで残存したものと考えられた。確認した深さは約80cmである。

今年度の調査では，B区において最大幅約24m，最深部約1mを確認した。そして時期の異なる4条以上の流路を確認した。このため，昨年度考えられた徐々に埋没しながらも河道中央部分は弥生時代後期まで残存したという状況ではなく，幅なども違う各時期の流路が複雑に互いに切り合っていることが明らかになった。各流路別の詳細な時期を検討することが今回の報告には間に合わなかったが，時期幅は城ノ越式土器から布留式土器までである。傾向としては，城ノ越式土器や須玖Ⅰ式土器は河道の西岸部に集中して出土し，弥生時代後期の土器は河道中央部より東側に集中している。布留式土器等は河道東岸部と中央部の間に集中する。須玖Ⅱ式土器は西岸部を除き河道全体に広く分布する。これらのことと河道内土層の状況から，西岸部は弥生時代中期前葉に埋まり，その後中期後葉までは流路は広範に流れを変えたが，後期から古墳時代前期にかけて残りの西半分の部分は埋め立てられて水田となり，河道は東半分を残すのみとなったと考えられる。東岸の一部ではこれに対応するように削平され水田化された形跡も認められる。護岸等の作為は確認できなかったが水田の用排水のために敢えて河道の一部を埋め残した可能性も高い。そして古墳時代前期には河道内は全て埋め立てられて水田となり，この水田の用排水のために新たに溝（1号溝）が掘られたものと考えられる。

また，河床の一部に僅かではあるが，木を並べてその間に木を押さえるような形で石を置いた遺構を確認した。河を渡るための施設の基礎の可能性が考えられる。

2号旧河道は，E区で検出した。東岸は確認できなかった。台地と微高地の僅かな間を南から北に流れ，1号旧河道と合流するものと考えられる。河道内の土層は3層に分かれ，上層からは古代の須恵器，中層からは弥生時代後期の土器から古式土師器や，台地または微高地縁の土器溜から流れ込んだと考えられる各種の鉄器類，下層から弥生時代中期から後期の土器が出土した。長さ約7mを確認した。

また，河道内北側部分で中層，下層から木を並べて杭を打った遺構が検出したが，河を渡るための施設の基礎の可能性が考えられる。

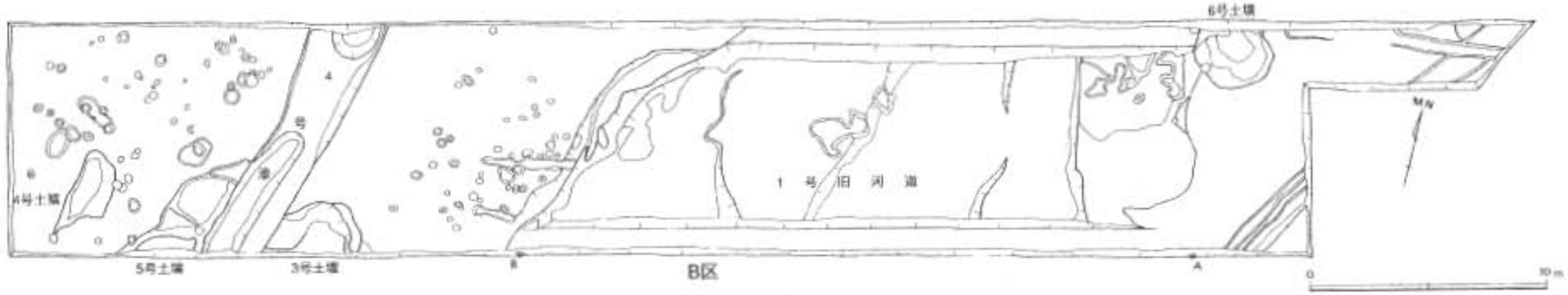
3号旧河道は，トレンチにより確認したE区の2号溝の下に存在する弥生時代中期から後期の河道である。弥生時代後期から古墳時代前期にかけて埋め立てられて水田化されたものと考えられるが，詳細は今後の課題である。多くの木製品が出土した。

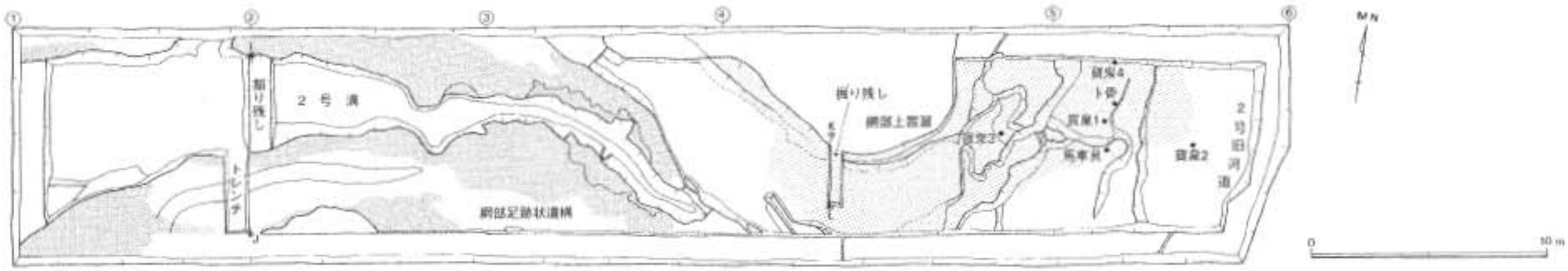
(2) 濠（第12図）

濠は，4条検出した。

1号濠は，最大幅約3m，最深部約70cmを測り，長さ約26mを確認した（国補事業調査区分含む）。

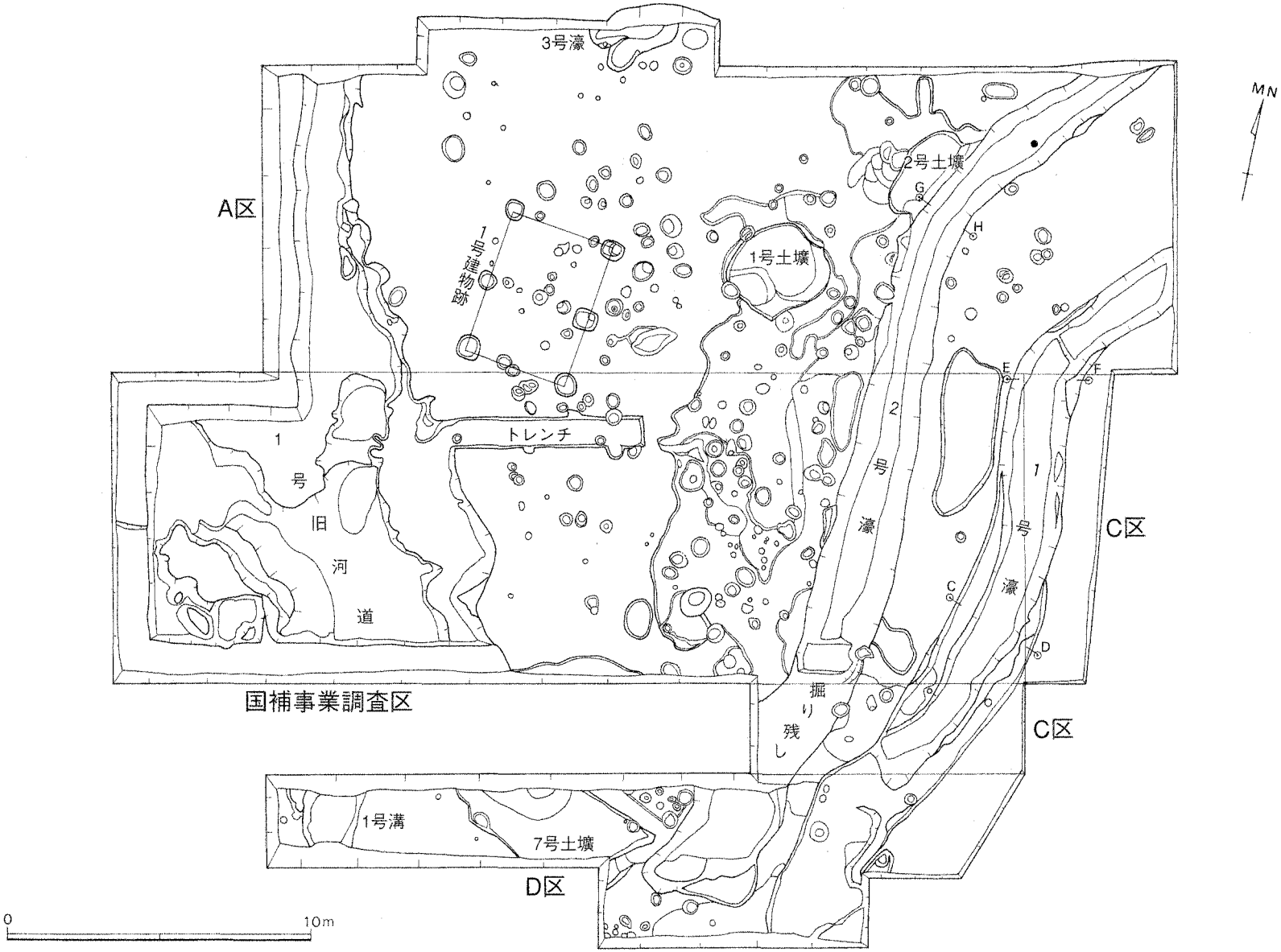
第４図　主要遺構配置図（Ａ～Ｅ区，国補調査区以外は平成８年度から平成10年度の調査区）（１／1,000）



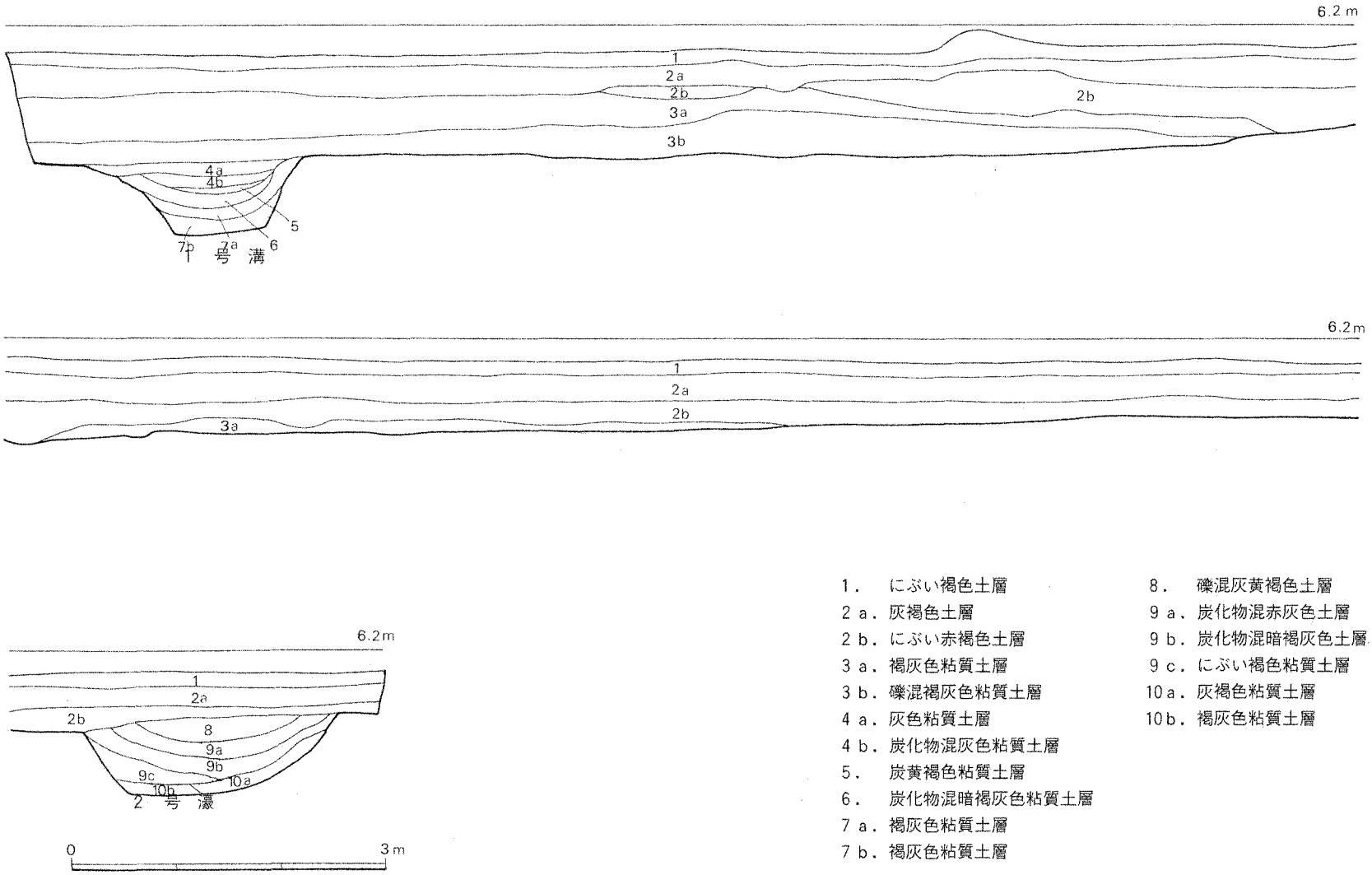


E区

第5図　B区，E区遺構配置図（1／200）

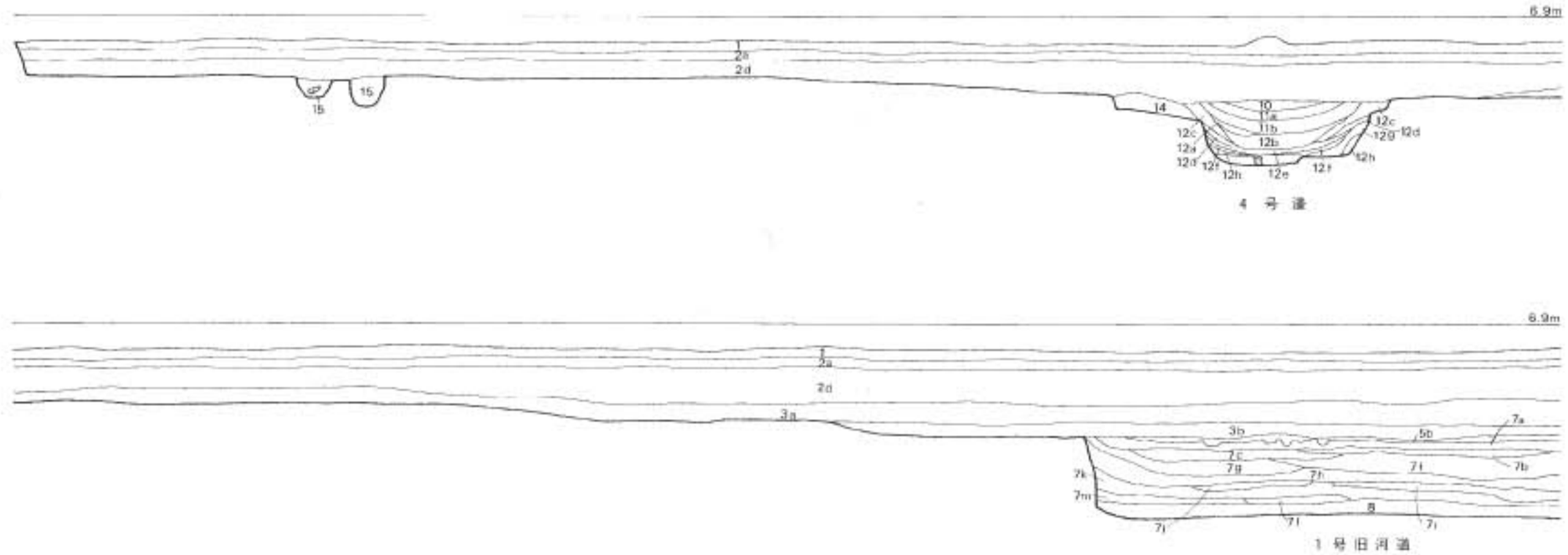


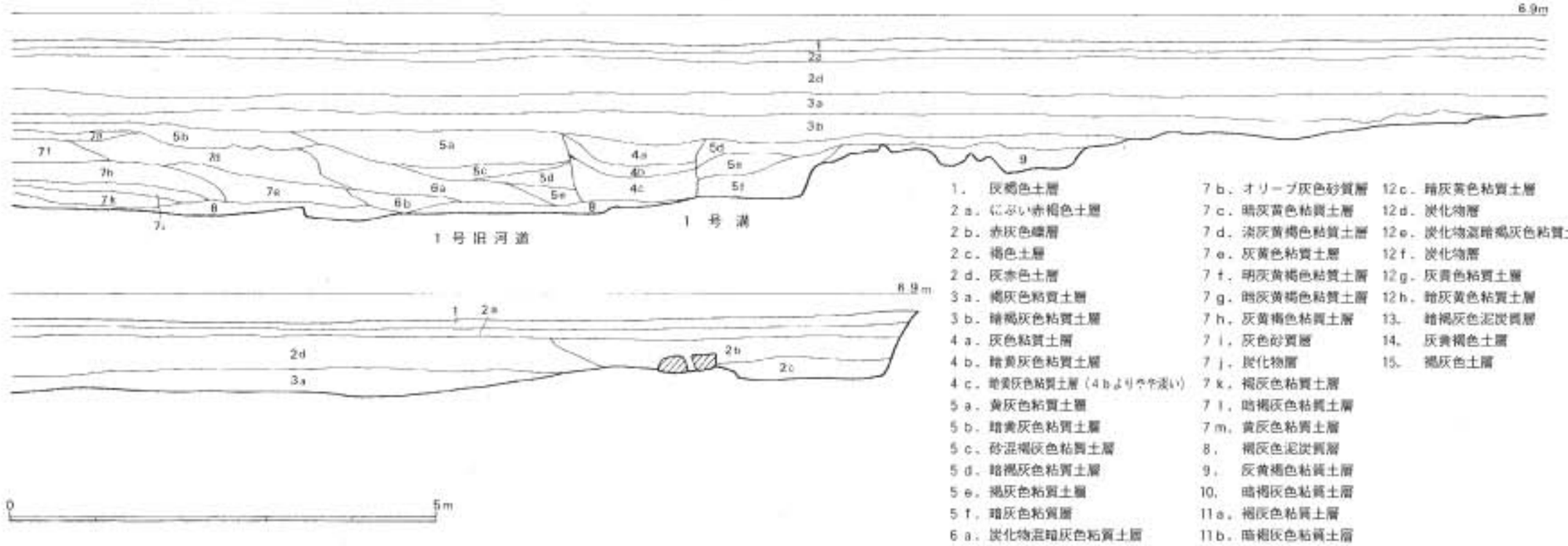
第6図　A区，C区，D区遺構配置図（1／200）



1．　にぶい褐色土層
2 a．灰褐色土層
2 b．にぶい赤褐色土層
3 a．褐灰色粘質土層
3 b．礫混褐灰色粘質土層
4 a．灰色粘質土層
4 b．炭化物混灰色粘質土層
5．　炭黄褐色粘質土層
6．　炭化物混暗褐灰色粘質土層
7 a．褐灰色粘質土層
7 b．褐灰色粘質土層
8．　礫混灰黄褐色土層
9 a、炭化物混赤灰色土層
9 b．炭化物混暗褐灰色土層
9 c．にぶい褐色粘質土層
10 a．灰褐色粘質土層
10 b．褐灰色粘質土層

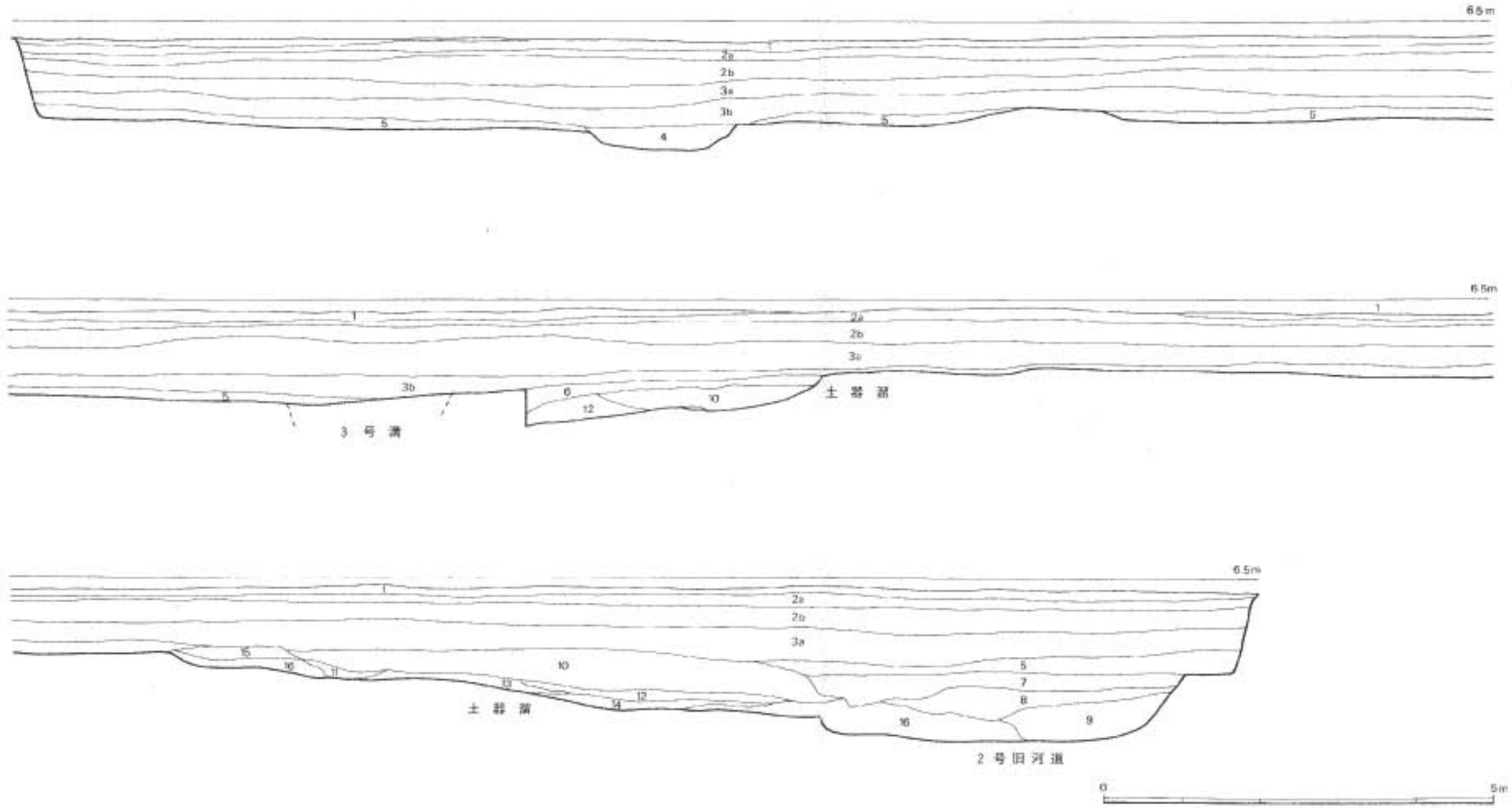
第７図　Ａ区北壁土層図（１／60）





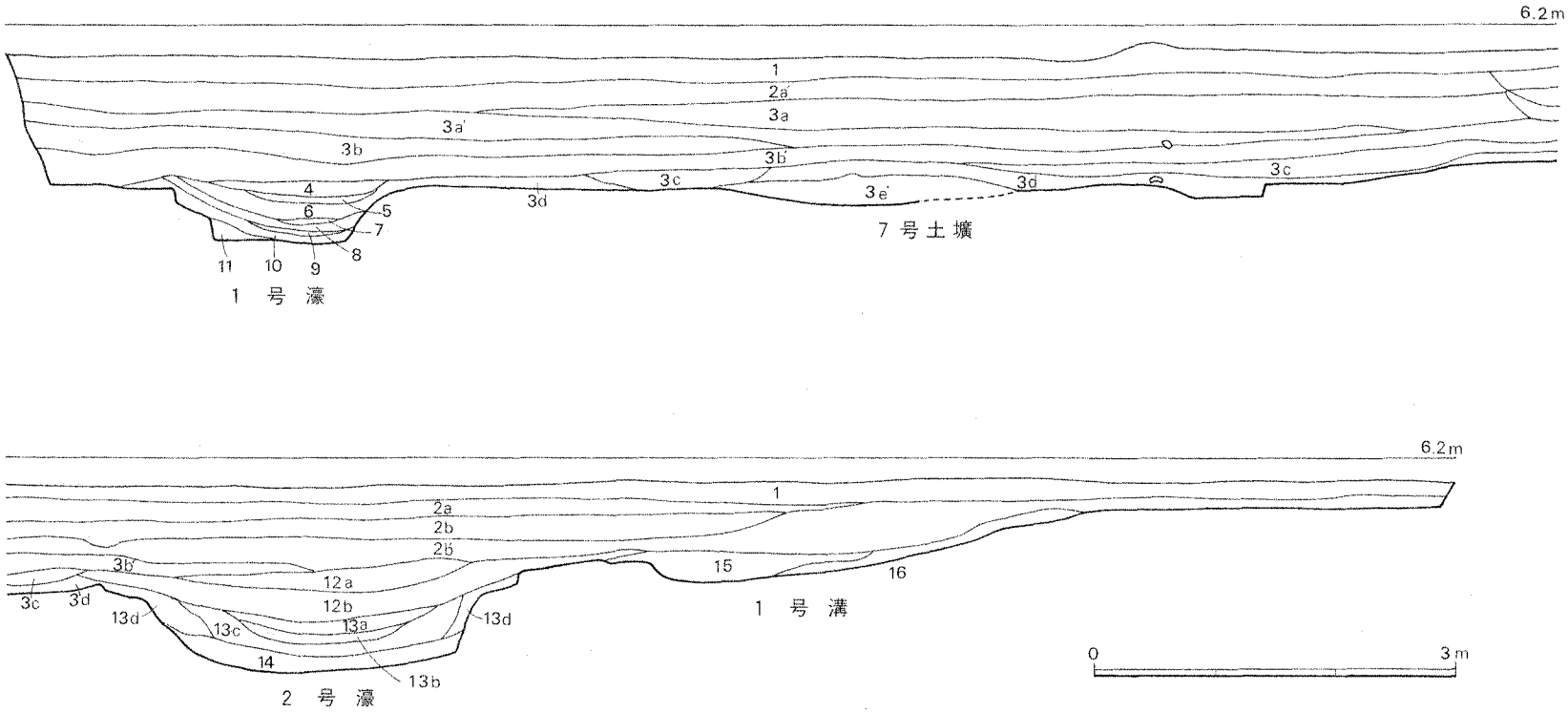
1. 灰褐色土層
2 a. にぶい赤褐色土層
2 b. 赤灰色礫層
2 c. 褐色土層
2 d. 灰赤色土層
3 a. 褐灰色粘質土層
3 b. 暗褐灰色粘質土層
4 a. 灰色粘質土層
4 b. 暗黄灰色粘質土層
4 c. 暗黄灰色粘質土層（4 b よりやや淡い）
5 a. 黄灰色粘質土層
5 b. 暗黄灰色粘質土層
5 c. 砂混褐灰色粘質土層
5 d. 暗褐灰色粘質土層
5 e. 褐灰色粘質土層
5 f. 暗灰色粘質層
6 a. 炭化物混暗灰色粘質土層
6 b. 褐灰色砂層
7 a. 灰色粘質土層
7 b. オリーブ灰色砂質層
7 c. 明灰黄色粘質土層
7 d. 淡灰黄褐色粘質土層
7 e. 灰黄色粘質土層
7 f. 明灰黄褐色粘質土層
7 g. 明灰黄褐色粘質土層
7 h. 灰黄褐色粘質土層
7 i. 灰色砂質層
7 j. 炭化物層
7 k. 褐灰色粘質土層
7 l. 暗褐灰色粘質土層
7 m. 黄灰色粘質土層
8. 褐灰色泥炭質層
9. 灰黄褐色粘質土層
10. 暗褐灰色粘質土層
11 a. 褐灰色粘質土層
11 b. 暗褐灰色粘質土層
12 a. 炭化物層
12 b. 黒褐色粘質土層
12 c. 暗灰黄色粘質土層
12 d. 炭化物層
12 e. 炭化物混暗褐灰色粘質土層
12 f. 炭化物層
12 g. 灰青色粘質土層
12 h. 暗灰黄色粘質土層
13. 暗褐灰色泥炭質層
14. 灰黄褐色土層
15. 褐灰色土層

第8図　B区北壁土層図（1／60）



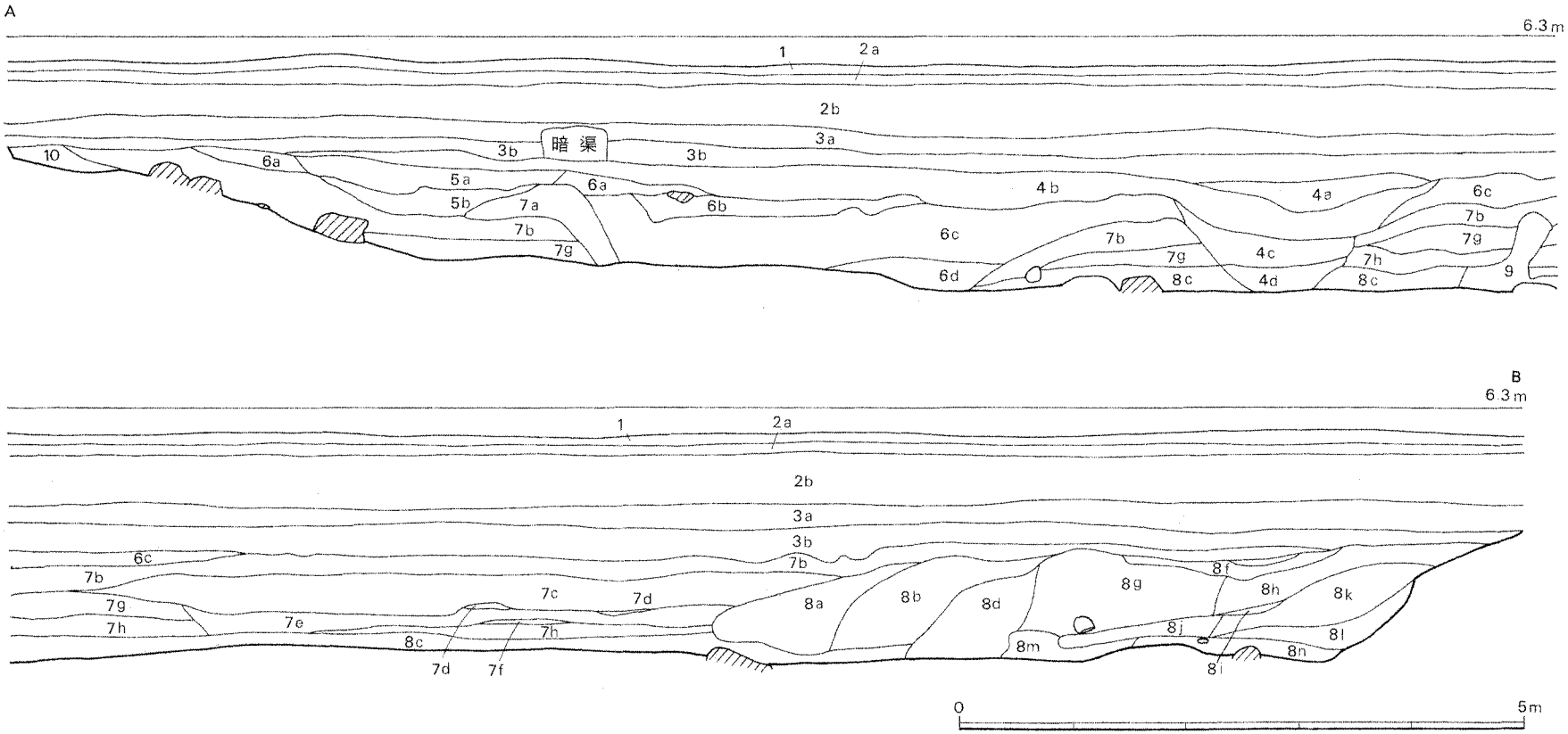
1．　灰黄褐色土層
2 a．にぶい黄褐色土層
2 b．褐灰色土層
3 a．黄灰色粘質土層
3 b．暗灰黄色粘質土層
4．　黒褐色粘質土層
5．　淡黄灰色粘質土層
6．　黄灰色土層
7．　暗黄灰色粘質土層
8．褐灰色砂礫層
9．にぶい褐色粘土混灰褐色砂礫層
10．炭化物混灰黄褐色砂質層
11．黄灰色砂質層
12．炭化物混褐灰色粘質土層
13．淡黄灰色砂質層
14．暗灰黄色砂質層
15．黄灰色土層
16．炭化物混暗灰黄色粘質土層

第９図　Ｅ区北壁土層図（１／60）



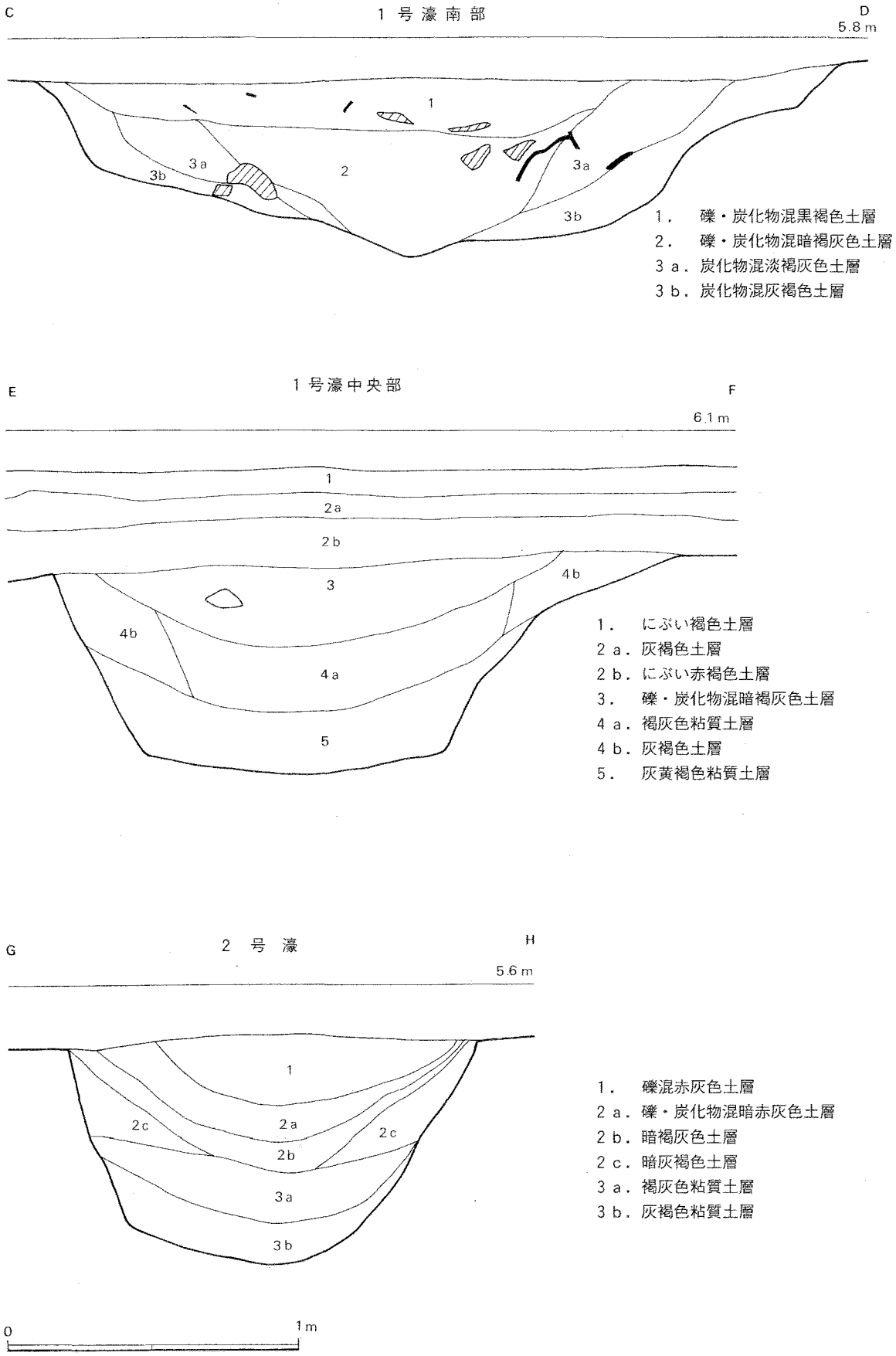
1．　にぶい褐色土層
2 a．灰褐色土層
2 a'．明灰褐色土層
2 b．にぶい赤褐色土層
2 b'．礫混にぶい赤褐色土層
3 a．褐灰色粘質土層
3 a'．明褐灰色粘質土層
3 b．礫混褐灰色粘質土層
3 b'．黄灰色粘質土層
3 c．暗灰色粘質土層
3 d．灰黄褐色粘質土層
3 e．炭化物層
3 e'．焼土・炭化物混灰黄色粘質土層
4．　暗灰色粘質土層
5．　炭化物層
6．　炭化物混灰色粘質土層
7．　炭化物層
8．　淡灰色粘質土層
9．　炭化物層
10．　暗灰色粘質土層
11．　灰オリーブ色粘質土層
12 a．礫混暗黄灰色粘質土層
12 b．礫混黒褐色粘質土層
13 a．礫混褐灰色粘質土層
13 b．淡褐灰色粘質土層
13 c．礫混黄灰色粘質土層
13 d．灰黄色粘質土層
14．　灰オリーブ砂質層
15．　礫混褐灰色土層
16．　礫混灰黄褐色土層

第10図　D区北壁土層図（1／60）

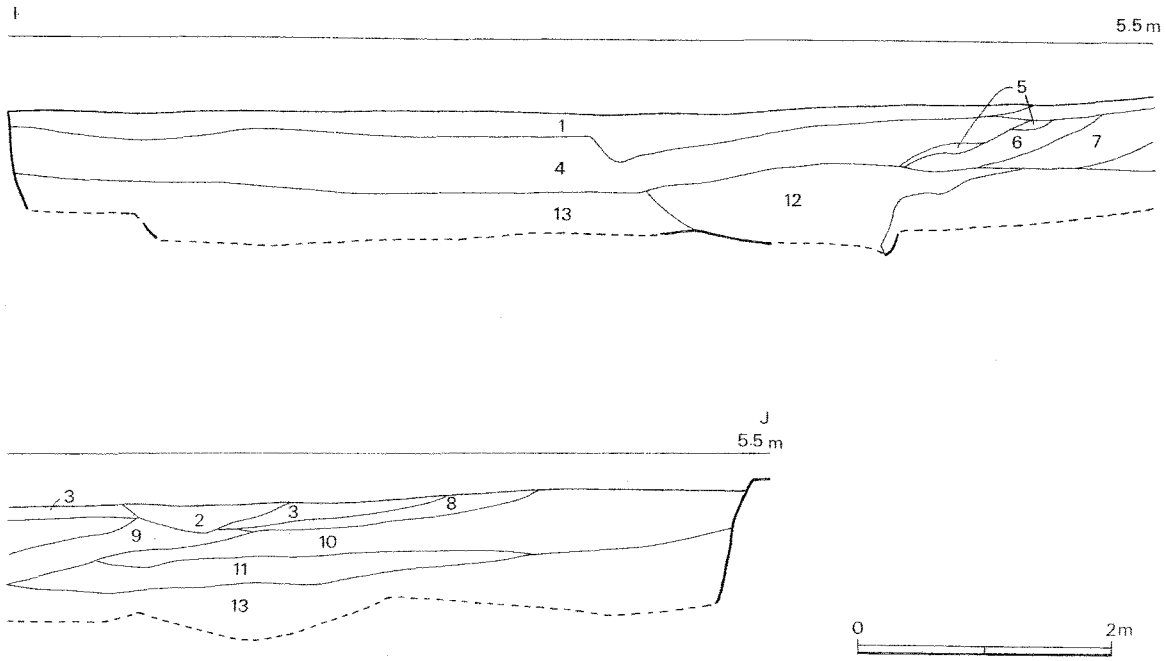


1．　灰褐色土層
2 a．にぶい赤褐色土層
2 b．灰赤色土層
3 a．褐灰色粘質土層
3 b．暗褐灰色粘質土層
4 a．褐灰色粘質土層
4 b．黄灰色粘質土層
4 c．砂混褐灰色粘質土層
4 d．褐灰色砂層
5 a．炭化物混褐灰色粘質土層
5 b．炭化物混淡褐灰色粘質土層
6 a．暗褐灰色粘質土層
6 b．灰黄色粘質土層
6 c．暗黄灰色粘質土層
6 d．褐灰色砂層
7 a．褐灰色粘質土層
7 b．灰黄褐色粘質土層
7 c．暗灰黄褐色粘質土層
7 d．炭化物層
7 e．褐灰色粘質土層
7 f．炭化物層
7 g．淡黄灰色粘質土層
7 h．黄灰色粘質土層
8 a．炭化物混淡褐灰色砂質層
8 b．炭化物混灰色砂質層
8 c．褐灰色泥炭質層
8 d．灰オリーブ砂質層
8 e．暗オリーブ灰色砂質層
8 f．褐灰色砂質層
8 g．炭化物混暗灰黄色砂質層
8 h．炭化物混灰色砂質層
8 i．炭化物層
8 j．灰色砂質層
8 k．炭化物混黄灰色土層
8 l．炭化物混灰黄褐色粘質土層
8 m．灰褐色土層
8 n．褐灰色泥炭質層
9．　暗褐灰色粘質土層
10．　礫混灰褐色粘質土層

第11図　1号旧河道土層図（1／60）

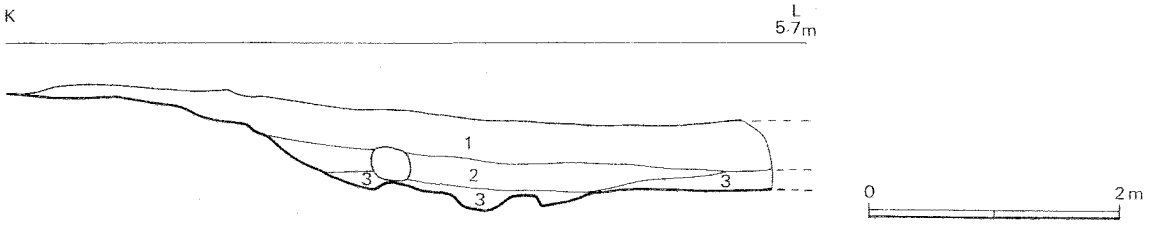


第12図 濠土層図（1／20）



1．黒褐色粘質土層
2．砂混淡褐灰色粘質土層
3．淡褐灰色粘質土層
4．褐灰色粘質土層
5．灰白色粘質土層
6．褐灰色粘質土層（4よりやや淡い）
7．褐灰色粘質土層（4よりやや暗い）
8．灰黄色粘質土層
9．黄灰色粘質土層
10．淡灰色粘質土層
11．灰色粘質土層
12．褐灰色粘土混灰黄褐色粘質土層
13．灰黄褐色粘質土層

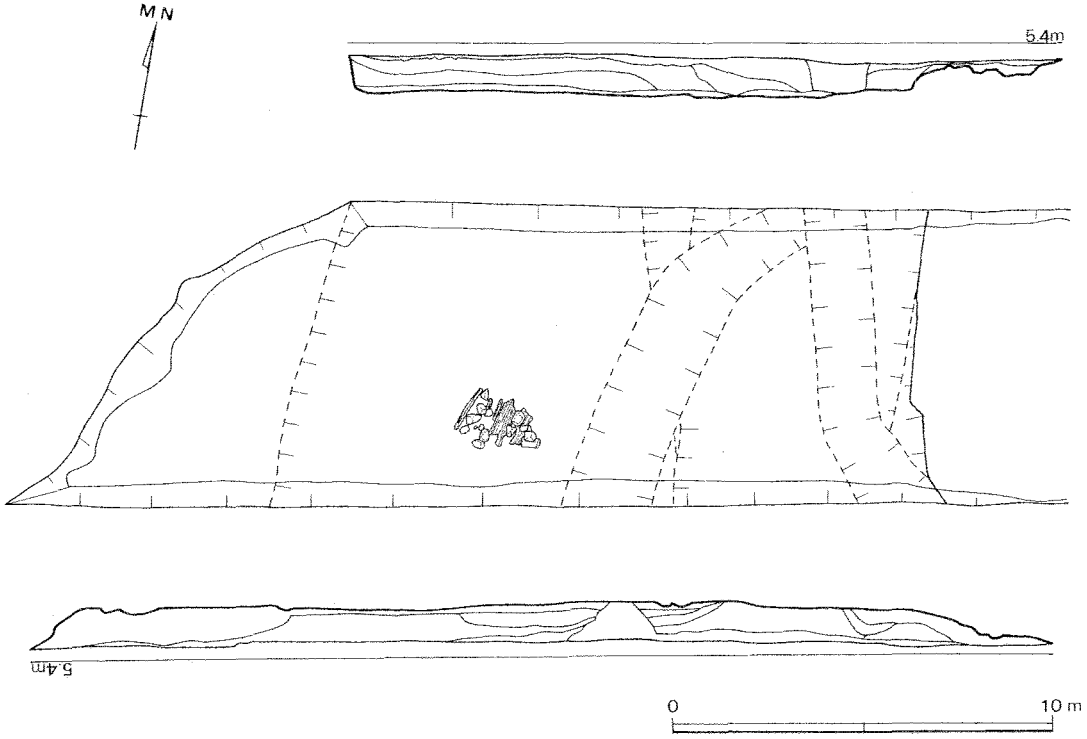
3号旧河道・2号溝土層図



1．灰黄褐色土層(一部砂質)（第9図10層と同じ）
2．褐灰色粘質土層（第9図12層と同じ）
3．暗灰黄色砂層（第9図14層と同じ）

土器溜土層図

第13図　3号旧河道，2号溝，土器溜土層図（1／30）

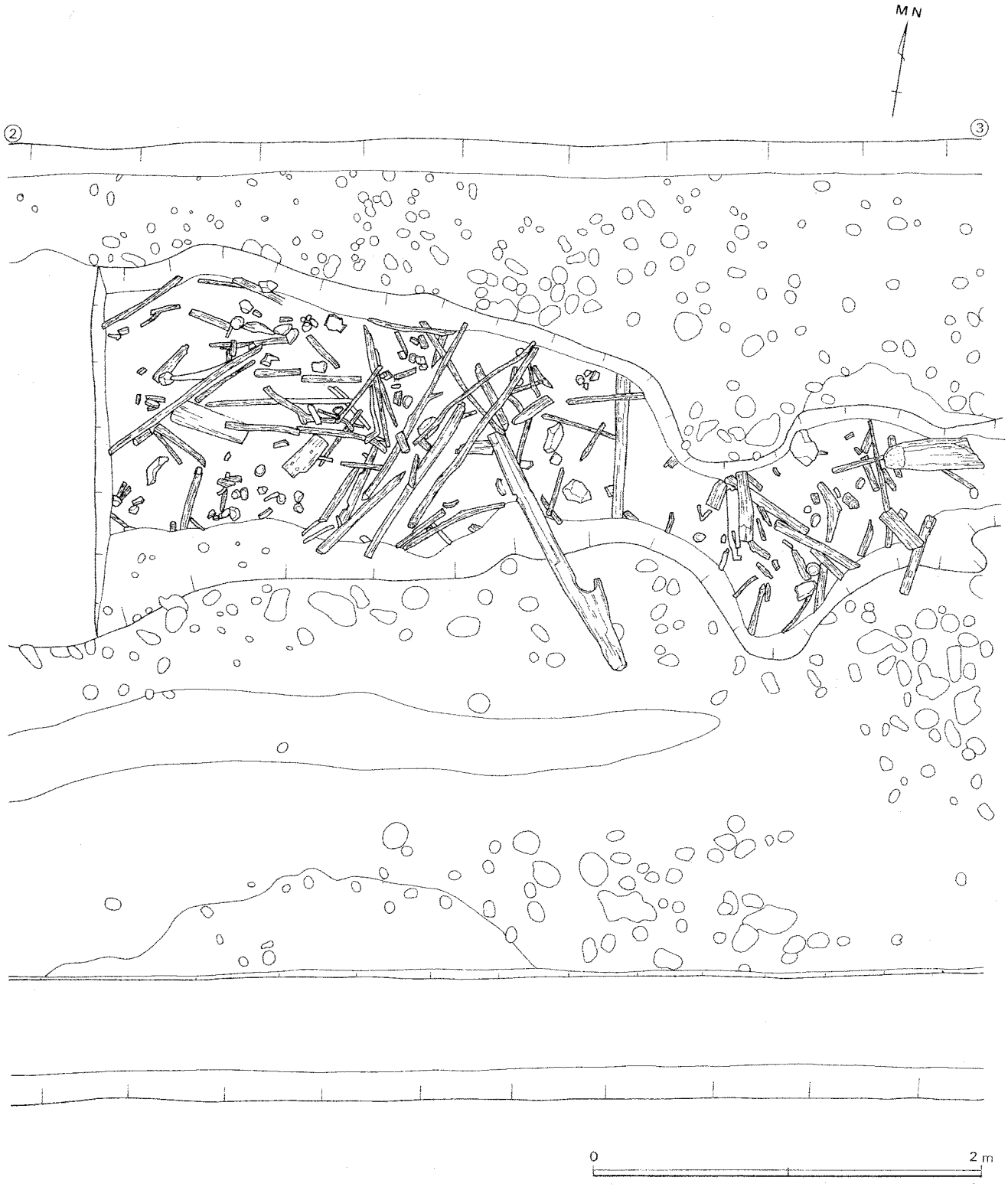


第14図　1号旧河道内流路（1／200）

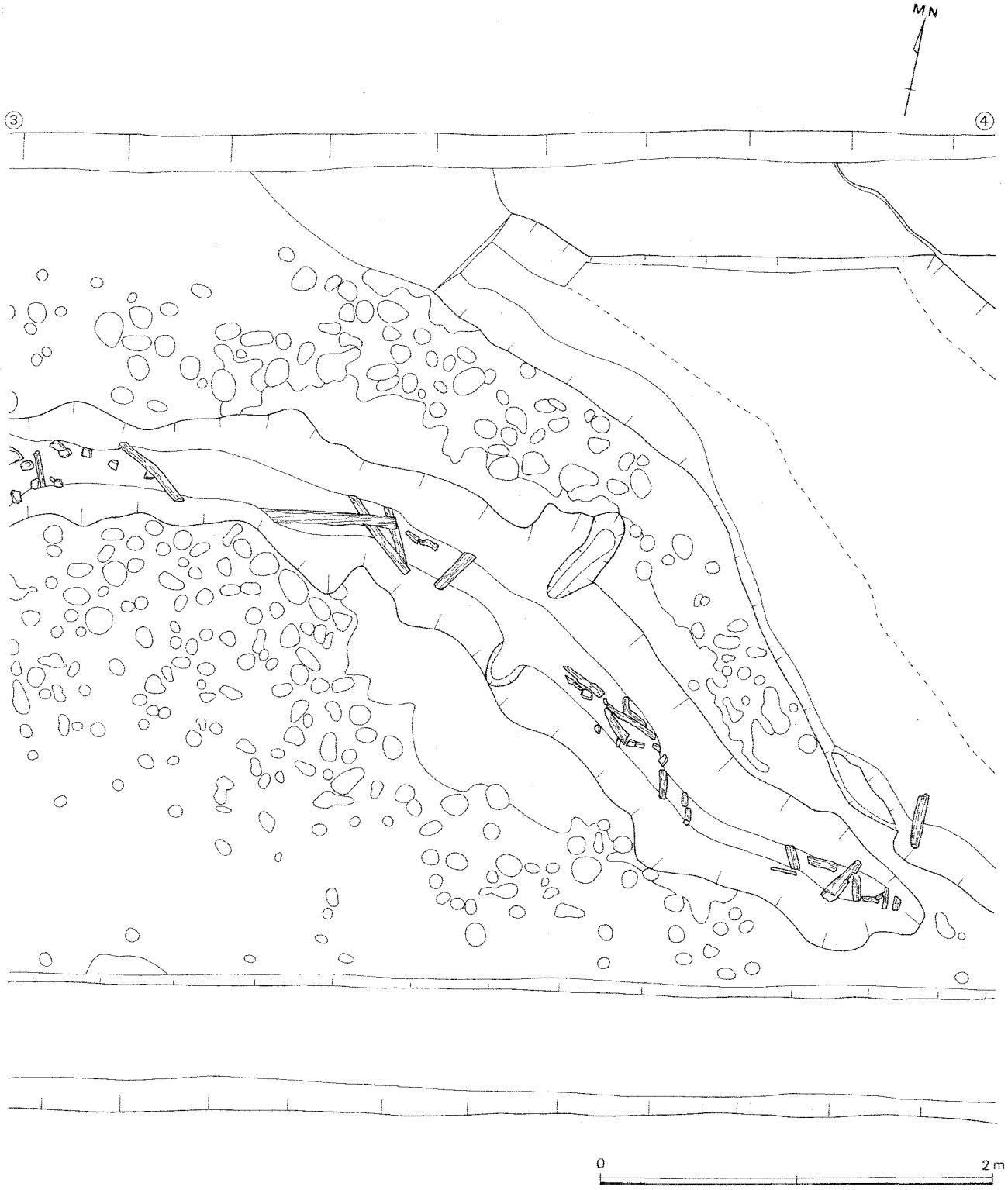
十印付近下層部状況

第15図　2号旧河道遺物出土状況（1／60）

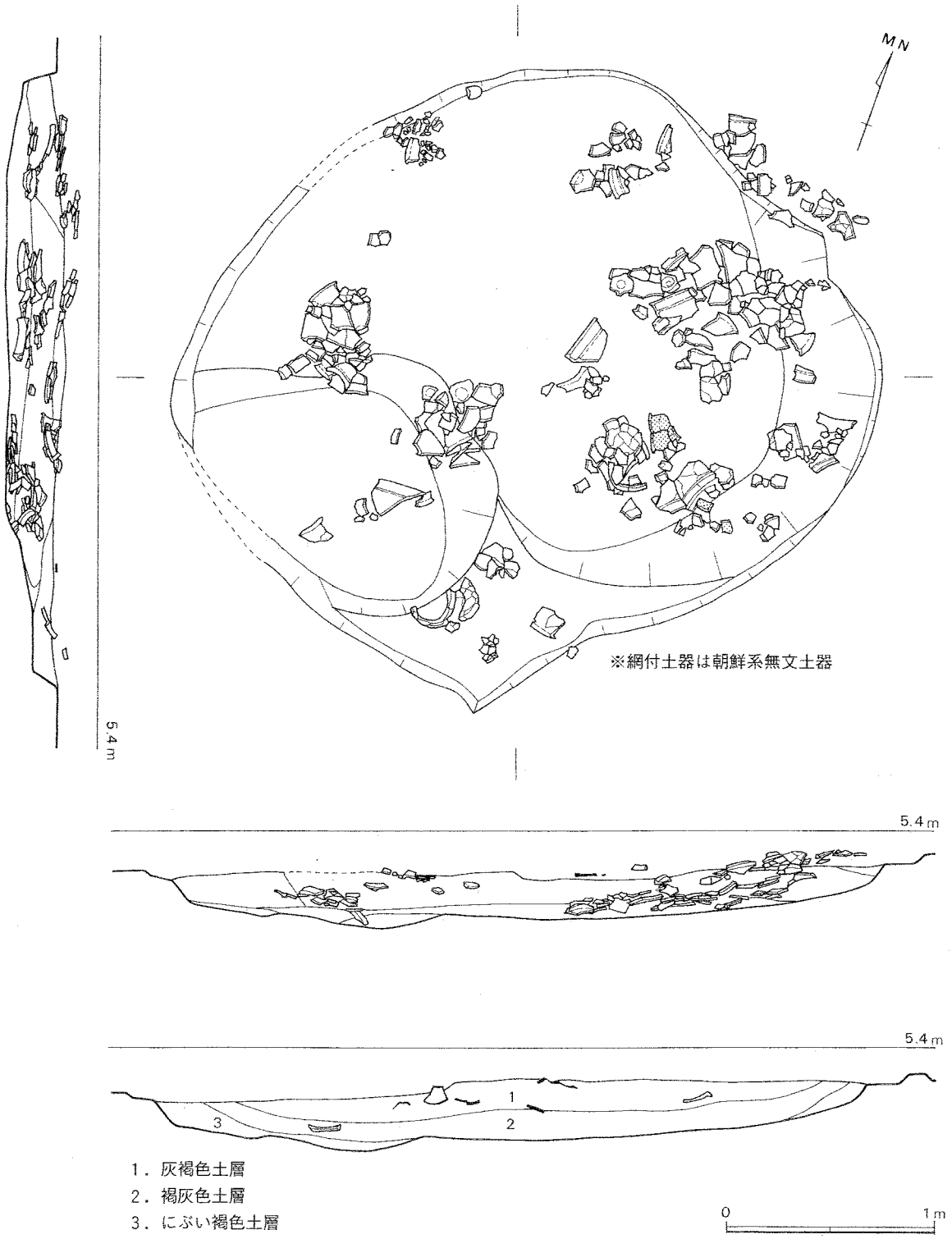
第16図　３号旧河道・２号溝遺物出土状況及び足跡状遺構①（１／60）



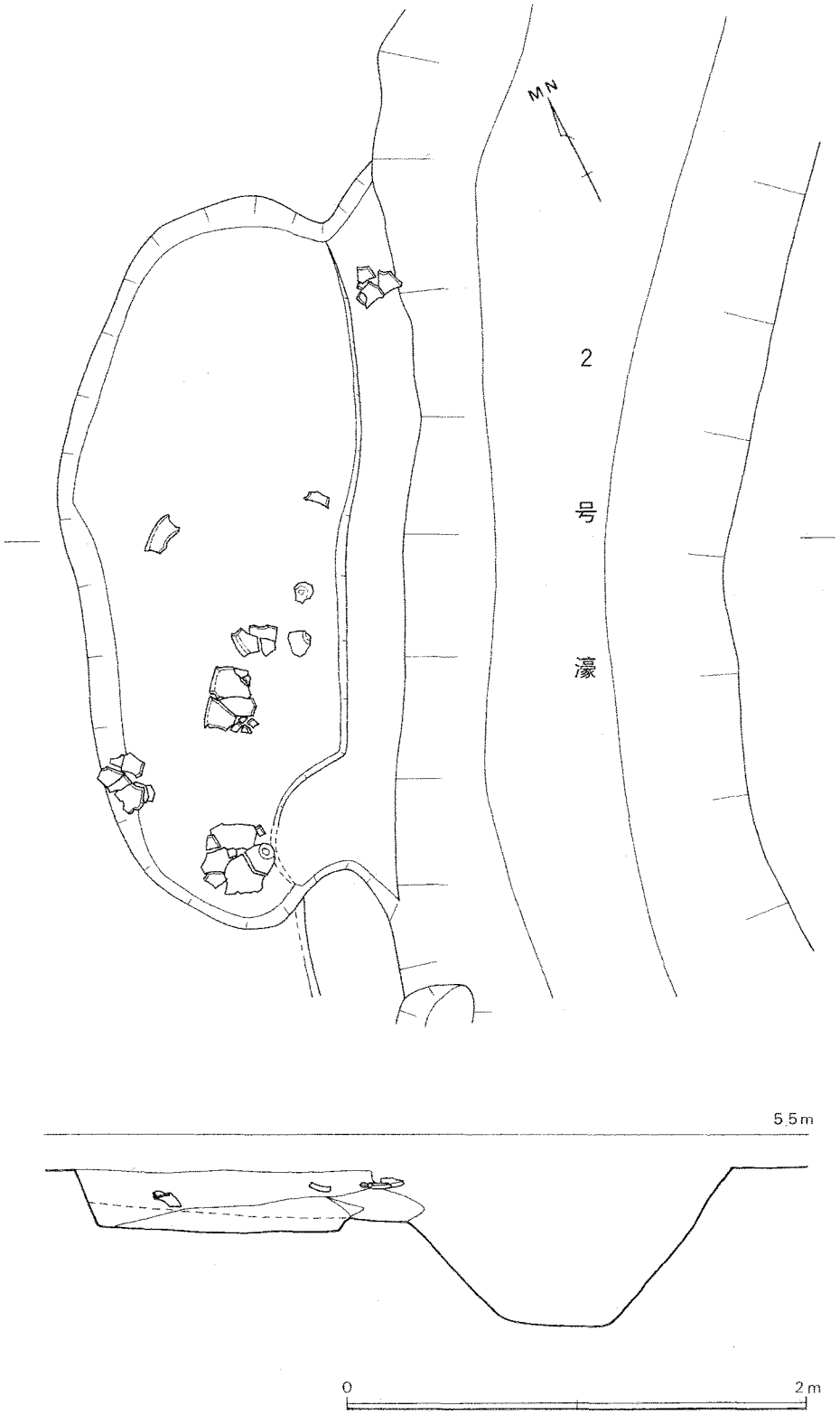
第17図　3号旧河道・2号溝遺物出土状況及び足跡状遺構②（1／60）



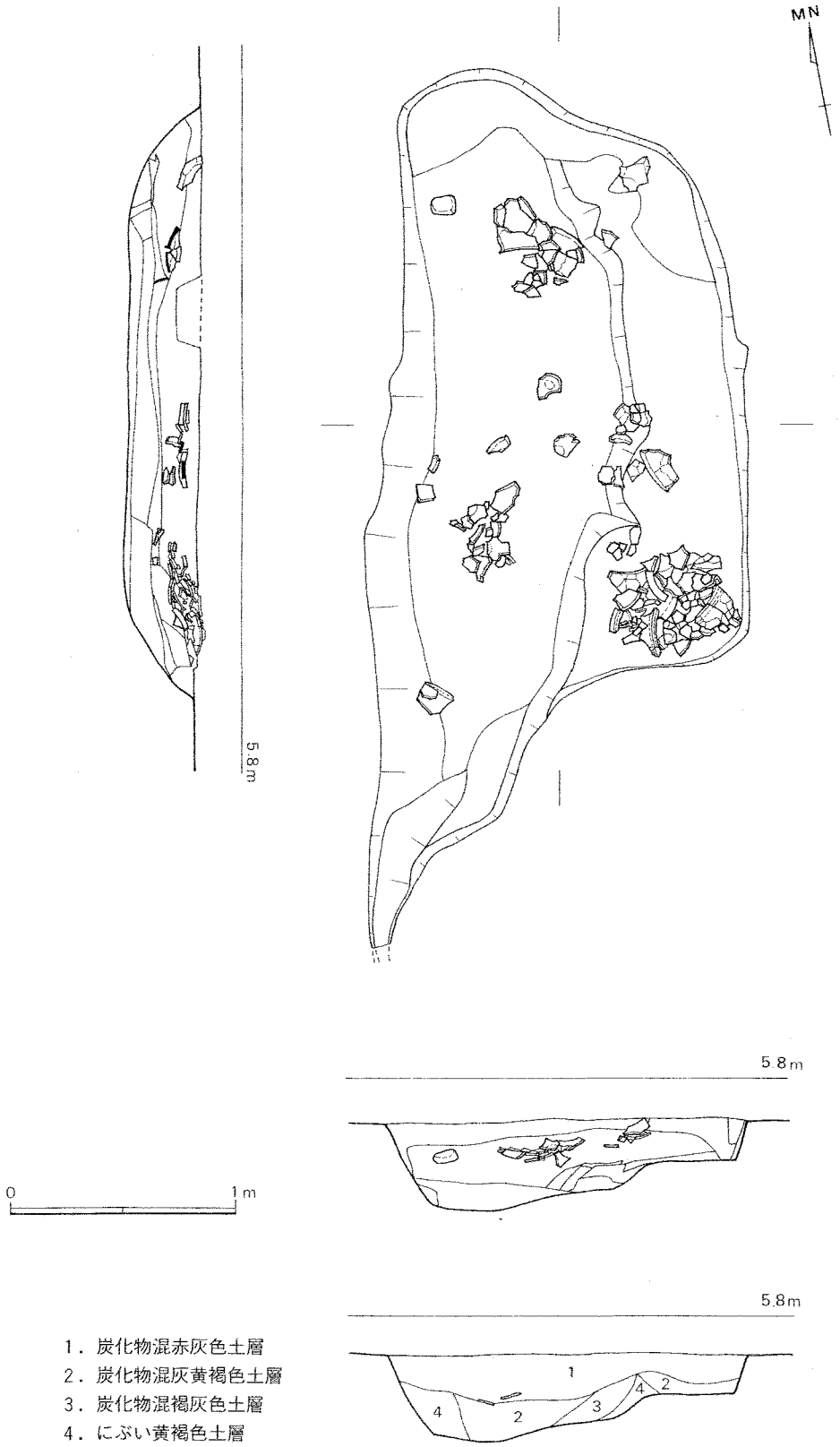
第18図　3号旧河道・2号溝遺物出土状況及び足跡状遺構③（1／60）



第19図　1号土壙実測図・土層図（1／30）



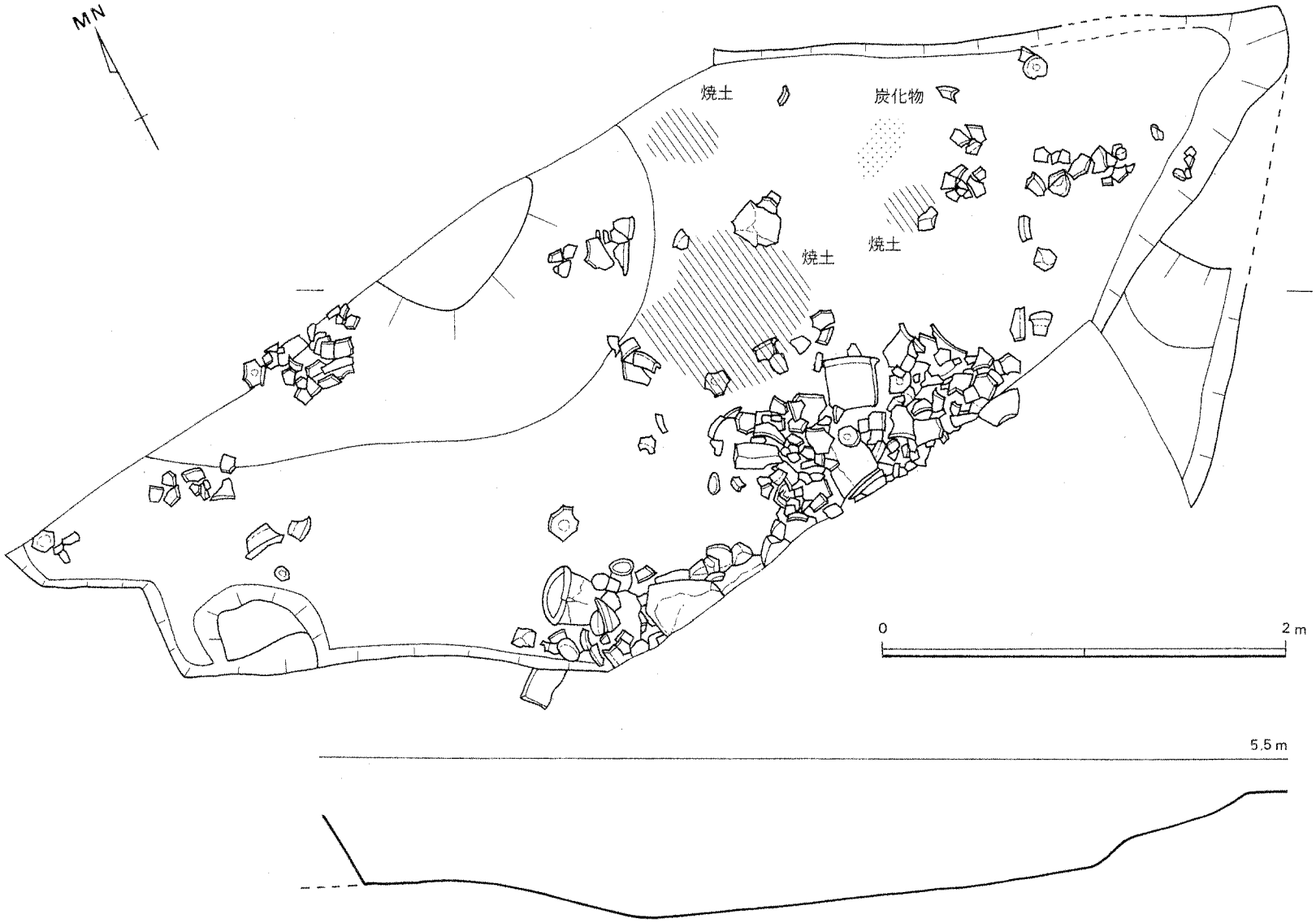
第20図　2号土壙実測図・土層図（1／30）



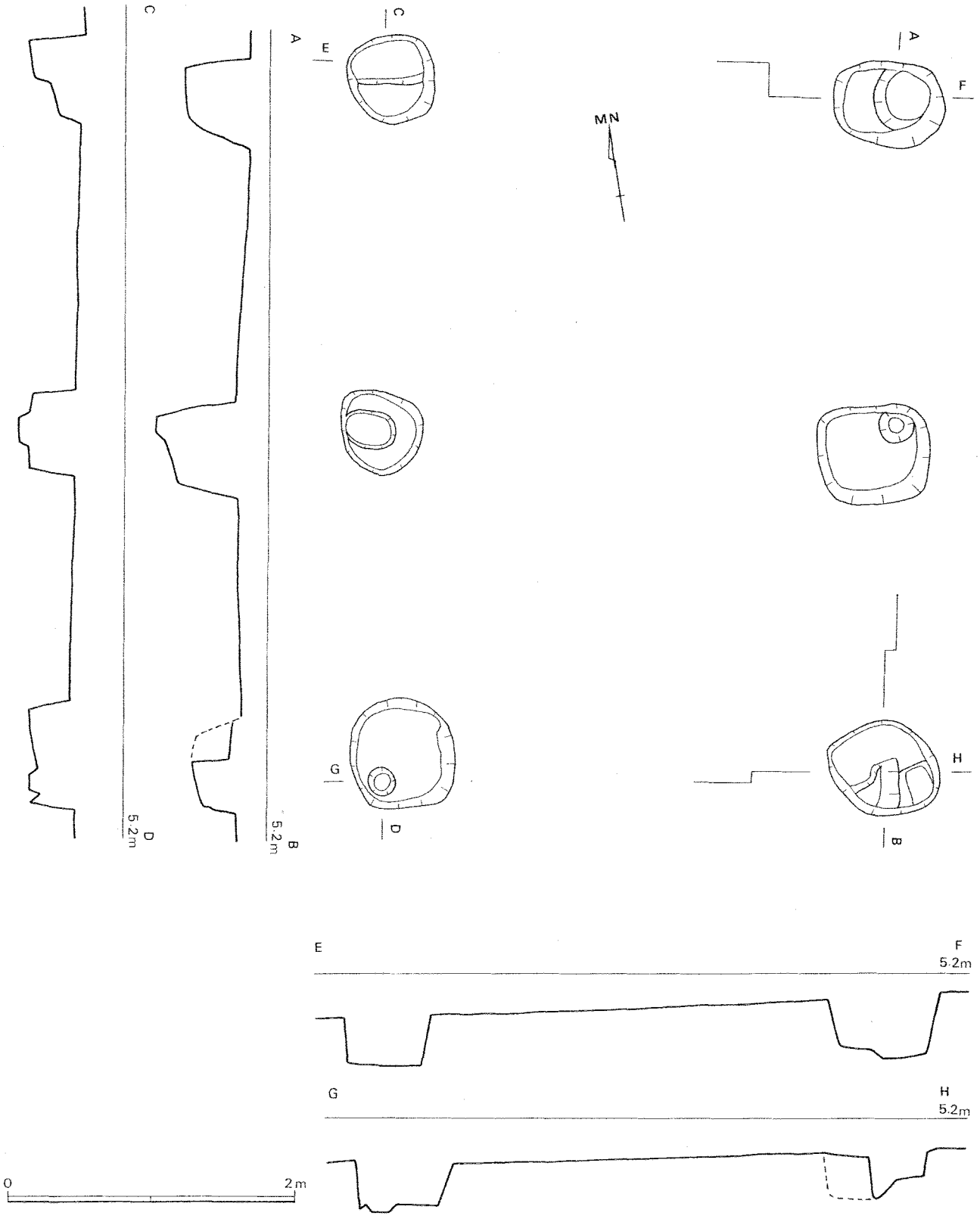
第21図　4号土壙実測図・土層図（1／30）

第22図　3号・5号土壙実測図（1／30）

第23図　6号土壙実測図（1／30）



第24図　7号土壙実測図（1／30）



第25図　1号建物跡実測図（1／40）

須玖Ⅰ式土器古段階から弥生時代後期末の土器が出土した。A区・C区・D区・B区で検出し，台地縁に沿うような形で北から南にくねりながら走り，B区内で止まる。台地を取り巻く多重環濠の内濠にあたる。一部の底を一段深く掘り下げているが，目的は不明である。

2号濠は，最大幅約3m，最深部約80cmを測り，長さ約30mを確認した（国補事業調査区分含む）。須玖Ⅰ式土器古段階から古墳時代前期の土器が出土した。A区・C区・D区で検出し，1号濠に沿うような形で北から南にくねりながら走り，D区内で止まる。多重環濠の中濠にあたる。

3号濠は，昨年度の船着き場付近水路等状況調査のC区で検出した濠に繋がるものである。弥生時代中期の遺物が出土した。昨年度は北東から南西に走り，そのまま1号旧河道と合流すると想定していたが，A区に入ったすぐの所で止まった。多重環濠の外濠にあたる。

昨年度の調査で，弥生時代後期の濠が河道に合流せず止まっている状況を確認したが，今回の調査で中期の濠もまた，河道と合流することなく止まることを確認することができた。溜まった雨水排水や河道と濠との間の防御上の隙間をどう処理したのかなどの問題の解明は今後の課題である。

また，1号濠と2号濠は弥生時代中期前半に掘られた後埋没していくが，後期になると再び掘り直されていることが，土層や遺物の出土状況から明らかである。昨年度の調査では，1号旧河道の西側微高地において，弥生時代後期に中期までの居住域が放棄され，かわって5条におよぶ濠が作られたことを確認した。原因は，「倭国大乱」の前哨戦から大乱に至る軍事的緊張の高まり等が考えられるが，この環濠の掘り直しもまた同じ原因に由来するものと考えられる。

4号濠は，最大幅約2m40cm，深さ約80cmを測り，長さ約11mを確認した。昨年度の船着き場付近水路等状況調査のE区で検出した弥生時代後期の濠に繋がるものである。掘られてしばらくして埋没していったが，一部を掘り直して農業用水に利用するため，雨水や最下部が切り込んでいる縄文時代の泥炭質層からの湧水を溜めたものと考えられる。

(3) 溝（第13図，第16図～第18図）

溝は，3条検出した。

1号溝はA区・D区・B区で検出し，1号旧河道東岸に沿って北から南に走る。最大幅約2m40cm，深さ約70cmをはかり，約30mを確認した（国補事業調査区分含む）。昨年度の船着き場付近水路等状況調査のC区で検出した溝に繋がるものである。今年度の国補事業調査不條地区調査区においても検出し，古墳時代前期の土器を出土している。古墳時代前期に1号旧河道が完全に埋め立てられ水田とされたのに伴って作られた，農業用の用排水路と考えられる。

2号溝はE区で検出した。古墳時代前期の水田と考えられる黒褐色粘質土を覆土とする。前述したように，この溝の下には弥生時代中期から後期にかけての3号旧河道があり，後期から古墳時代前期に埋め立てられて水田となったと考えられるが，本来この水田の用排水のための溝であった可能性が高い。途中に流れを調整するため板をはめ込んだと考えられる相対する窪みが岸から検出している。おそらく2号旧河道から水をひいたものであろうが，軟弱な地盤等のために不定形になってしまった

ものと考えられる。下の旧河道同様多くの木製品が出土した。

3号溝もE区で検出した。明確な時期を示す出土遺物はなかったが，2号溝を切っていること，層位的に3b層の下にあることから，古墳時代から古代にかけての溝であると考えられる。同時代の水田の用排水路と思われる。最大幅約1m，最深部約50cmをはかり，約12mを確認した。

(4) 土壙及び竪穴状遺構（第19図～第24図）

土壙は7基確認した。

1号土壙はA区で検出した。長径約3m40cm，短径約3m10cm，深さ約30cmである。須玖Ⅰ式土器古段階を主体とする。朝鮮系無文土器も出土した。

2号土壙はA区で検出した。長径約3m20cm，短径約1m30cm，深さ約20cmである。須玖Ⅰ式土器古段階を主体とする。2号濠に一部切られており，2号濠の掘られた時期の指標となる土壙である。

3号土壙はB区で検出した。長径約3m40cm，短径約2m50cm，深さ約40cmである。城ノ越式土器と須玖Ⅰ式土器が出土する部分と，須玖Ⅱ式土器が出土する部分が違うため，時期の異なる2基の土壙が重なり合っていると考えられる。4号濠に一部切られる。

4号土壙はB区で検出した。長径約3m70cm，短径約1m70cm，深さ約30cmである。須玖Ⅰ式土器古段階から須玖Ⅱ式土器を主体とする。

5号土壙はB区で検出した。長径約4m90cm，短径約2m50cm，深さ約50cmである。城ノ越式土器から須玖Ⅰ式土器古段階を主体とする。4号濠に一部切られる。

6号土壙はB区で検出した。長径約3m40cm，短径約2m40cm，深さ約35cmである。須玖Ⅰ式土器古段階を主体とする。朝鮮系無文土器も出土した。

7号土壙はD区で検出した。長径約4m20cm，短径約3m，深さ約50cmである。須玖Ⅰ式土器古段階を主体とする。

(5) 土器溜（第13図）

E区の2号旧河道西側にある微高地縁の，2号旧河道や3号旧河道に向う傾斜地で確認した。須玖Ⅰ式土器新段階から弥生時代後期末の遺物を主体とする。時期が混乱している遺物の出土状況から，この土器溜は純粋なものではなく本来の土器溜が崩されて旧河道の埋め立て等に使われたものと考えられる。しかしながら4枚もの貨泉が出土し（内1枚は2号旧河道から出土したが本来この土器溜にあったものが混入したと考えられる），楽浪系馬車具や卜骨も出土しているため，この微高地は何らかの祭儀的空間であり，そのための施設も存在したものと考えられる。今後の調査が期待される。

(6) 1号建物跡（第25図）

A区の中央やや西よりの，3号濠と1号旧河道の間を埋めるような位置で確認した。2×1間の掘立柱建物で，桁行約5m，梁行約3.5mを測る。柱穴の掘方は径約60～75cmを測る。主軸方位はN8°

Eを測り，３号濠の走る方向とほぼ同じである。位置関係から，濠と旧河道間の防御的隙間を埋めるやぐらであった可能性が高い。

(7) 足跡状遺構（第16図～第18図）

E区で２号溝内とその両側の地区において，多くの人の足跡や牛の蹄跡と見られるものが検出した。これらの足跡状遺構は覆土の色から２種類に分けられる。黒褐色のものと暗灰黄色のものである。黒褐色のものは古墳時代前期の水田のもので，暗灰黄色のものは３ｂ層と同じものであるので古墳時代から古代にかけての水田のものと考えられる。つまり古墳時代前期の水田は，この地区に次の古墳時代から古代にかけての水田が作られる際に削平をうけたが，窪んでいた２号溝の部分と下層土であるその下の層に深く刻まれた足跡は残り，さらにこの下層土は古墳時代から古代にかけての水田の下層土にもなったため，暗灰黄色の足跡も加わったと考えられる。

(8) その他

A区の２号濠と１号旧河道間の部分とB区の１号旧河道西岸以西の部分で多くの柱穴状小穴を検出した。そのうちB区１号旧河道西岸以西の部分の１箇所で碇石を転用した石製礎盤を確認した。

3．遺　物

今回の調査では，コンテナ599箱分175,582点の遺物が出土した。その数量的な内訳は，土器・陶磁器169,812点，石器・石製品3,848点，金属製品27点，木製品176点，骨角製品11点である。出土遺物の大半を占める土器・陶磁器から説明を行う。

(1) 土器・陶磁器

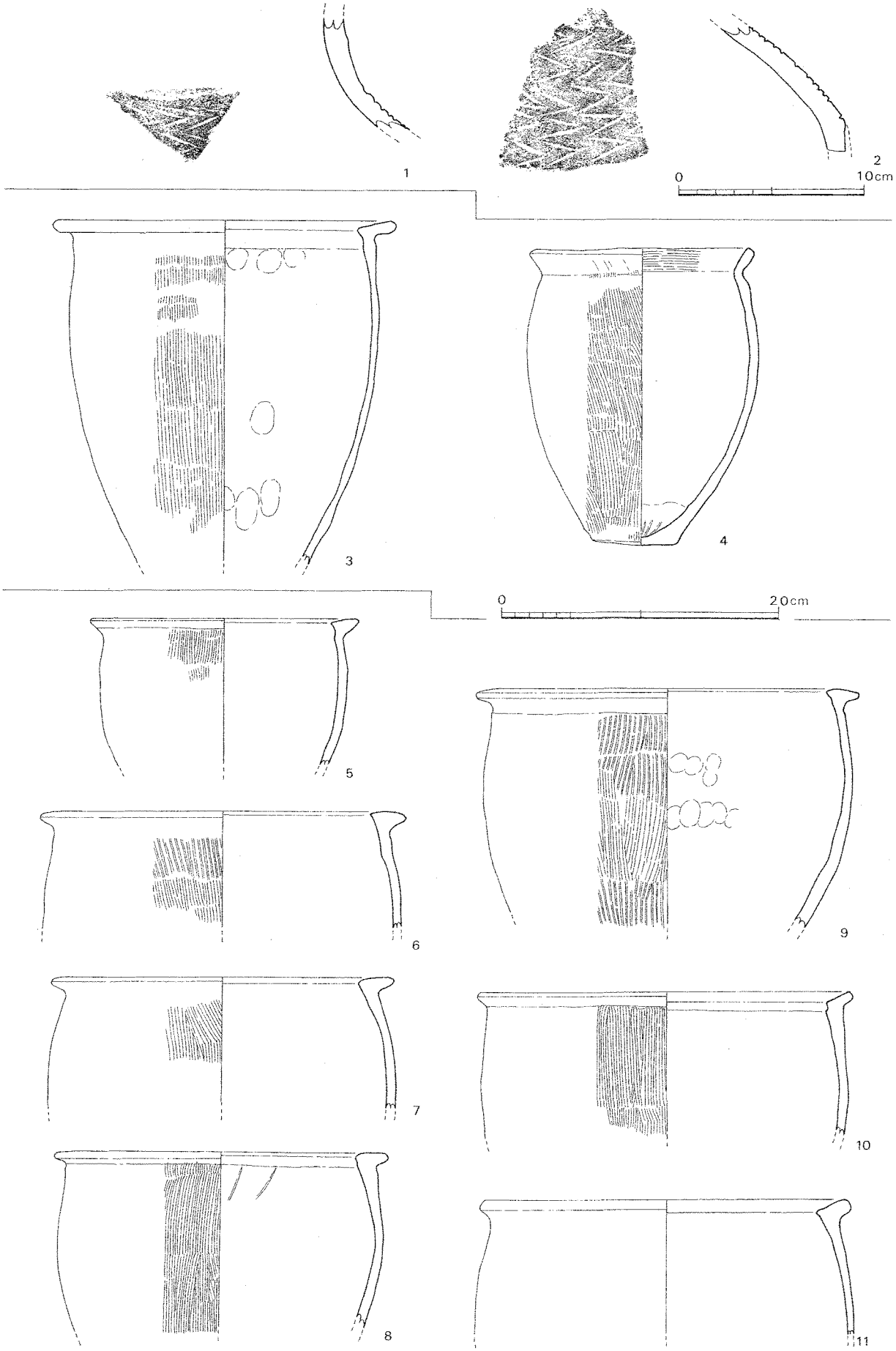
①A区1号旧河道出土土器（第26図）

1・2は，胴部にヘラ描きの羽状文を施す壺片である。淡橙色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石を含む。同一個体資料である。A12区Ⅳ層出土。いわゆる弥生前期末の高槻式である。

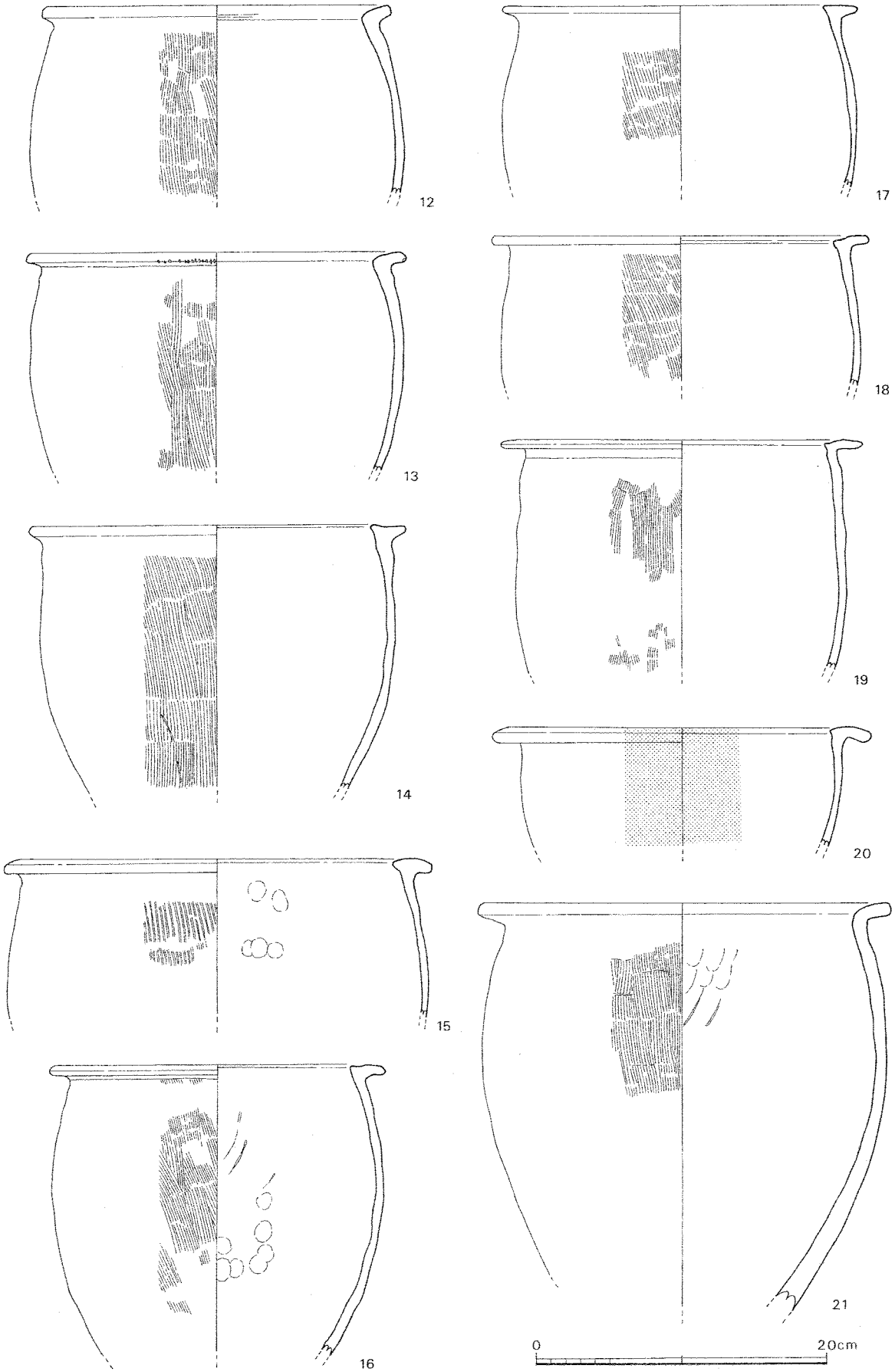
3・4は，甕である。3は，逆L字形の口縁部で，胴部には張りをもたない。灰黄褐色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を含む。A11・12区Ⅳ層出土。弥生中期須玖Ⅰ式新段階の資料である。4は，「く」の字形口縁の甕で，底部は薄い凸レンズ状底をなす。にぶい橙色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。A11・12区Ⅳ層出土。弥生後期中頃の資料であろう。

②B区1号旧河道出土土器（第26図～第32図）

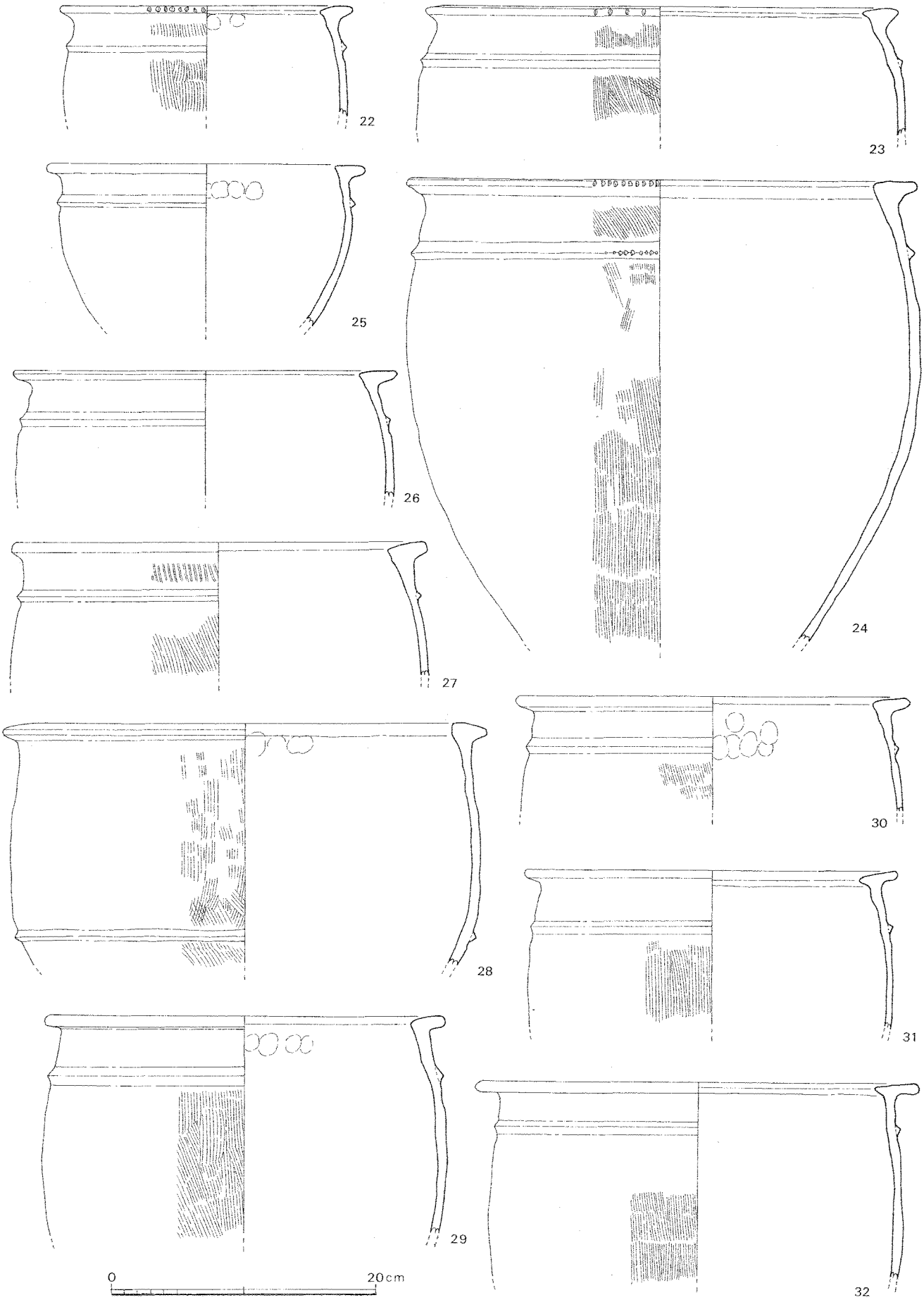
5～43は，甕である。5～9は，断面三角形の口縁の甕である。色調は，5・8・9が灰褐色，6がにぶい赤褐色，7がにぶい橙色である。胎土には，5が石英・長石・金雲母，7が石英・長石・角閃石，他は石英・長石・角閃石・金雲母を含む。6がⅣc層の他は，Ⅳd層出土。弥生前期初頭の城ノ越式の資料である。10～13は，逆L字形の短い口縁で，上方が内側に傾斜している資料である。外面はハケメ調整されるが，11は平滑ナデ仕上げされている。色調は，10が褐灰色，11が灰褐色，他がにぶい橙色を呈する。胎土には，11が石英・長石・角閃石を含む他は，石英・長石・角閃石・金雲母を含む。12がⅣd層の他は，Ⅳc層から出土している。弥生中期須玖Ⅰ式古段階の資料である。14～19は，逆L字形および鋤先形口縁の甕である。色調は14が褐灰色，15・17が灰黄褐色，16が褐灰色，18がにぶい橙色，19が灰黄色を呈する。胎土には，15・19が石英・長石・角閃石を，他は石英・長石・角閃石・金雲母を含む。15がⅣd層，17がⅣb層の他は，Ⅳc層出土。14・15・17は，須玖Ⅰ式古段階の，18が須玖Ⅰ式新段階，16・19が須玖Ⅰ式新段階～須玖Ⅱ式古段階の資料であろう。20は，鋤先形口縁の丹塗甕である。にぶい黄橙色の色調で，石英・長石・角閃石・金雲母を胎土に含む。Ⅳb層出土。21は，屈曲口縁の甕で，胴下半は器面が剥離している。内面にはヘラ痕がみられる。にぶい黄橙色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母・赤色砂を含む。須玖Ⅱ式古段階の資料であろう。Ⅳa層出土。22～32は，胴部に断面三角形の突帯をもつ甕である。22～24は，断面三角形の口縁に刻目を施す資料で，24は胴部突帯にも刻目を施している。色調は，22がにぶい赤褐色，23がにぶい褐色，24が灰黄褐色を呈し，胎土に22が石英・長石・角閃石を含み，他は石英・長石・角閃石・金雲母を含む。いずれもⅣc層出土で，城ノ越式の資料である。28は，断面三角形の口縁の甕で，胴下半に突帯をもつ。褐灰色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。Ⅳb層出土で，城ノ越



第26図　1号旧河道出土土器①（1／3，1／4）



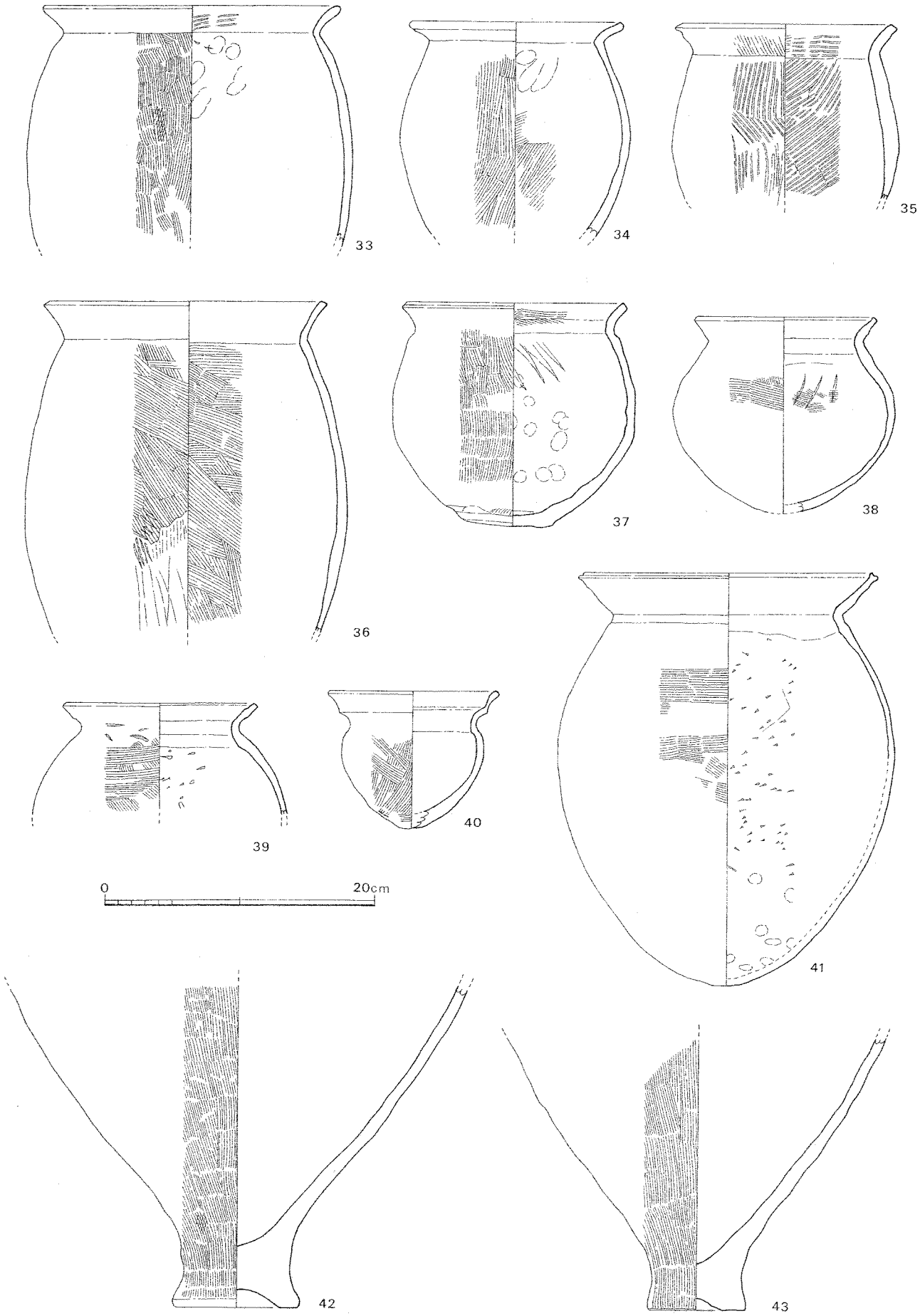
第27図　1号旧河道出土土器②（1／4）



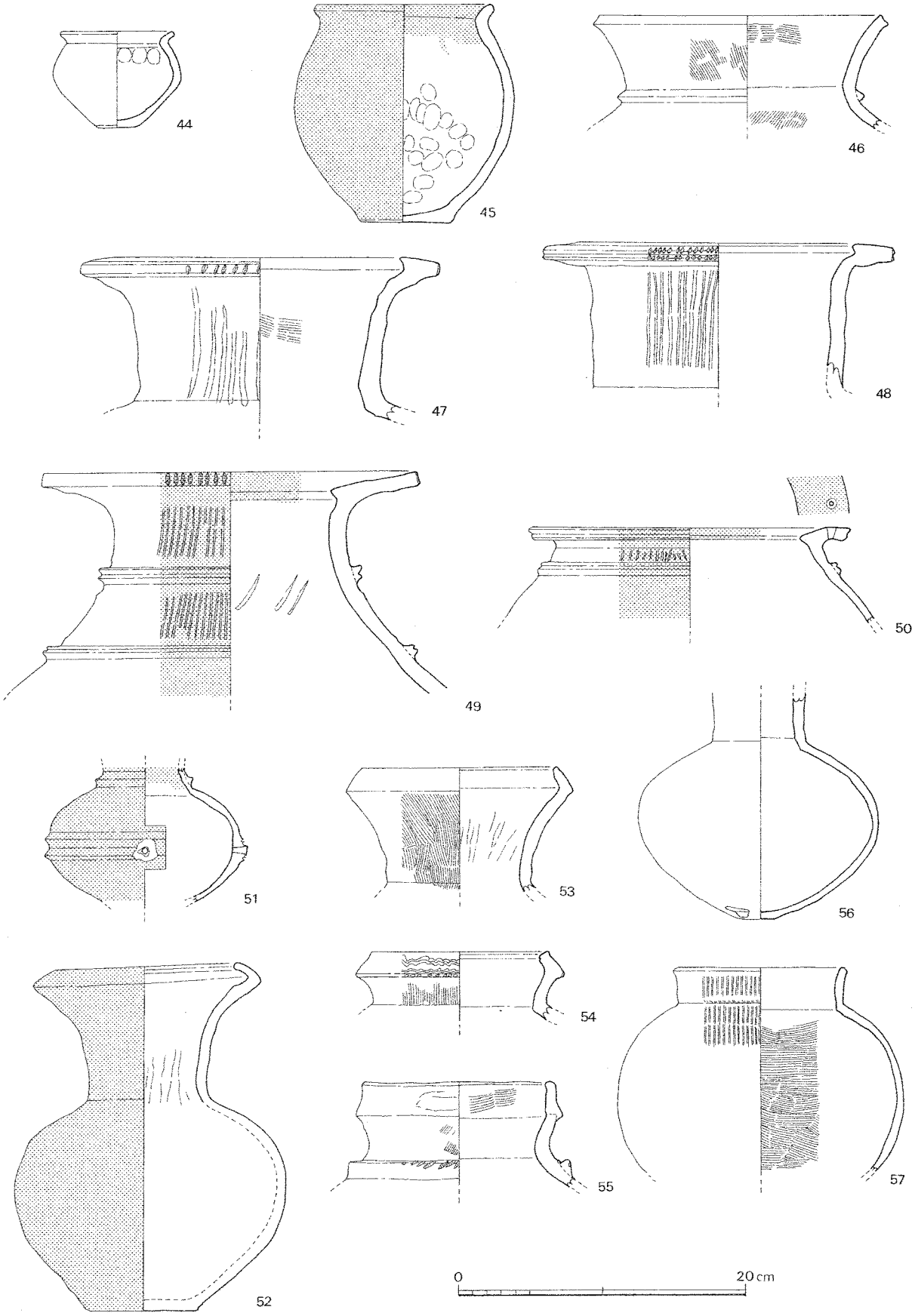
第28図　1号旧河道出土土器③（1／4）

式の資料であろう。25～27，29・30は，逆L字形口縁の甕である。色調は，26・30が褐灰色，27が灰褐色，29がにぶい赤褐色を呈する。胎土には，26が石英・長石，29・30が石英・長石・角閃石・金雲母，27が石英・長石・角閃石・金雲母・赤色砂を含む。33～37は，「く」の字形口縁の在地系甕である。胴部外面は，ハケメ調整されるが，35と36は下半部がナデツケ状のケズリが行われていて，タタキ痕が一部残る。37は球形の胴部で，底部が凸レンズ状底をなす。内面にはヘラ痕と指オサエ痕が残る。色調は，33・35が褐灰色，34がにぶい橙色，36が灰褐色，37が灰白色を呈する。36がⅢ層，33・37がⅣａ層，34がⅣｄ層，35がⅣｂ層出土。33・34が弥生後期前半，37が後期中頃～後半，35・36が後期後葉～古墳初頭の資料であろう。38～41は，古墳前期の甕である。38・39は，布留傾向甕で，胴部に細かいハケメが残る。38は橙色，39はにぶい黄橙色の色調で，胎土に38は石英・長石・角閃石，39は石英・長石・金雲母を含む。38はⅣａ層，39はⅣｂ層から出土。古墳前期初頭の庄内式～布留式にかけての資料である。40は，二重口縁の小形甕で，山陰系の資料である。黄灰色を呈し，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。Ⅳｂ層出土。41は，卵形胴部の布留式甕である。灰黄褐色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。Ⅳｄ層出土。柳田康雄氏編年（以下柳田編年）のⅡｂ式の資料であろう。42・43は，甕の脚台状の底部である。42は褐灰色，43はにぶい橙色を呈し，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。42はⅣｃ層，43はⅣｂ層出土。城ノ越式の資料である。

44～61は，壺である。44～46は，広口の単口縁の壺である。44,小形品で，いぶしたように黒色を呈する。胴部外面は，上半がヨコミガキ，下半がタテミガキを施している。胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。Ⅳｃ層出土。中期初頭～前半期の資料であろう。45は，丹塗りの上に黒塗りを施した壺である。にぶい橙色の色調で，石英・長石を胎土に含む。Ⅳｂ層出土。弥生後期初頭の資料であろう。46は，口頸部が逆ハの字形に開く壺で，頸胴界に断面三角形の突帯を巡らしている。橙色の色調で，石英・長石・角閃石を含む。Ⅳｂ層出土。後期前半の資料であろう。47～50は鋤先形口縁の壺である。47・48は短い鋤先形口縁で，刻目を施す。頸部には，縦位の暗文を全周に施す。47は，にぶい橙色，48は褐灰色を呈し，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。47はⅣｂ層，48はⅣｃ層出土。中期前半期の資料であろう。49と50は，鋤先形口縁の丹塗壺で，49は口縁端部に刻目を施している。50の口縁上方には，焼成前の小さな穿孔がみられる。両者ともに，口縁下のM字突帯間に，細い暗文を施している。49はにぶい黄橙色，50はにぶい橙色を呈し，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。49がⅣｂ層,50がⅣｄ層出土。弥生中期末の資料であろう。51は，注口の丹塗壺の胴部である。断面三角形の２条の突帯間に注口が剥落した痕跡が認められる。孔は貫通している。にぶい黄橙色を呈し，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。52～55は，複合口縁の壺である。52は，内湾ぎみに口縁が屈曲する長頸の丹塗壺で，内面にしぼり痕が残る。橙色の色調を呈し，石英・長石を胎土に含んでいる。53は「く」の字形に口縁が屈折する長頸壺で，頸部内面にしぼり痕が入る。灰白色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。54・55は短い頸部資料で，54の口縁には櫛描波状文を施している。55は，口縁は直立ぎみに立ち上がるが，いびつで粗いつくりである。54はにぶい橙色，55は灰褐色を呈し，胎土に54は石英・長石・角閃石・赤色砂，55は石英・長石を含む。52



第29図　1号旧河道出土土器④（1／4）



第30図　1号旧河道出土土器⑤（1／4）

はⅣａ層，53はⅣｄ層，54はⅢ層，55はⅣｂ層出土。52は弥生後期初頭，53は後期前半～中頃の資料であろう。54と55は，山口県付近の資料であろうか。56は，頸の上半を欠く長頸壺で，小さな平底がつく。胴部は，上半が斜位のミガキ，下半がタテミガキを施している。底部付近と胴部に焼成後の穿孔が認められる。にぶい橙色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を含む。Ⅲ層出土。弥生後期末の資料であろう。57は，直口壺である。外面は，上半が細かい縦位暗文，下半がヨコミガキを施している。胴部内面には，細かいハケメ調整がなされる。非常に丁寧なつくりである。黄灰色の色調で，胎土に石英・角閃石・金雲母・褐色砂を含む。Ⅳｂ層出土。古墳前期初頭の資料であろう。58は，朝顔形に大きく開く口縁の壺で，口縁端部の下方が突出するもので，頸部から胴部外面はタテミガキが施されている。にぶい橙色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。Ⅳｂ層出土。瀬戸内系の影響を受けた壺であろうか。59は，庄内式系の二重口縁壺の口縁部片である。二対の円形浮文と櫛描波状文を施している。灰オリーブ色を呈し，胎土に石英・長石・角閃石を含む。Ⅳｂ層出土。60・61は，山陰系の二重口縁壺である。60は，胴部に焼成後穿孔がみられる。60はにぶい黄橙色，61は橙色の色調を呈し，胎土に60は石英・長石・角閃石・金雲母，61はそれに赤色砂を含む。60はⅢ層，61はⅣａ層出土。古墳前期布留式の資料である。

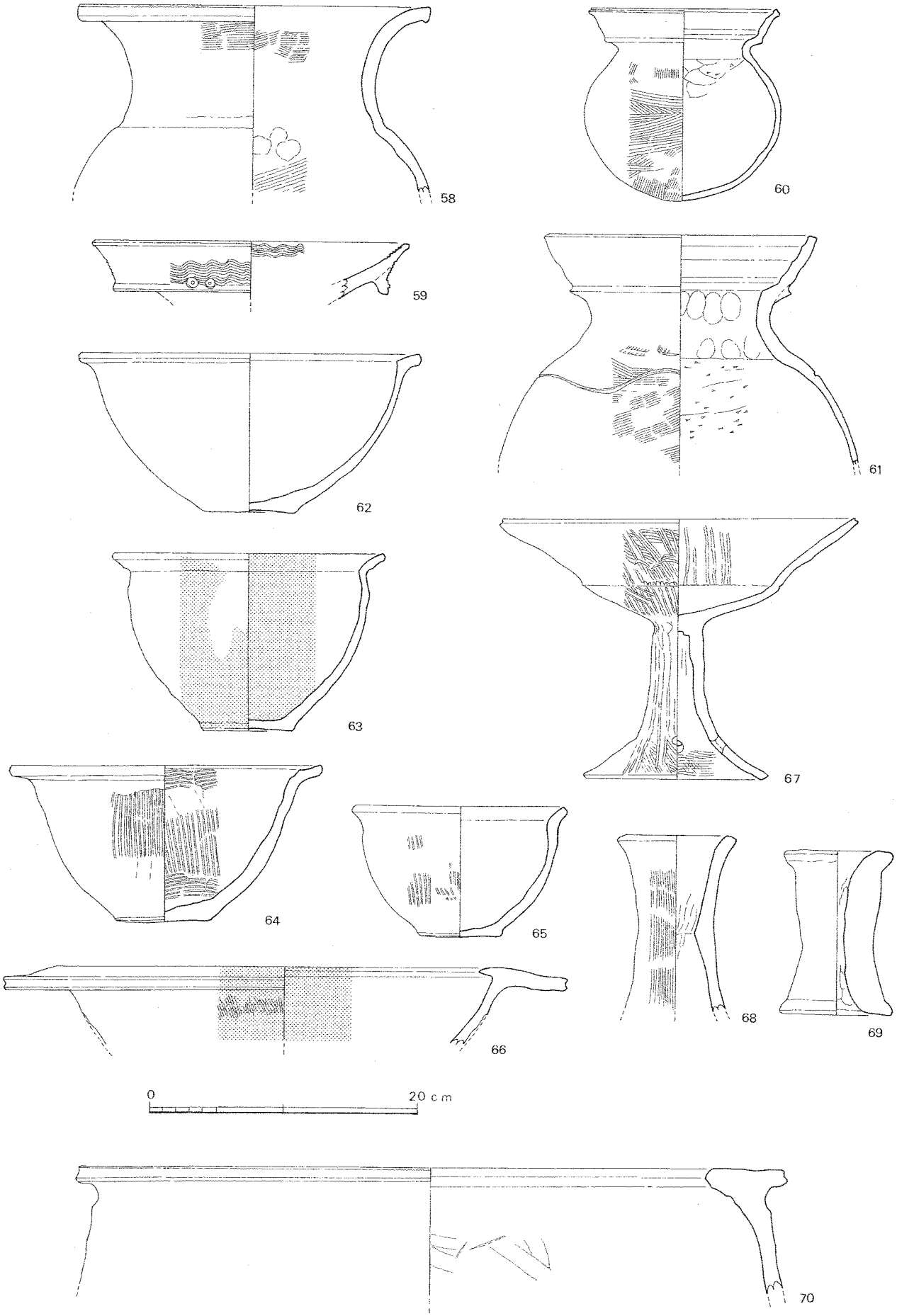
62～65は，鉢である。62は，逆Ｌ字形口縁の鉢で，胴下半はタテミガキを施している。63～65は，「く」の字口縁の鉢である。63は丹塗土器で，部分的に黒塗りの痕跡が残る。64は，胴下半部がハケメをヘラ状具でナデ消している。65も外面をハケメの後にヘラで縦にナデ消している。62は褐灰色，63と64はにぶい橙色，65はにぶい黄橙色の色調で，胎土に64が石英・長石・金雲母，62・63が石英・長石・角閃石・金雲母，65はさらに赤色砂を含む。62と63はⅣｃ層，64と65がⅣｄ層出土。62・64は中期前半の資料で，64は擬無文土器の可能性をもつ。63は後期初頭，65は後期初頭～前半期の資料であろう。

66と67は，高坏である。66は，鋤先形口縁で口径42cmを測る大形の丹塗高坏である。67は在来系の高坏で，内外面に暗文を施している。両者ともににぶい黄橙色の色調で，胎土に66は石英・長石・角閃石，赤色砂，67は石英・長石・角閃石・金雲母を含む。66はⅢ層，67はⅣａ層出土。66は弥生中期末，67は古墳前期初頭の資料であろう。

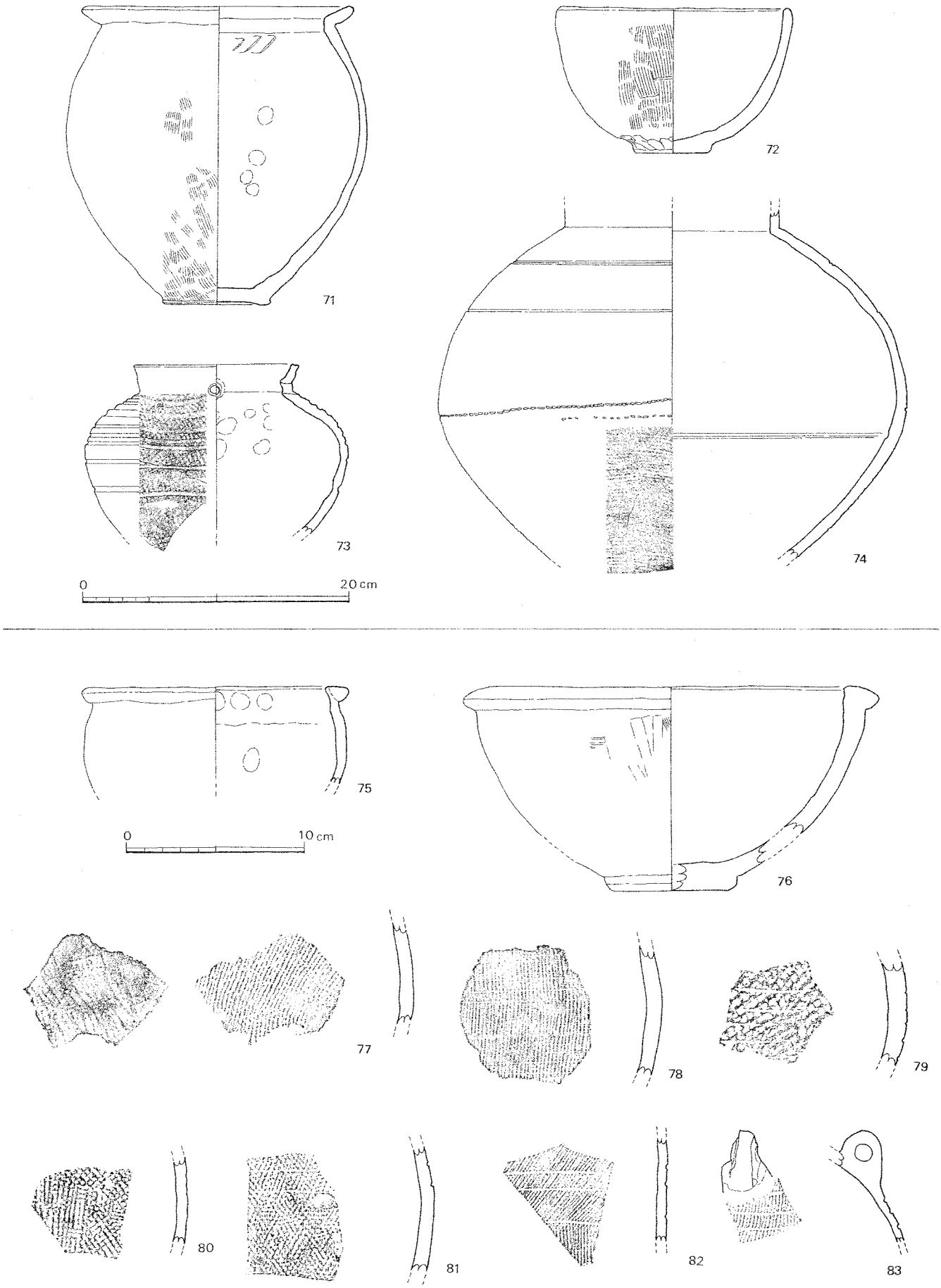
68・69は，器台・支脚である。68は，筒形の器台で，あまり端部が広がりをもたないものである。内面にしぼり痕がみられる。69は，ぶ厚いつくりで，支脚と考えられる。指整形ナデ仕上げされる。両者ともににぶい橙色の色調で，胎土に68は石英・長石・角閃石・金雲母，69は石英・長石・角閃石・赤色砂を含む。68はⅣｄ層，69はⅣｂ層出土。両者ともに弥生中期の資料であろうか。

70は，甕棺である。外面は平滑に仕上げられ，内面はハケメをナデ消している。灰黄色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石を含む。Ⅳｃ層出土。橋口達也氏編年（以下橋口編年）のＫⅡｂ式の資料であろう。

71～83は，朝鮮半島系土器である。71・72・75・76は，無文土器系の資料である。71は，丸く張りをもつ胴部に，肥厚された短い「く」の字形の口縁の甕で，外面はハケメナデ消し，内面は平滑にナ



第31図　1号旧河道出土土器⑥（1／4）



第32図　1号旧河道出土土器⑦（1／3，1／4）

デ仕上げされるが，指オサエ痕とヘラ痕が残る。72は，椀状の鉢で，円盤状の底部は指でナデツケられている。75は，丸い粘土紐口縁の小形の甕で，口縁の上方はわりと平坦に仕上げられている。内外面ともにナデ仕上げされ，内面には指オサエ痕が残る。76は，断面三角形状の口縁がつく鉢で，円盤状の底部と同一個体として復元した。内外面ともに板状具でナデているようだ。71は黄灰色，72は橙色，75は灰褐色，76は褐灰色を呈し，胎土に76が石英・長石・角閃石，71・75が石英・長石・角閃石・金雲母，72が石英・長石・角閃石・赤色砂を含む。71がⅣａ・Ⅳｂ層，72・76がⅣｂ層，75がⅣｃ層出土。いずれも弥生中期の擬無文土器と考えられる。73・77～79は，三韓系瓦質土器壺片で，胴部に77が縄蓆文タタキ目を施し，内面に格子目状の当て具痕が残る。73・78は，縄蓆文タタキの後に沈線を施している。79は，格子目タタキの後に沈線を施している。73・78が灰色，77が灰白色，79が黄灰色を呈する。79がⅢ層，その他はⅣｂ層出土。74は，胴中位が張りをもつ偏球状の壺である。胴上半は回転ナデで仕上げられ，鋭い器具による沈線が施されている。胴下半には，縄蓆文タタキを施こすが上部をナデ消して，一部を縄をめぐらしたような沈線として残している。灰色の色調で，類例を知らないが，楽浪系の灰色泥質の壺としておきたい。Ⅳｄ層から出土した。80～83は，陶質土器の壺片である。外面は，80が格子目タタキ，81が格子目タタキの後に沈線，82と83が縄蓆文タタキの後に沈線を施している。83は丸い耳が付いている。80と82は，灰色の色調で，器肉がにぶい赤褐色を呈する。81は褐灰色，83は灰褐色を呈する。80・81がⅢ層，82・83がⅣｂ層出土。

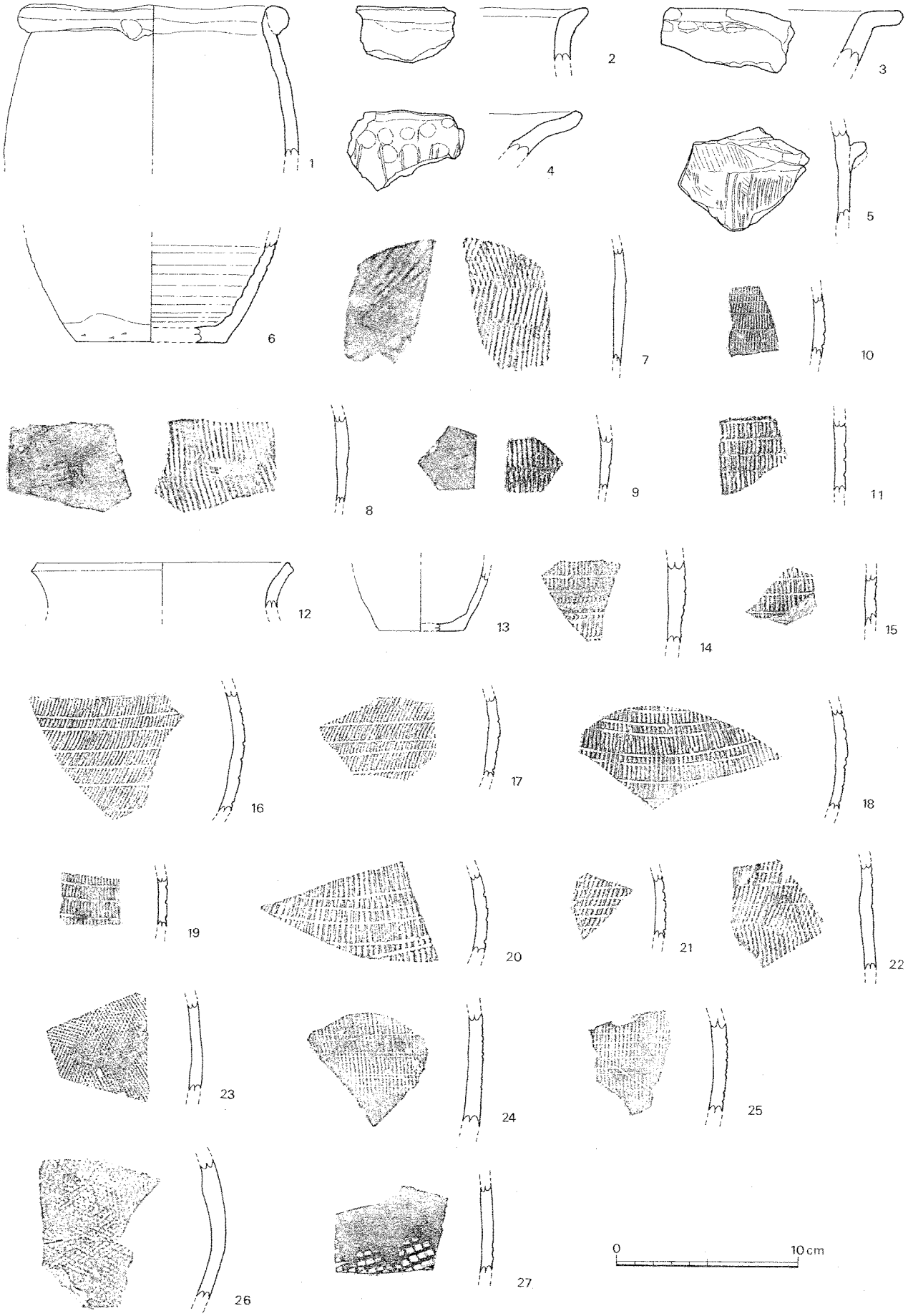
以上の１号旧河道出土土器は，Ⅳｃ層出土品が城ノ越式～須玖Ⅱ式古段階までの古い様相をもっているが，他は時期的に混ざり，河川の複雑な攪乱を示したかたちとなった。幸いに土器は，ドットマップによって採り上げているので，流路のゾーニングとの検証を行えば，流路の時期をおさえることができる可能性もっている。今後の検討課題となるであろう。

③Ｅ区２号旧河道出土土器（第33図）

２号旧河道出土土器については，調査が３月までかかったために整理途上であり，朝鮮半島系土器だけをとりあげる。なお，大略的にみると，２号旧河道ではⅠ層から奈良期の須恵器，Ⅱ層が弥生後期～古墳前期，Ⅲ層が弥生中期～後期の遺物が出土している。

１～５は，無文土器系の資料である。１は，丸い粘土紐口縁の甕で，一部指で抑えた痕跡がつく。外面は平滑に仕上げ，内面は横位にナデ仕上げしている。２は，尖りぎみに小さく外反する口縁の甕である。３は口縁が「く」の字形に強く折れ，上方が平坦な鉢と思われる資料である。器面は風化しているが，屈曲部外面に強く指オサエを行った痕跡がついている。４は，いびつな形状の口縁部で，鉢であろうか判断に迷う資料である。外面には，縦に単沈線を施し，指オサエの痕が残っている。５は，突帯が一部残して剥落している甕と推測されるものである。粗いハケが施されている。色調は，１と４が褐灰色，２が黄灰色，３が灰黄色，５がにぶい褐色を呈し，胎土には３・４・５が石英・長石・角閃石，１が石英・長石・灰色砂，２が長石を含む。いずれもⅡ層出土品である。

６～９は，楽浪系の資料である。６は，無文の壺の体下半部片である。ロクロによる回転ナデ調整され，底から下端部はケズリを丁寧に施している。７～９は，細かい縄蓆文タタキを施し，９はさら



第33図　2号旧河道出土土器（1／3）

に沈線が入る壺片である。内面は，当て具痕をナデ消す。6・7は灰色，8・9はにぶい黄橙色を呈する。6・8はⅡ層から出土。10は，三韓系瓦質壺片である。外面に平行タタキを行い沈線を施している。暗灰色の色調で，Ⅱ層出土。11～27は，陶質土器である。12は，広口壺の口縁部片である。灰色の色調で，器肉は赤褐色を呈する。13は小形の壺あるいは鉢の体下部片である。灰色の色調で，器肉がにぶい赤褐色を呈する。11・14～22は，縄蓆文タタキを行いさらに沈線を施す壺片で，11・14・15・17～19・20・21・22は灰色，16が青灰色を呈し，器肉が16・21が赤褐色，17がにぶい赤褐色，19が灰赤色，20がにぶい褐色を呈する。23は，縄蓆文タタキの壺片で，灰色の色調で，器肉が赤褐色を呈する。24・25は平行タタキの後に細い沈線を施した壺片で，ローリングを受けて風化している。24は灰色，25は褐灰色を呈する。26・27は格子目タタキを行う壺片で，27は上半を平滑に仕上げる。28は褐灰色，28は灰色を呈する。27を除いてⅡ層から出土している。

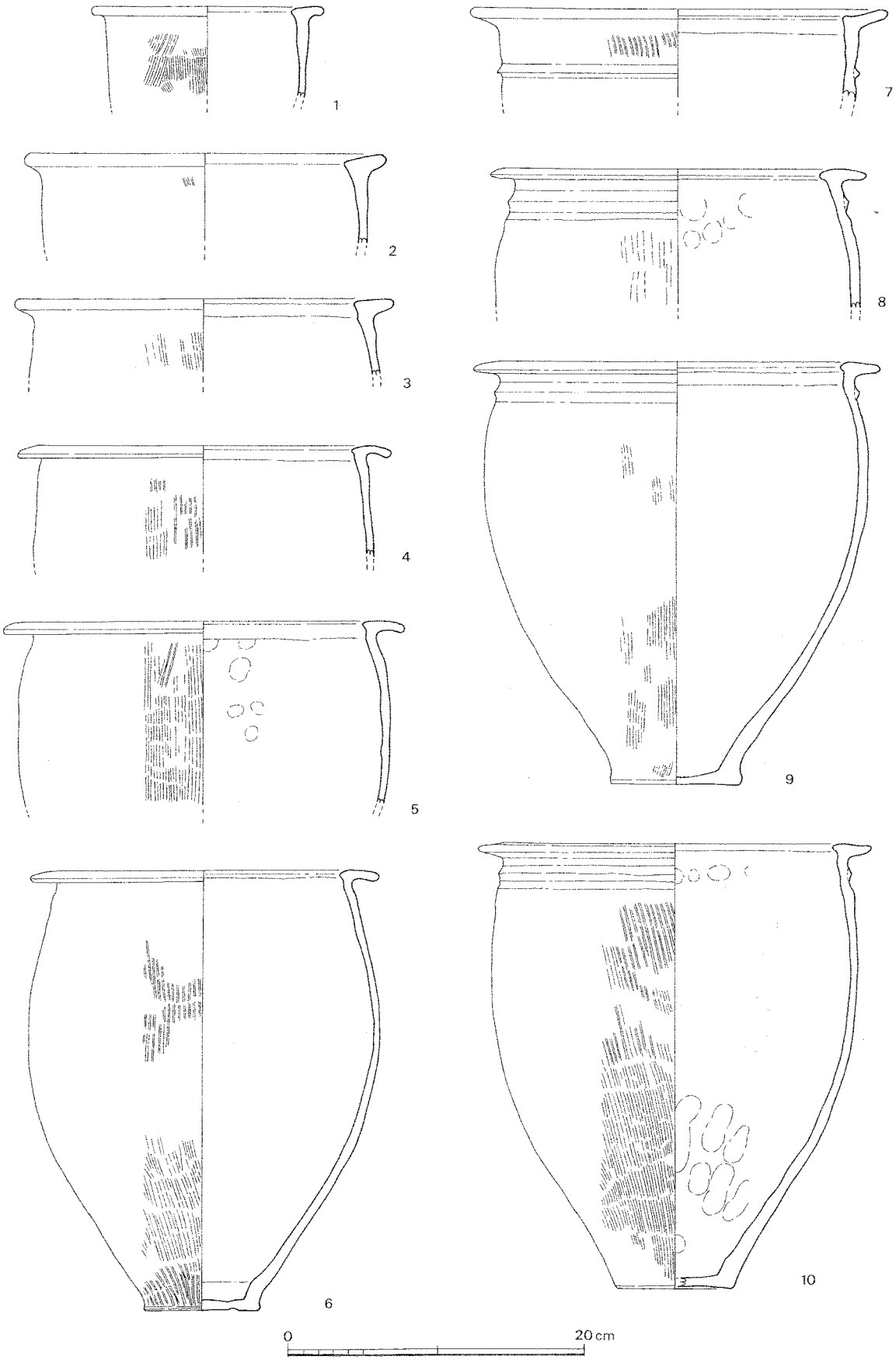
④A区1号濠出土土器（第34図・第35図）

1～10は，甕である。1～3・7は，逆L字形口縁の甕で，7は胴部に断面三角形の突帯をもつ。2・3の胴部外面は，ハケメをナデ消している。1・2・7は灰褐色，3はにぶい橙色の色調で，胎土に2が石英・長石・金雲母，1が石英・長石・角閃石・金雲母，3・7はさらに赤色砂を含む。4～6・8～10は，鋤先形口縁の甕で，8～10は胴部に断面三角形の突帯をもっている。5を除いて胴部外面はハケメをナデ消している。4・8は灰褐色，5・10がにぶい橙色，6が明灰褐色，9が灰黄褐色を呈し，胎土に8・10が石英・長石・金雲母，5・6・9が石英・長石・角閃石・金雲母，4がさらに赤色砂を含む。5・8～10がⅠ層，2～4・6・7がⅡ層，1がⅢ層から出土している。1～3は弥生中期前葉の須玖Ⅰ式古段階，7は中期中頃の須玖Ⅰ式新段階，4～6・8～10は中期後半の須玖Ⅱ式の資料である。

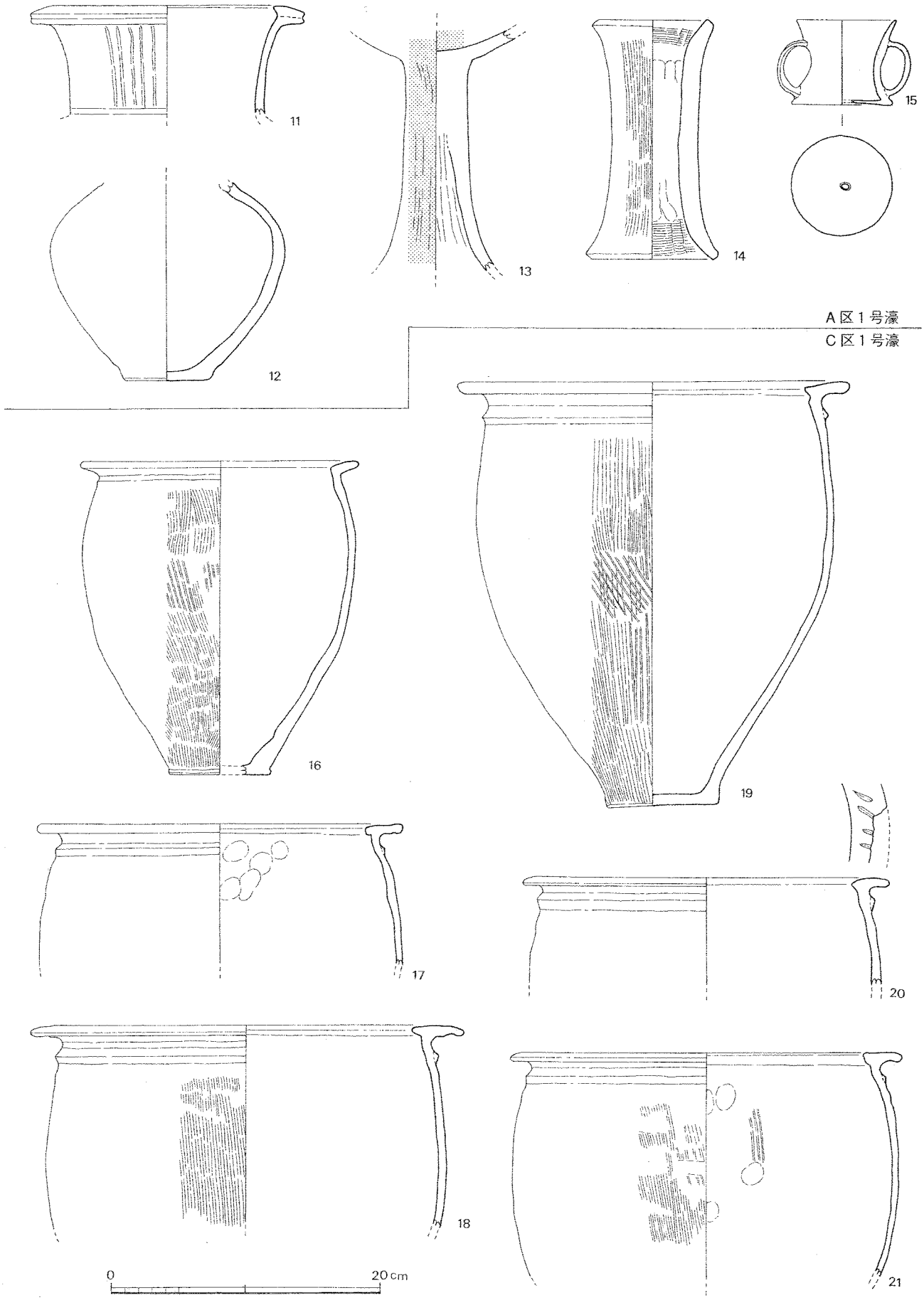
11・12は，壺である。11は，短い鋤先形口縁の壺で，頸部全周に縦位の暗文がはいる。頸部内面はヨコミガキ調整される。12は，口頸部を欠失した壺で，肩部に張りをもつ。ぶ厚いつくりで，手取りは重い。外面は，上半がヨコミガキ，下半がタテミガキされる。11はにぶい橙色，12はにぶい黄橙色の色調で，胎土に11が石英・長石・金雲母・赤色砂，12は石英・長石・角閃石・赤色砂を含む。ともにⅠ層出土。11は中期前半の須玖Ⅰ式，12は後期初頭～前葉の資料であろう。13は丹塗高坏である。にぶい橙色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母・赤色砂を含む。須玖Ⅱ式の資料である。14は，筒形の器台である。にぶい黄橙色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。Ⅰ層出土。15は，対に把手をもつジョッキ形土器である。口を1／3ほど欠き，底部に小さな穿孔がみられる。灰白色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。Ⅰ層から出土。弥生後期末の肥後系の土器である。

⑤C区1号濠出土土器（第35図～第37図）

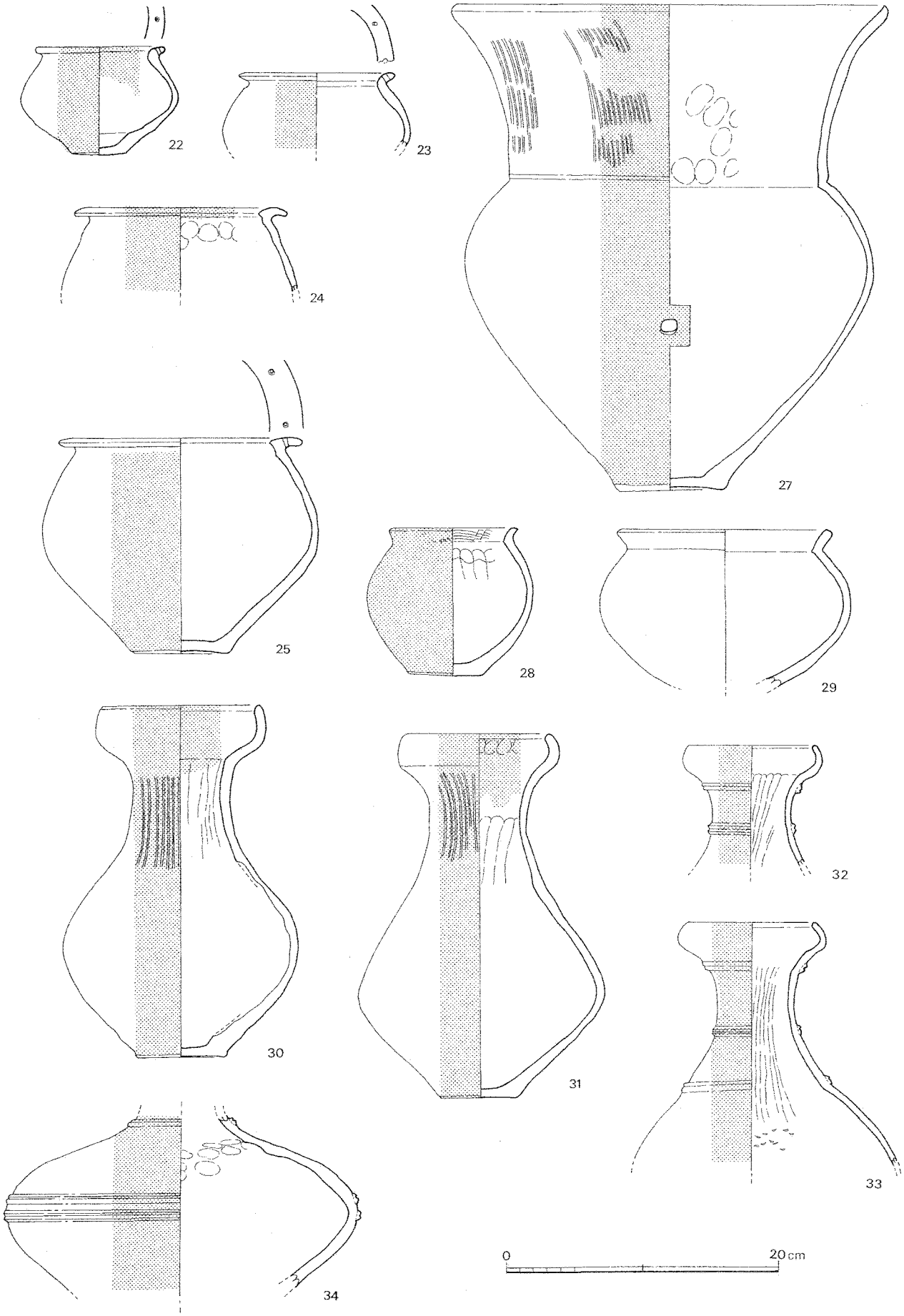
16～21は，甕である。16は，逆L字形口縁の甕である。胴部は丸く張りをもっている。橙色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。17～21は，鋤先形口縁の甕で，胴部に断面三角突帯を貼りつけるもので，胴部に張りをもっている。胴部外面はハケメ調整され，21はさらにナデ消しさ



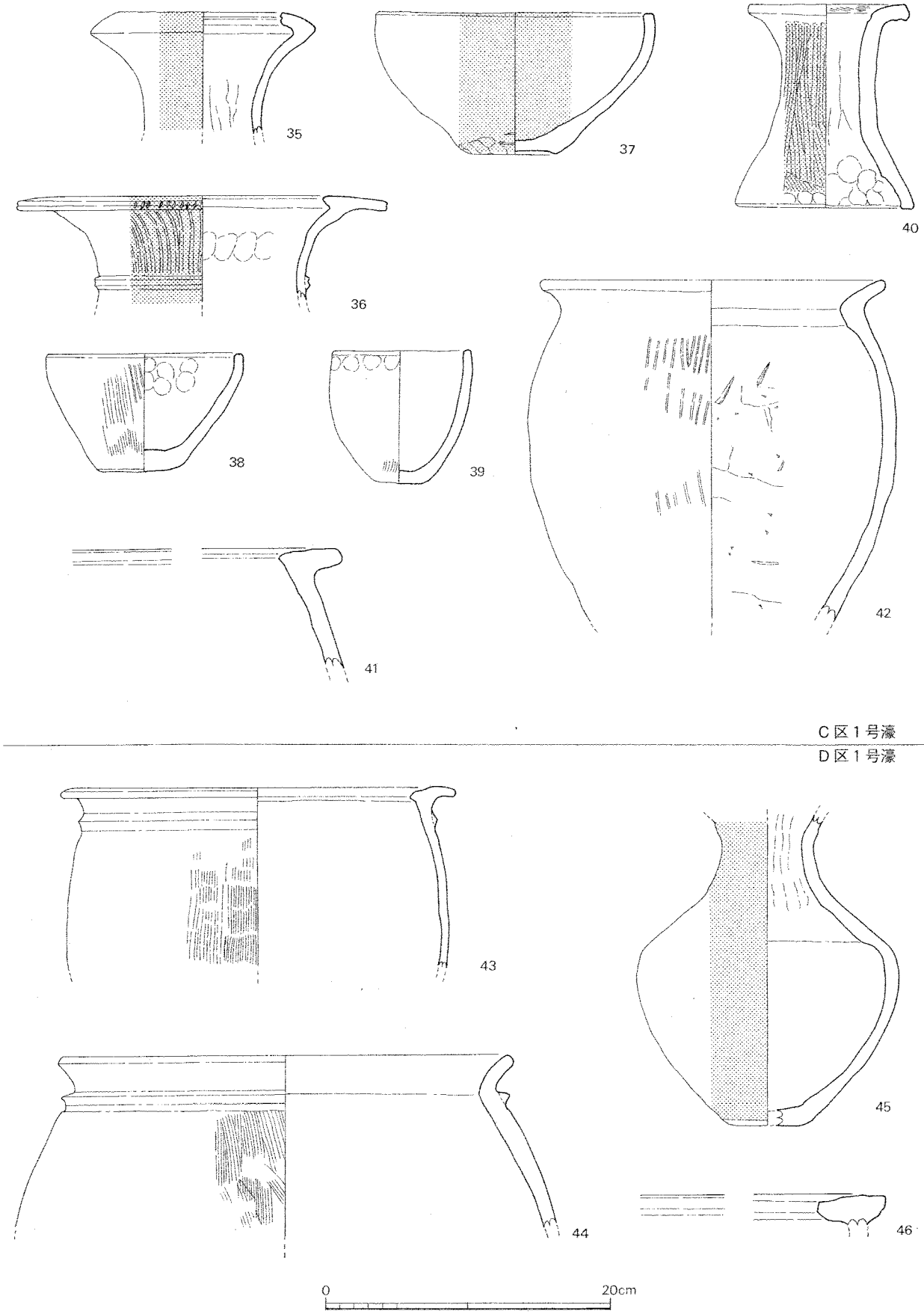
第34図　A区1号濠出土土器①（1／4）



第35図　A区1号濠出土土器②，C区1号濠出土土器①（1／4）



第36図　C区１号濠出土土器②（１／４）



第37図　C区1号濠出土土器③，D区1号濠出土土器（1／4）

れ，17と20は平滑に仕上げている。20は，口縁上方に4本の短沈線が入る。17～19がにぶい橙色，20が浅黄橙色，21がにぶい黄橙色を呈し，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。これらは，弥生中期後半の須玖Ⅱ式の資料である。

22～36は，壺である。22～25は，丹塗の無頸壺である。22と23は短い「く」の字形に屈曲する口縁で，焼成前に2個の小さな穿孔を施すもの。24と25は鋤先形口縁の資料で，25は焼成前に2個の小さな穿孔を施すが，24は穿孔は認められない。22・24・25の胴部外面の上半はヨコミガキされ，22と25の下半はタテミガキが施されている。22は橙色，23は灰白色，24・25はにぶい橙色の色調で，胎土にいずれも石英・長石・角閃石・金雲母を含む。23・24はⅠ層，22・25はⅡ層出土。これらは，弥生中期後半の須玖Ⅱ式の資料である。27～29は，広口壺である。27は朝顔形に口頸部が広がる丹塗壺で，胴部に焼成後の穿孔が認められる。口頸部には部分暗文が施されている。28は「く」の字形に小さく口縁が外反する丹塗壺である。胴部はタテミガキ調整がされている。29は「く」の字形に短いく外反する口縁の偏球形の壺で，胴部は内外面ともに平滑に仕上げられている。27・29がにぶい黄橙色，28がにぶい橙色を呈し，胎土に27・28が石英・長石・金雲母，29が石英・長石・角閃石を含む。28はⅠ層，27・29はⅡ層出土。27は須玖Ⅱ式，28は後期初頭～前葉，29は後期後半の資料であろうか。30～34は，丹塗の袋状口縁壺である。30・31は突帯をもたない資料で，頸部に暗文がはいり，胴部はヨコミガキされている。32・33は頸部にM字突帯をもつもので，内面にはしぼり痕がはいる。突帯間には32は風化して明瞭でないが，33は暗文を施している。43は頸胴界と胴部にM字突帯をもつもので，胴部は偏平で異常に張りをもっている。色調は，32がにぶい黄橙色の他はにぶい橙色を呈する。胎土には，32が石英・長石・金雲母の他は，石英・長石・角閃石・金雲母を含む。30・33・34はⅠ層，31・32はⅡ層出土。これらは，弥生中期後半の須玖Ⅱ式の資料である。35は複合口縁の丹塗壺口頸部である。内面には，しぼり痕がみられる。灰黄褐色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石を含む。Ⅰ層出土。後期初頭の資料である。36は，鋤先形口縁の丹塗壺で，刻目を施す。頸部には全周暗文を施している。にぶい橙色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。Ⅰ層出土。須玖Ⅱ式の資料である。

37～39は，鉢である。37は椀形の丹塗土器で，体下端部をヘラ状具でナデつけている。38も椀形の鉢で，外面はハケメをナデ消している。39は深い身のコップ形の鉢で，風化によってほとんど剥落しているが丹塗りを施している。37・39が浅黄橙色，38がにぶい黄橙色の色調で，胎土に37・39は石英・長石・角閃石，38は石英・長石・角閃石・金雲母を含む。いずれもⅠ層出土。37は中期末～後期初頭，38・39は後期の所産であろう。40は，器台で，口縁は強く外反し，裾部はスカート状のひらくものである。にぶい黄橙色を呈し，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。Ⅰ層出土。弥生後期後半の資料であろうか。41は，逆L字形の口縁の甕棺片で，胴部は平滑に仕上げている。浅黄橙色の色調で，石英・長石・角閃石・赤褐色砂を含む。橋口編年のKⅡa式に相当する資料であろう。

42は，擬無文系土器の甕である。胴部は，外面が粗いハケメ調整の後にナデ消し，内面はケズリあるいはヘラナデを行っている。にぶい橙色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。Ⅰ層出土。

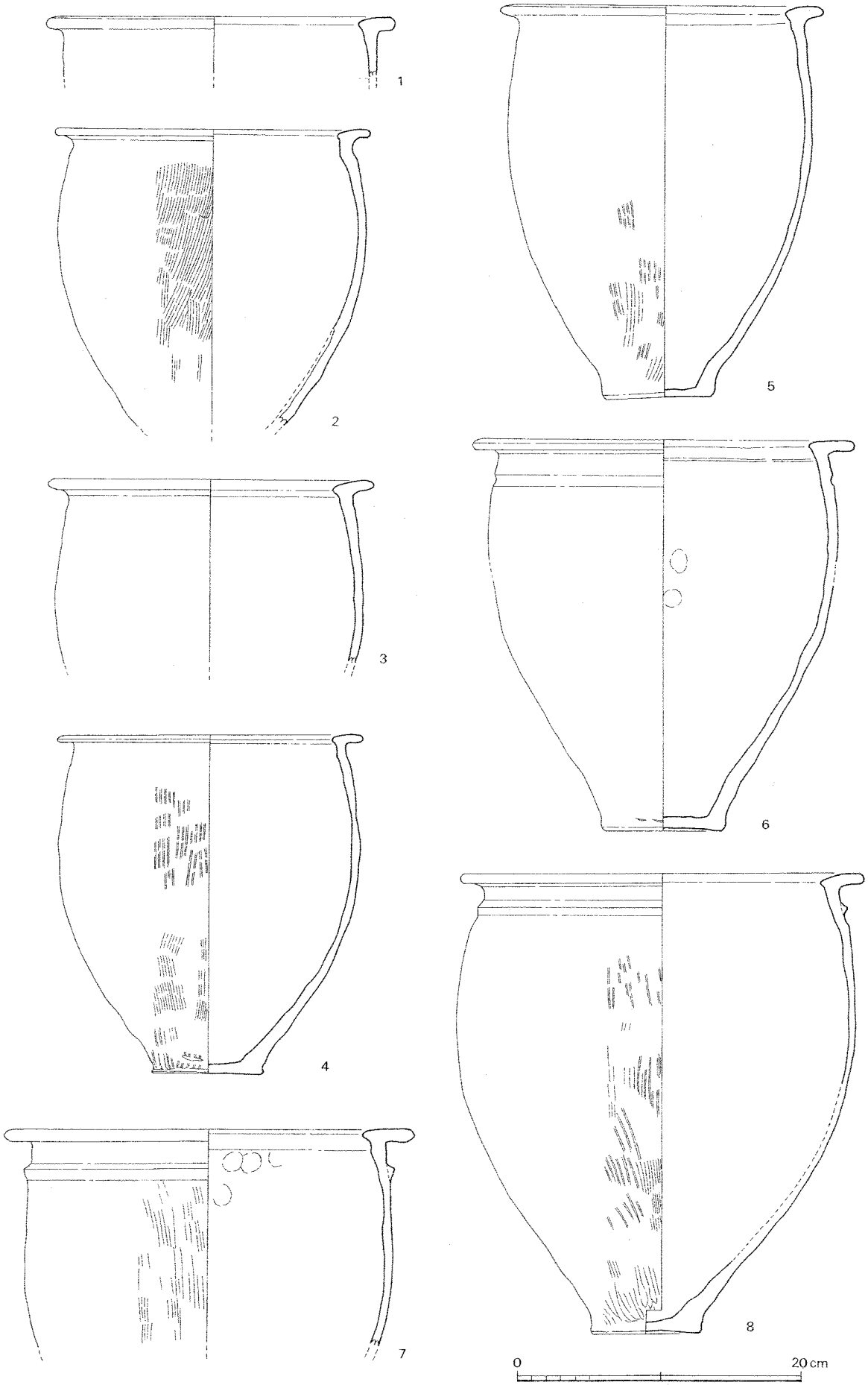
⑥D区１号濠出土土器（第37図）

43・44は，甕である。43は鋤先形口縁の甕で，胴上部に断面三角形の突帯をつけている。胴外面はハケナデ消している。44は「く」字形口縁の大形甕で，屈曲部に断面三角形の突帯を貼りつける。43がにぶい橙色，44がにぶい褐色を呈し，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。Ⅰ層出土。43は弥生中期後半の須玖Ⅱ式，44は後期初頭の資料であろう。45は口縁を欠失する袋状口縁壺で，肩部に張りをもっている。頸部内面にはしぼり痕がはいる。にぶい橙色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。Ⅰ層出土。中期末～後期初頭にかけての資料であろう。46はＴ字形の甕棺片である。にぶい橙色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石を含んでいる。Ⅰ層出土。橋口編年のＫⅡｂ式であろう。

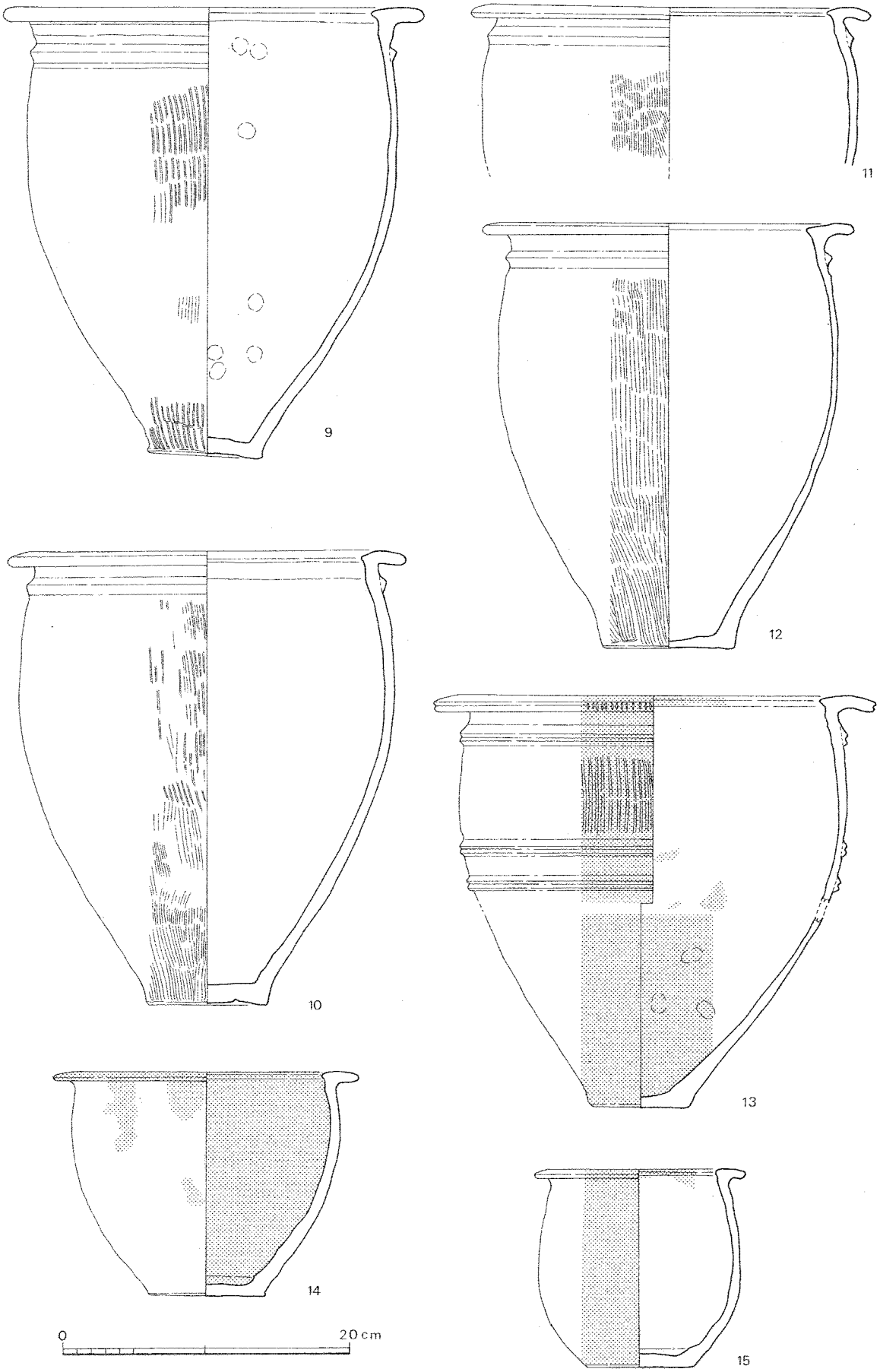
以上の１号濠出土土器は，弥生中期前葉の須玖Ⅰ式古段階から弥生後期末までの資料を含み，弥生中期前葉に掘削され，後期末頃には埋没したことが推測される。

⑦A区２号濠出土土器（第38図～第41図）

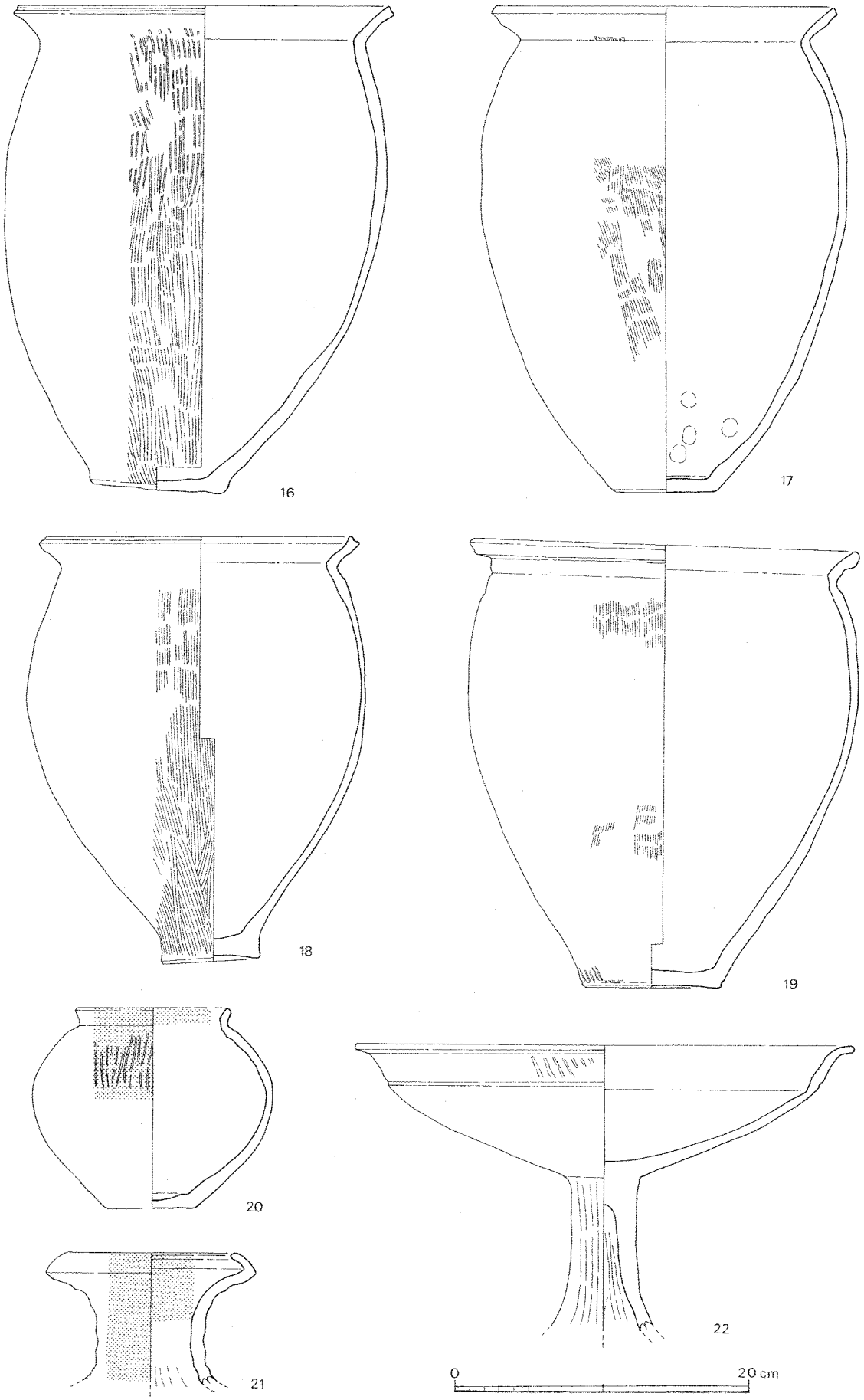
１～19は甕である。１は逆Ｌ字形口縁の甕で，ナデ仕上げされている。浅黄橙色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。２～12は鋤先形口縁の甕で，７～12は胴上部に断面三角形の突帯をつけるものである。６は胴上部に，太めの浅い沈線が１条めぐる。胴外面はハケメをナデ消すものが多いが，３・６は平滑に仕上げている。色調は，２・６・11が灰褐色，３・５がにぶい赤褐色，４・８・９・12がにぶい橙色，７が橙色，10がにぶい黄橙色を呈する。胎土には，２・８・12・13が石英・長石・角閃石・金雲母，５が石英・長石・金雲母・赤色砂，３が石英・長石・角閃石・金雲母・褐色砂，４・６・７・10・11が石英・長石・角閃石・金雲母，９が石英・長石・金雲母を含んでいる。２・３・６～12はⅡ層，４・５はⅢ層出土で，３～４は弥生中期中頃の須玖Ⅰ式新段階，２・５～12は弥生中期後半の須玖Ⅱ式の資料であろう。13～15は，丹塗甕である。13は鋤先形口縁の甕で，口唇に刻目を施す。胴上半にはM字形突帯をめぐらす。突帯間には暗文，胴下半にはタテミガキを施す。14・15は，鋤先形口縁の甕である。14は外面を平滑に仕上げ，内面がヨコミガキ調整される。外面には一部黒塗りを施したと思われる部分もみられる。15は樽形の甕で，外面をヨコミガキ調整し，内面はナデ仕上げされる。色調は，13・14がにぶい橙色，15がにぶい黄橙色を呈する。胎土には，13が石英・長石・角閃石，14が石英・長石・角閃石・金雲母・赤色砂，15は石英・長石・角閃石・金雲母を含む。13・14はⅡ層，15はⅢ層出土。これらは，弥生中期後半の須玖Ⅱ式の資料である。16・17は「く」字形口縁の甕である。16は外面がハケメ調整，内面を平滑に仕上げている。17は胴部外面のハケメをナデ消している。底部は薄いレンズ状底をなす。色調は，16が灰黄褐色，17がにぶい黄橙色を呈し，胎土に16が石英・長石・角閃石，17が石英・長石・角閃石・金雲母を含む。16はⅡ層，17はⅠ層出土。16は弥生後期前葉，17は後期中頃の資料であろう。18は，跳ね上げ口縁の甕である。胴部外面はハケメを上半部をナデ消している。内面は，平滑に仕上げる。にぶい橙色の色調で，胎土に石英・長石・赤色砂を含む。Ⅱ層出土。福岡平野以東の土器である。19は，「く」字形口縁の甕であるが，肥厚されいびつな口縁である。胴部外面はハケメをナデ消し，内面はナデ仕上げされる。灰褐色



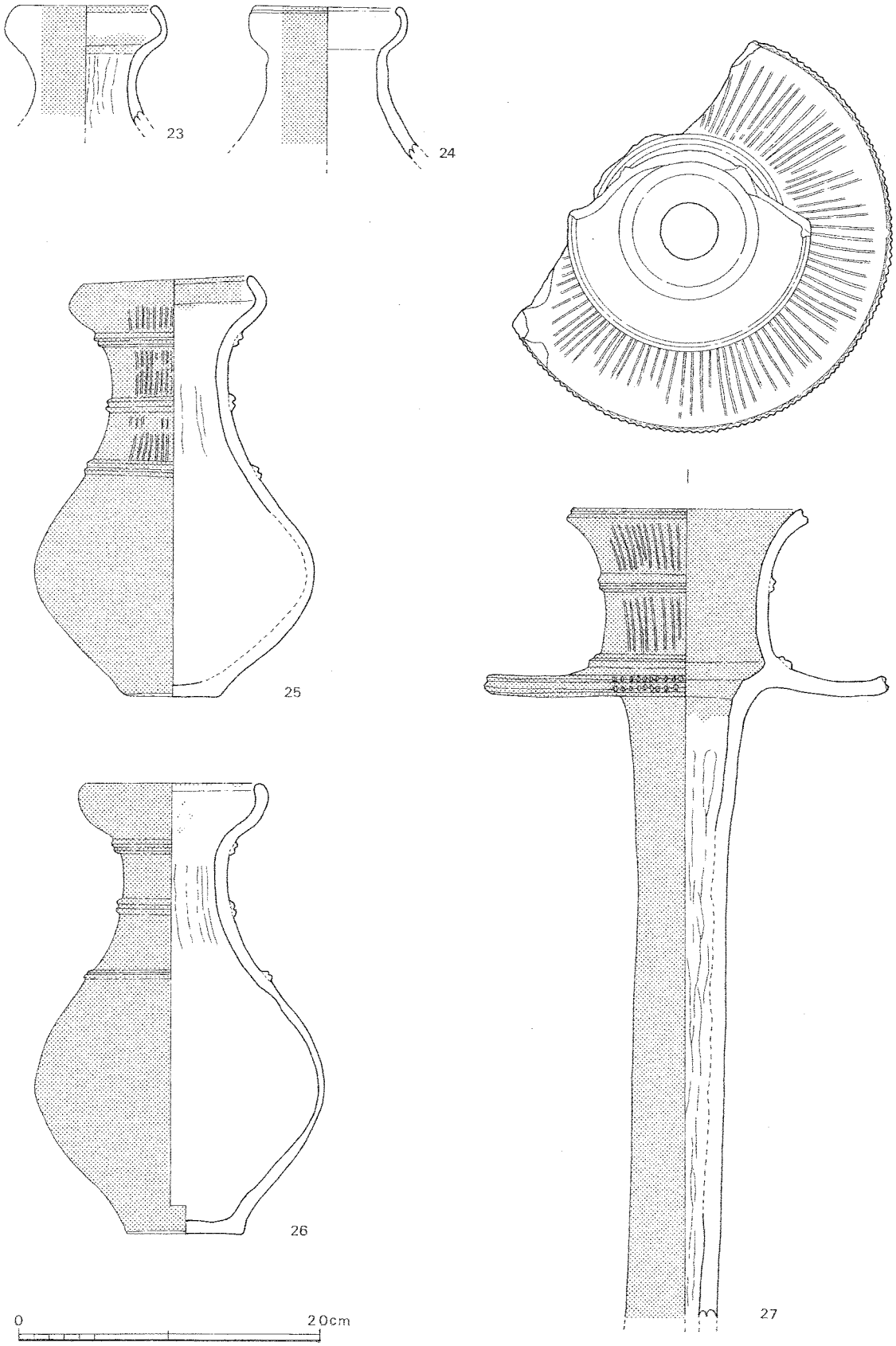
第38図　A区2号濠出土土器①（1／4）



第39図　A区2号濠出土土器②（1／4）



第40図　A区2号濠出土土器③（1／4）



第41図　A区２号濠出土土器④（１／４）

の色調で，胎土に石英・長石・金雲母・赤色砂を含む。Ⅱ層出土。擬無文土器であろう。

20・21，23～26は，丹塗壺である。20は口縁が小さく外反する壺で，胴部は外面上半にハケメが若干残るが，他は平滑に仕上げている。灰白色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石を含む。Ⅱ層から出土。弥生後期初頭の資料であろう。21は，複合口縁の壺である。頸部外面にはタテミガキを施す。にぶい橙色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。Ⅱ層出土。弥生後期初頭の資料であろう。23～26は，袋状口縁の壺で，25・26は頸部にM字形突帯をめぐらす。23以外は，縦位に細い暗文を施す。25は，胴部上半をヨコミガキ，下半をタテミガキを行う。26の胴部は全面にヨコミガキを行う。色調は，25がにぶい黄橙色の他は，にぶい橙色を呈する。胎土には，25が石英・長石・金雲母，23・26が石英・長石・角閃石・金雲母，24はさらに赤色砂を含む。24がⅢ層の他は，Ⅱ層出土。これらは，弥生中期後半の須玖Ⅱ式の資料である。

22は，杯部が2／3ほどから屈曲して口縁が外反する高坏である。坏部は平滑に仕上げられ，体部に暗文を施す。柱状部はタテミガキされる。にぶい黄橙色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母，赤色砂を含む。Ⅲ層出土で，掘り直した後に混入した弥生後期後葉の資料であろう。

27は，丹塗の筒形器台で，残存長が53cmを超える大形品である。口縁は朝顔形に開き，長くのびた鍔部の先端には刻目を施している。口頸部から鍔上部にかけては細い暗文を施している。黄橙色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母・赤色砂を含む。Ⅱ層出土。弥生中期後半の須玖Ⅱ式である。

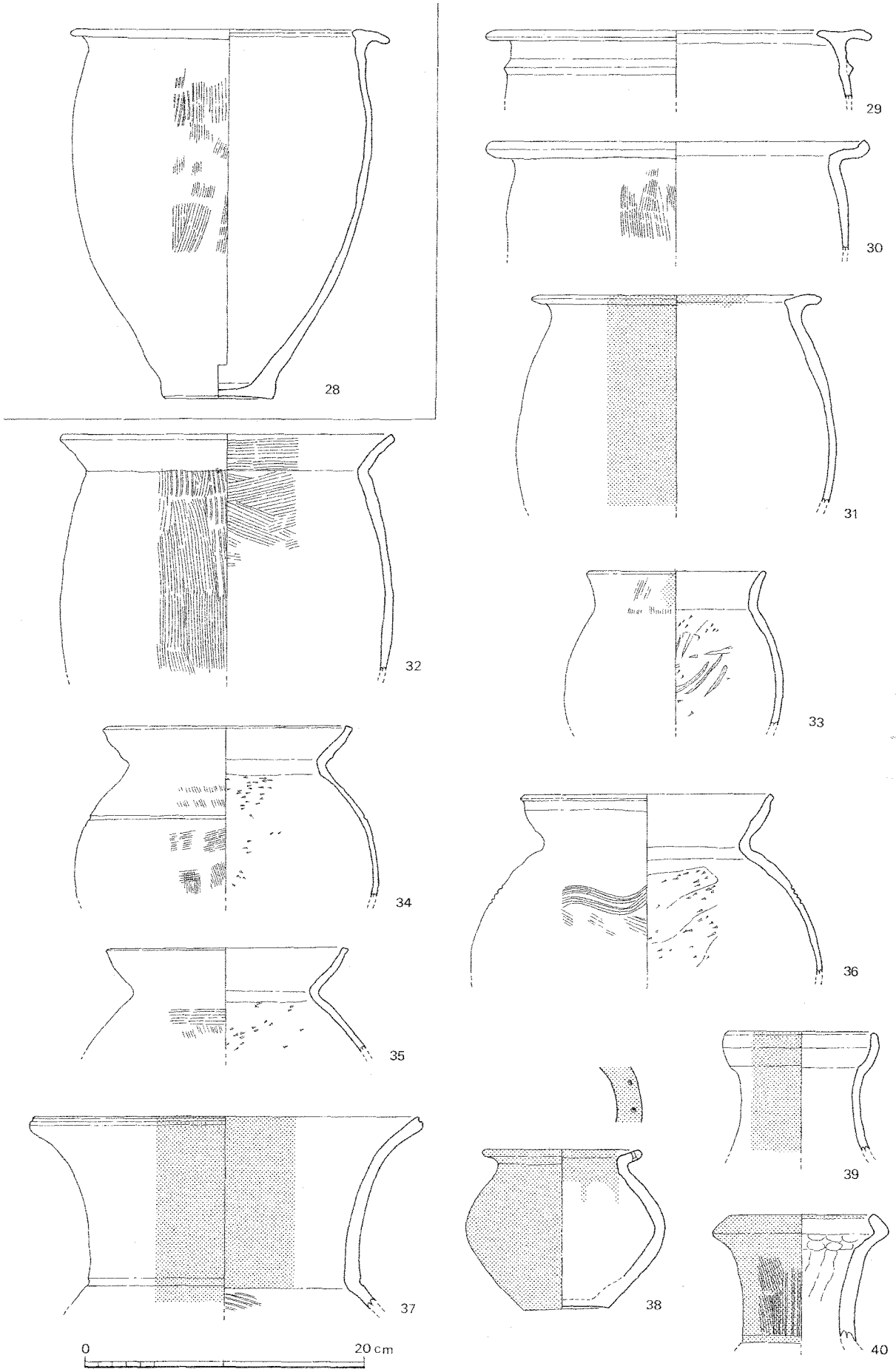
⑧C区2号濠出土土器（第42図）

28は，鋤先形口縁の甕である。外面のハケメは下半部が風化している。にぶい黄橙色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。Ⅲ層出土。弥生中期後半の須玖Ⅱ式の資料である。

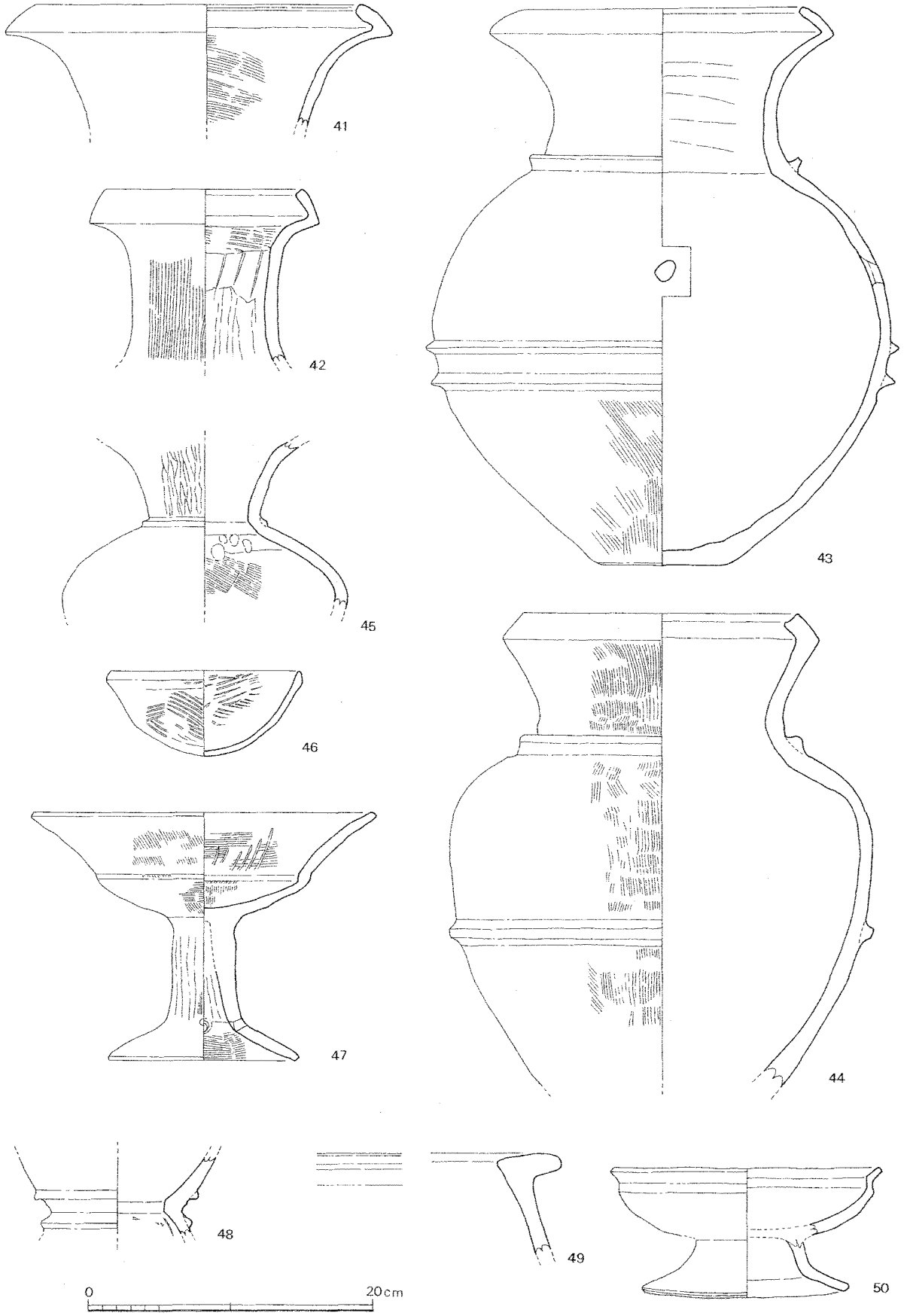
⑨D区2号濠出土土器（第42図・第43図）

29～36は，甕である。29は，鋤先形口縁の甕である。器面は，平滑に仕上げている。にぶい赤褐色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母・赤色砂を含んでいる。Ⅰ層出土。弥生中期後半の須玖Ⅱ式の資料である。30は，跳ね上げ口縁の甕である。胴部外面はハケメをナデ消し，内面は平滑に仕上げている。灰白色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石を含む。Ⅱ層出土。弥生中期の福岡平野以東の土器である。31は，鋤先形口縁の丹塗甕である。胴部外面はヨコミガキされ，内面はナデ仕上げされる。灰黄色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。Ⅱ層出土。弥生中期後半の須玖Ⅱ式の資料である。32・33は，「く」字形口縁の甕である。33は，胴部外面を平滑に仕上げ，内面はヘラケズリされる。色調は，32はにぶい黄橙色，33はにぶい褐色を呈し，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。32はⅡ層，33はⅠ層出土。32は弥生後期前半～中頃，33は古墳前期初頭の在地系甕である。34～36は，古墳前期の布留式系甕で，球状の胴部から「く」字形に屈折した口縁の端部を摘みぎみにおさめている。胴部上半には，34が1条の沈線，36が波状文を施している。色調は34がにぶい黄橙色，35が灰黄褐色，36がにぶい橙色で，胎土に34・35が石英・長石・角閃石・金雲母，36はさらに赤色砂を含む。いずれもⅠ層出土で，柳田編年のⅡb式の資料であろう。

37～45は，壺である。37は，丹塗の広口壺である。器面は風化している。にぶい橙色の色調で，胎



第42図　C区２号濠出土土器(28)，D区２号濠出土土器①（１／４）



第43図　D区２号濠出土土器②（１／４）

土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。38は，「く」字形に外反する口縁の丹塗無頸壺である。口縁上方には対に2個ずつ焼成前の穿孔がみられる。胴部外面はヨコミガキされ，内面はナデ仕上げされる。にぶい黄橙色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。39は，袋状口縁の丹塗壺である。外面は平滑に仕上げられ，頸部に暗文を施す。にぶい橙色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石・赤色砂を含む。いずれもⅡ層出土で，37・38は，弥生中期後半の須玖Ⅱ式，39は後期初頭に下がる資料であろう。40～44は，「く」字形に内反する口縁の複合口縁壺である。40は，ぶ厚いつくりの丹塗壺である。外面はハケメ調整，内面は指オサエ痕としぼり痕が残る。41は，外面が風化を受けて，内面にはハケメが残る。42は，頸部外面がハケメ，内面にハケメ・ヘラナデ・しぼり痕がみられる。43は，頸胴界に断面方形の突帯，胴部に2条の三角突帯をめぐらし，体上半部は平滑に仕上げている。頸部内面は横位にナデ調整される。球状の胴部には，焼成後の小さな穿孔が認められる。44は肩に張りをもつ胴部の壺で，ぶ厚いつくりである。頸胴界と胴部に断面台形の突帯をめぐらす。胴部外面はハケナデ消し，頸部内面がヨコミガキされる。色調は40・43・44がにぶい黄橙色，41・42が橙色を呈し，胎土に40・42～44が石英・長石・角閃石・金雲母，41がさらに赤色砂を含む。いずれもⅡ層出土。40が後期初頭，41が後期前葉，42・43が後期中頃・44が後期前半～中頃の資料であろう。45は偏球形胴部の長頸壺である。頸胴界に断面三角形の突帯をつける。頸部外面はタテミガキ，内面はヨコミガキ，胴部外面はヨコミガキされ，丁寧なつくりである。にぶい橙色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。Ⅱ層出土。弥生後期末から古墳前期初頭の資料であろう。

46は，椀形で丸底の鉢である。器面はハケメをナデ消すが，ハケメが残っている。灰黄褐色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石を含む。Ⅰ層出土。古墳前期初頭の資料であろう。47は，坏部が大きく開く在地系高坏である。坏部外面はハケメをナデ消し，内面はハケナデ消しの後に暗文を施している。柱状部はタテミガキを行う。焼成前の穿孔が3箇所みられる。橙色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。Ⅰ層出土。古墳前期初頭の資料である。48は，山陰系の鼓形器台の破片である。外面は平滑に仕上げられ，受部内面はナデ，裾部内面はヘラケズリされる。にぶい橙色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。古墳前期初頭の資料である。49は，逆L字形口縁の甕棺片である。内外面は風化を受ける。にぶい橙色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石・赤色砂を含む。Ⅱ層出土。橋口編年のKⅡa式であろう。

50は，陶質土器の高坏である。外面は回転ナデ仕上げされるが，坏部外面下半部はヘラケズリの後に回転ナデを施す。坏部内面は，不定方向にナデ仕上げされる。褐灰色を呈する。Ⅰ・Ⅱ層出土。古墳前期の布留式に共伴する資料であろう。

以上の，2号濠出土土器は，弥生中期前葉の須玖Ⅰ式古段階から古墳前期の4世紀前半の資料を含んでいる。Ⅱ層からは，丹塗の筒形器台や袋状口縁壺がA区からまとまって出土しており，中期末頃にはある程度埋没していたようである。その後，後期になってⅡ層上面まで掘り直され，古墳前期にⅠ層が溜り濠は埋没したようである。2号濠の掘削時期については，A区の2号土壙を切ったかたちで成立しているので，2号土壙出土土器の項でふれる。

⑩A区1号土壙出土土器（第44図・第45図）

1～16は，甕である。1～11は，逆L字形口縁の甕で，胴部上部に6は沈線を，9～11が断面三角形の突帯を付けている。色調は，1・2・7・9・10・11がにぶい褐色，3がにぶい橙色，4が灰褐色，5・6がにぶい赤褐色，8が橙色を呈する。胎土に，2・3・7が石英・長石，1が石英・長石・金雲母，4が石英・長石・角閃石，5・6・9・10が石英・長石・角閃石・金雲母，8が石英・長石・赤色砂を含む。12～15は，あげ底をなす底部である。にぶい橙色の色調で，胎土に12が石英・長石・褐色砂，13・14が石英・長石・角閃石・金雲母，15が石英・長石・金雲母を含む。16は，逆L字形口縁の擬無文土器で，器表は風化を受けるが凹凸をもつ。口縁下には指オサエの痕跡が残る。にぶい橙色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。

17は，短い鋤先形口縁の壺である。灰褐色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石を含む。18は，大形の鉢である。短い鋤先形口縁で，胴上部に三角突帯を付す。

以上の1号土壙出土土器は，弥生中期前葉の須玖Ⅰ式古段階の資料である。

⑪A区2号土壙出土土器（第45図）

19・20は，逆L字形口縁の甕である。19は胴上部に三角突帯を2条めぐらす。底部はあげ底で，20はふんばりをもっている。19がにぶい橙色，20がにぶい赤褐色の色調で，胎土に19が石英・長石・金雲母・赤色砂，20が石英・長石・角閃石・金雲母を含む。21は，鋤先形口縁の壺で，刻目を施す。

以上の2号土壙出土土器は，弥生中期前葉の須玖Ⅰ式古段階の資料である。この2号土壙は2号濠によって切られており，掘削の上限となる重要な資料である。

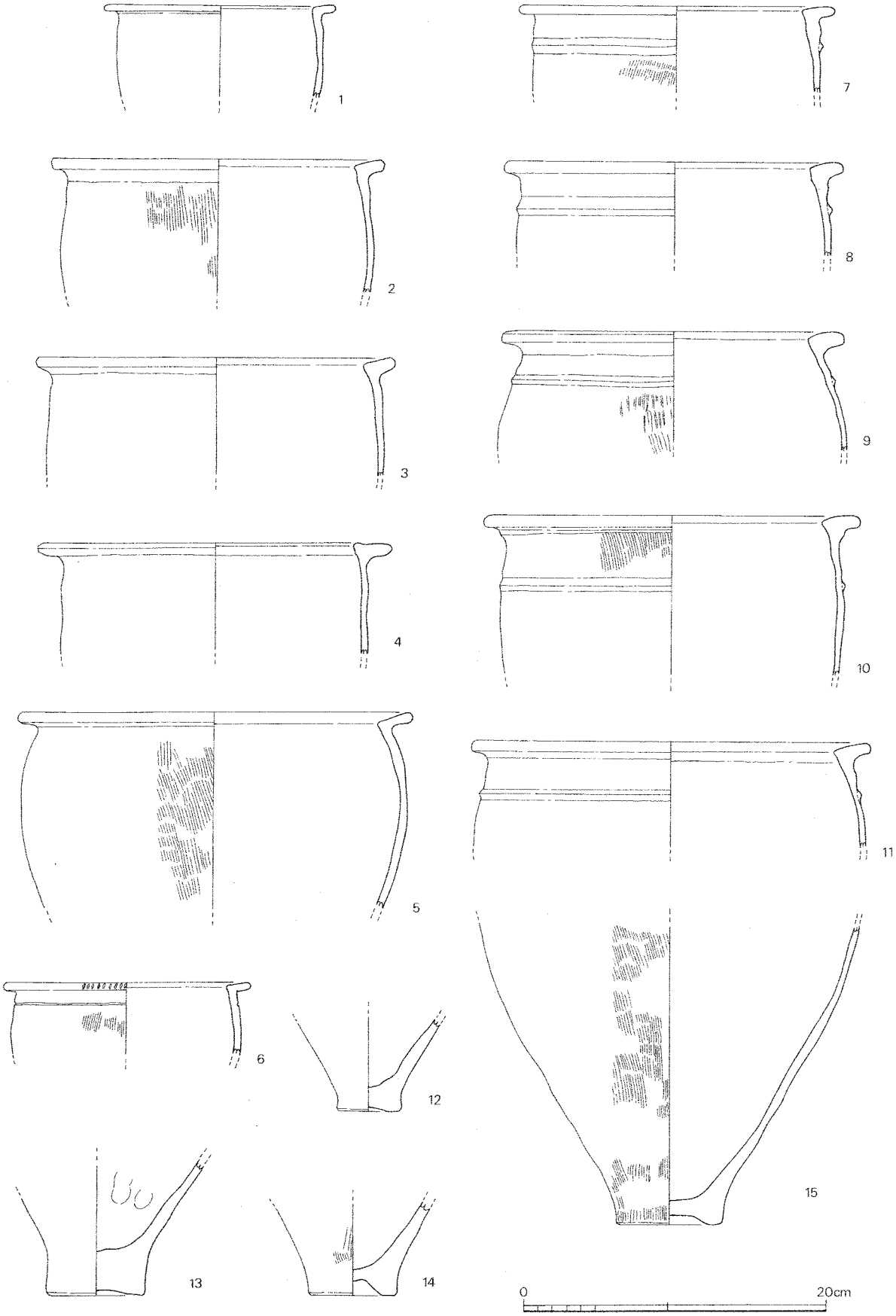
⑫B区3号土壙出土土器（第46図）

1～10は，甕である。1・8は，断面三角形の口縁の甕である。8は胴上部に断面三角形の突帯が付く。1は明褐色，8がにぶい橙色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。2～6は逆L字形口縁の甕である。2・6がにぶい橙色，3が灰褐色，4が橙色，5が明赤褐色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。7・9・10は，鋤先形口縁の甕で，9・10は胴上部に三角突帯を付す。11・12は蓋である。11は天井部がくぼみ，器高がわりと高いもので，外面は平滑に仕上げている。12は，ボタン状の撮みが付いた天井部の蓋で，身が低い陣笠状をなす。外面は平滑ナデ仕上げている。11は浅黄橙色，12はにぶい褐色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。13・14はあげ底の甕底部である。橙色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。

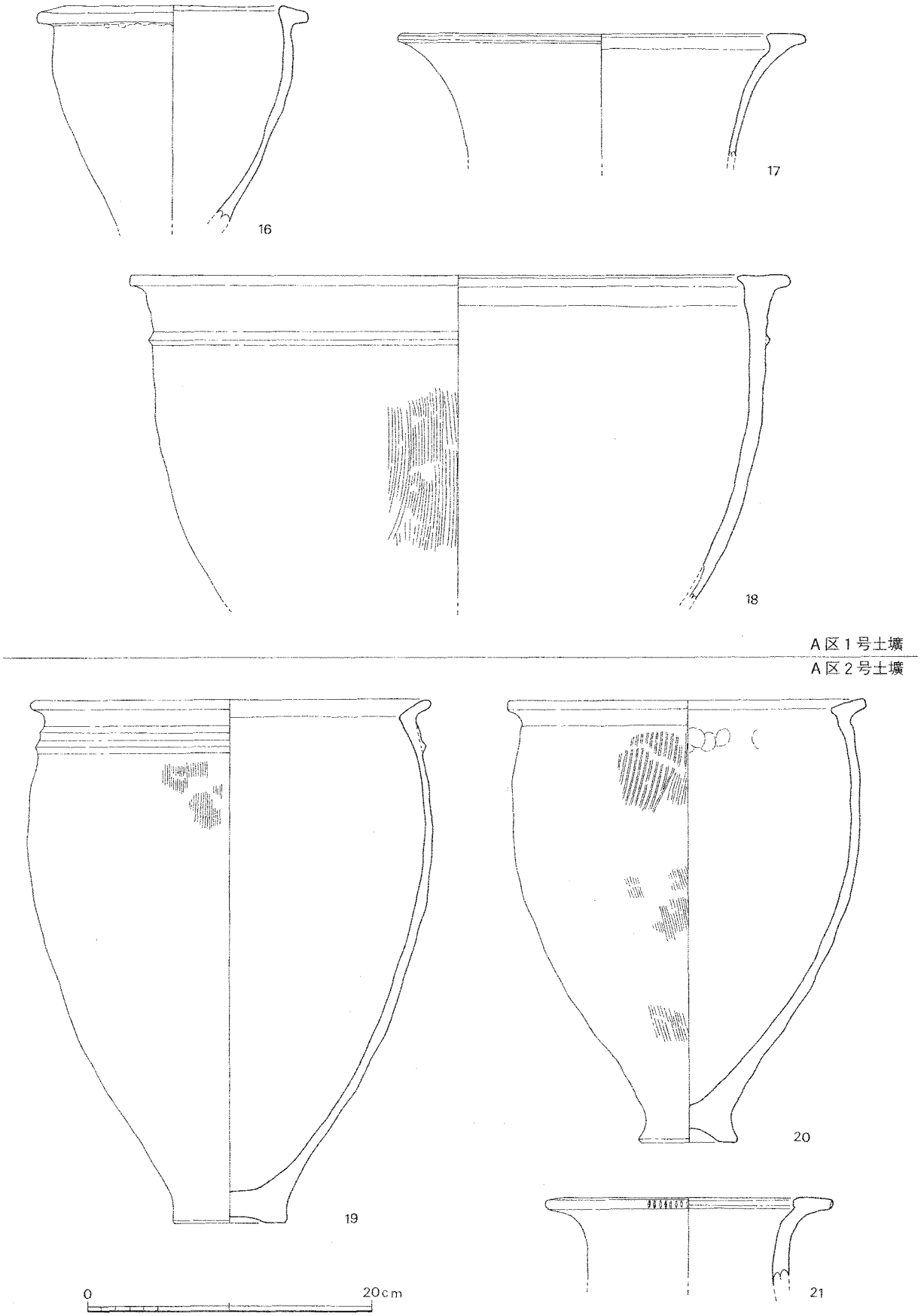
以上の3号土壙出土土器は，1・8が中期初頭の城ノ越式，2～6・11が中期前葉の須玖Ⅰ式古段階，7・9・10・12が中期後半の須玖Ⅱ式の資料で，中期中頃の須玖Ⅰ式新段階の資料が抜けて落ちている。中期初頭～前葉と中期後半の土壙が重複していた可能性がある。

⑬B区4号土壙出土土器（第47図）

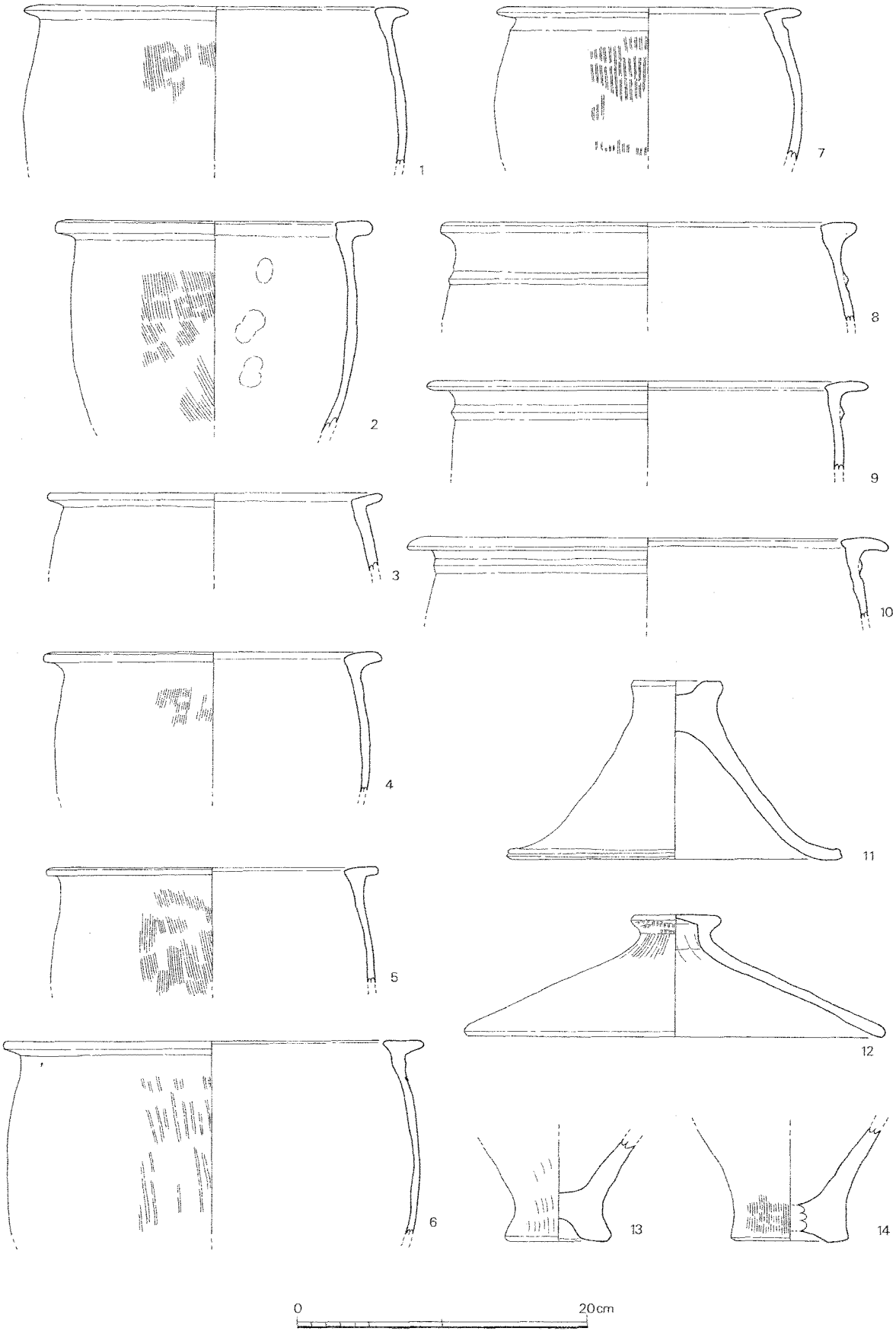
1～7は，甕である。1～3は逆L字形口縁の甕である。2・3は胴部に突帯をもち，1と2は平滑ナデ仕上げする。1は灰黄褐色，2は橙色，3はにぶい褐色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。4～7は鋤先形口縁の甕で，胴上部に突帯を付ける。7は胴部が平滑ナデ仕上げさ



第44図　A区1号土壙出土土器①（1／4）



第45図　A区1号土壙出土土器②，2号土壙出土土器（1／4）



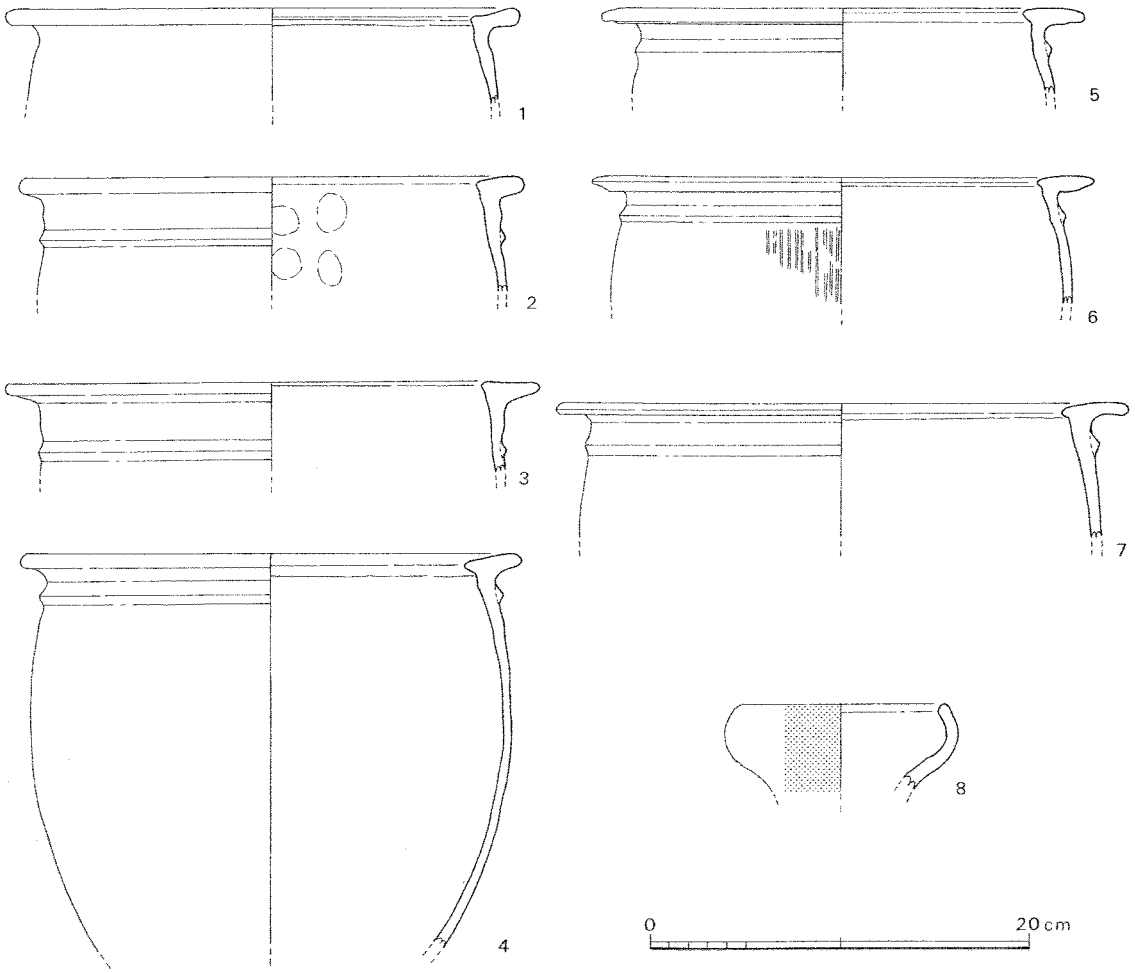
第46図　B区３号土壙出土土器（１／４）

れる。色調は，４・６・７がにぶい黄橙色，５が灰黄褐色を呈し，胎土に５が石英・長石，７が石英・長石・角閃石，４が石英・長石・角閃石・金雲母，６はさらに赤色砂を含む。８は丹塗の袋状口縁壺の口縁部である。にぶい黄橙色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。

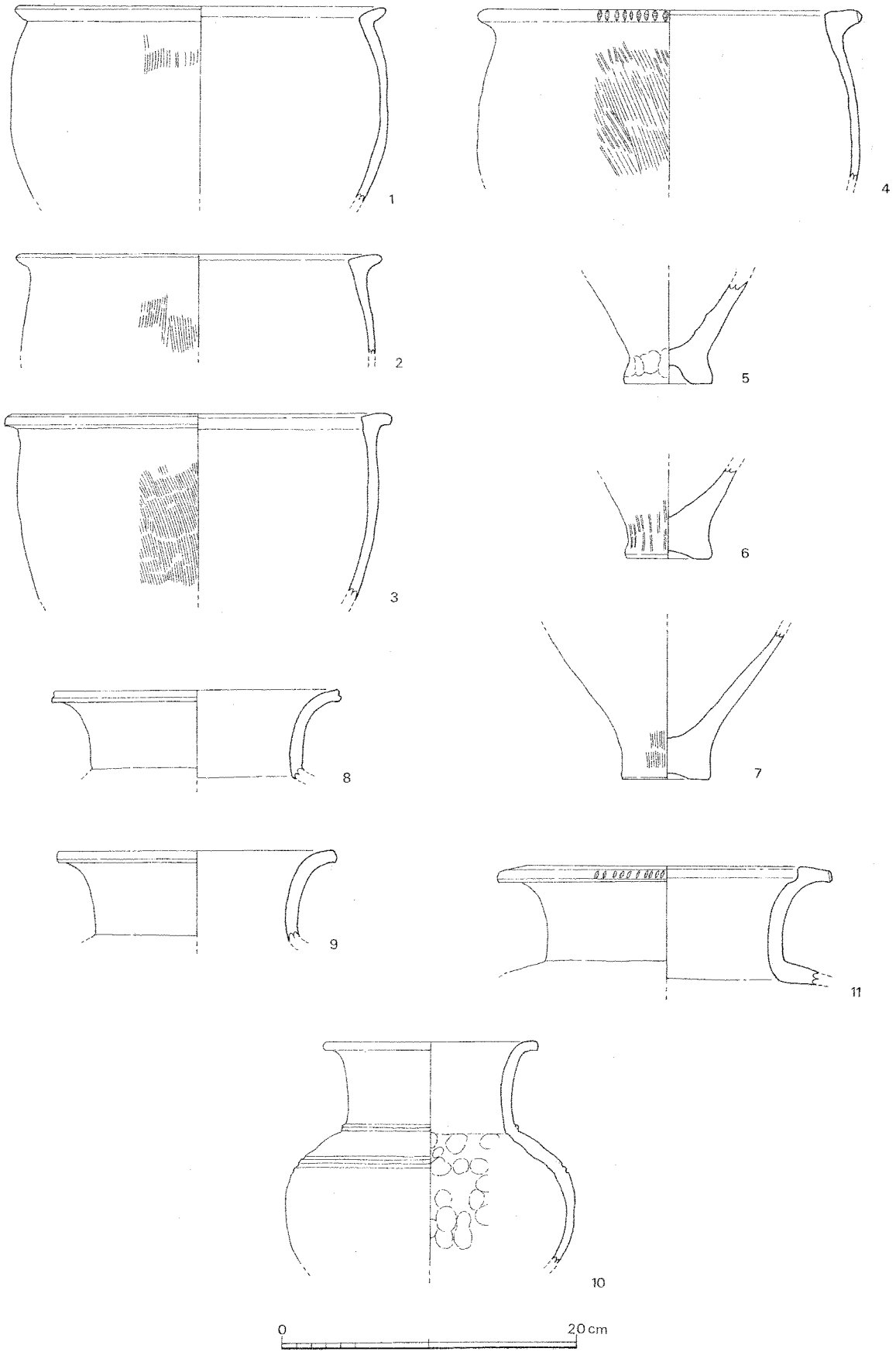
以上の４号土壙出土土器は，１・２が弥生中期前葉の須玖Ⅰ式古段階，３・４が中期中頃の須玖Ⅰ式新段階，５～７・８が中期後半の須玖Ⅱ式の資料である。

⑭Ｂ区５号土壙出土土器（第48図）

１～７は，甕である。１・２は断面三角形口縁の甕で，外面はハケナデ消しされる。１がにぶい橙色，２が灰褐色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。３・４は，短い逆Ｌ字形口縁の甕で，４は刻目を施している。胴部外面はハケメ調整，内面はナデ仕上げされる。にぶい褐色の色調で，胎土に４が石英・長石・角閃石・金雲母，３がさらに赤色砂を含む。５～７は，あげ底の底部である。５・６はふんばりをもち，５は指オサエ痕が残る。５が明赤褐色，６がにぶい橙色，７が橙色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。



第47図　Ｂ区４号土壙出土土器（１／４）



第48図　B区5号土壙出土土器（1／4）

8～11は，壺である。8～10は，朝顔形に広がる広口壺である。8・9は，口頸部外面を平滑に仕上げ，内面を8は平滑ナデ，9はヨコミガキを施している。10は，頸胴界に小さな三角突帯を付し，胴上部に淡い2条の沈線を施す。口頸部外面はタテミガキ，胴部はヨコミガキ調整を行う。胴部内面には，指オサエ痕が多く残る。8がにぶい赤褐色，9がにぶい橙色，10が黒っぽい褐灰色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。11は，鋤先形口縁の壺で，口唇に刻目を施す。内外面ともに平滑に仕上げている。灰褐色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。

以上の5号土壙出土土器は，弥生中期初頭の城ノ越式から中期前葉の須玖Ⅰ式古段階の資料で，1と10は擬無文土器の可能性をもつ。

⑮B区6号土壙出土土器（第49図）

1～4は，逆L字形口縁の甕で，4は胴上部に断面三角形の突帯をつける。胴部外面は，4がハケメ風化，2がハケメナデ消し，1・3が平滑にナデ仕上げする。2・3の底部は，少しあげ底になっている。色調は，1が灰褐色，2がにぶい赤褐色，3・4がにぶい橙色を呈し，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。5・6は，短い鋤先形口縁の壺である。口頸部は，5がナデ仕上げ，6が外面を平滑に仕上げ暗文を全周に施し，内面がヨコミガキされる。にぶい橙色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。7は，逆L字形口縁の鉢である。外面は平滑なナデ仕上げ，内面はナデ仕上げされ，指オサエ痕が残る。にぶい橙色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含んでいる。8は，小さな帯状の粘土紐の無文土器甕である。卵形の胴部で，平滑に仕上げている。底部は円盤状をなす。灰褐色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。

以上の6号土壙出土土器は，弥生中期前葉の須玖Ⅰ式古段階の資料である。

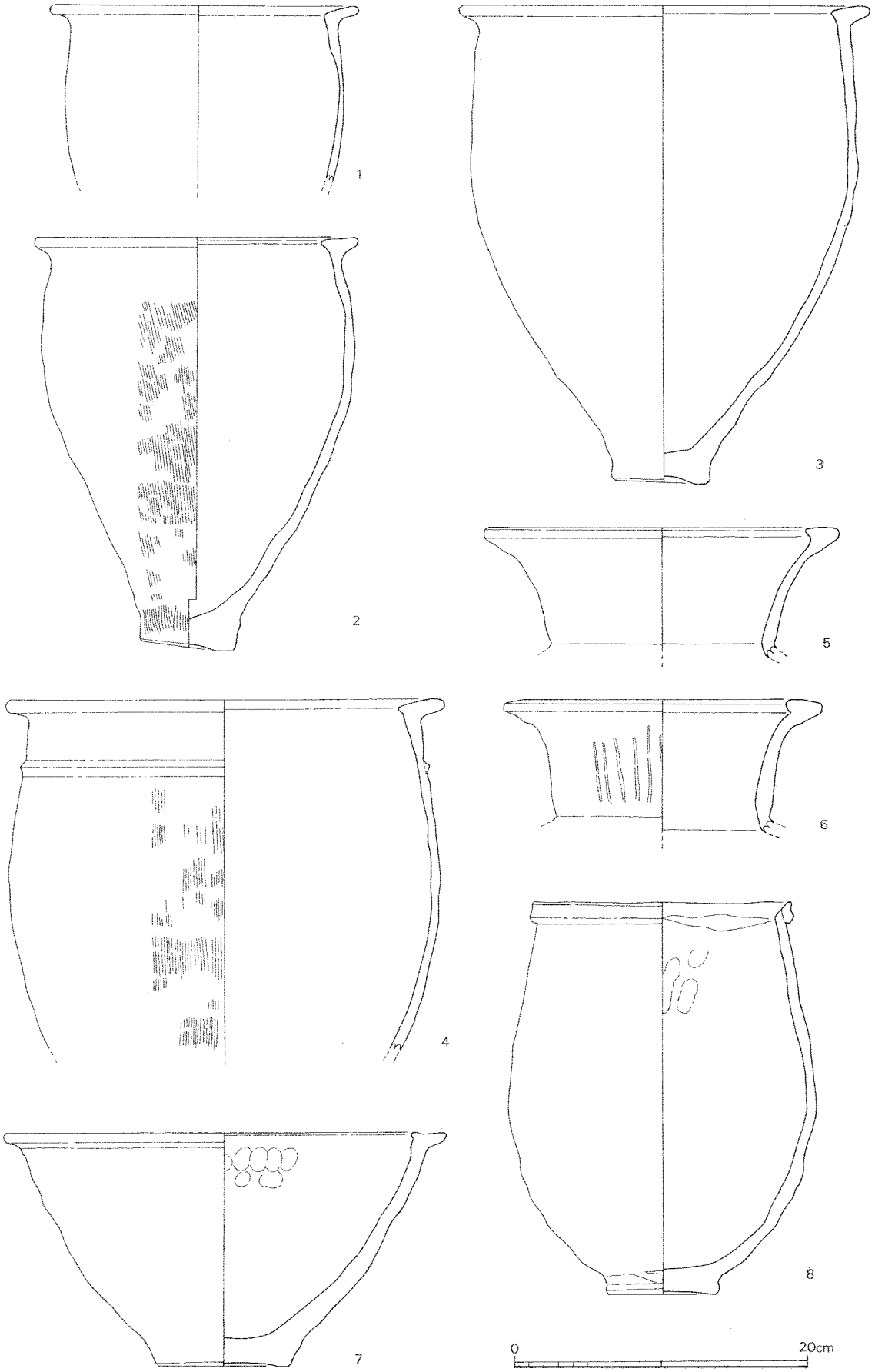
○D区7号土壙出土土器（第50図・第51図）

1～9は，逆L字形口縁の甕である。4・5の底部は，ややあげ底をなす。8・9は，胴上部に断面三角形の突帯を付し，9は外面を平滑に仕上げている。色調は，1が灰黄褐色，2・6・がにぶい橙色，3・4・7・8がにぶい赤褐色，5・9がにぶい褐色を呈し，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。10～12は，壺である。10は，朝顔形に開く広口壺である。口頸部には，全周に暗文が入る。にぶい橙色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。11・12は，鋤先形口縁の壺である。平滑に仕上げた口頸部に部分暗文を施す。11の頸部内面は，ヨコミガキを施す。11がにぶい赤褐色，12がにぶい橙色の色調で，胎土に11が石英・長石・角閃石・金雲母を含み，さらに12は褐色砂を含む。13は筒形の器台で，外面のハケメは風化を受ける。橙色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。14は，T字形口縁の甕棺である。内外面は，平滑に仕上げている。灰褐色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。

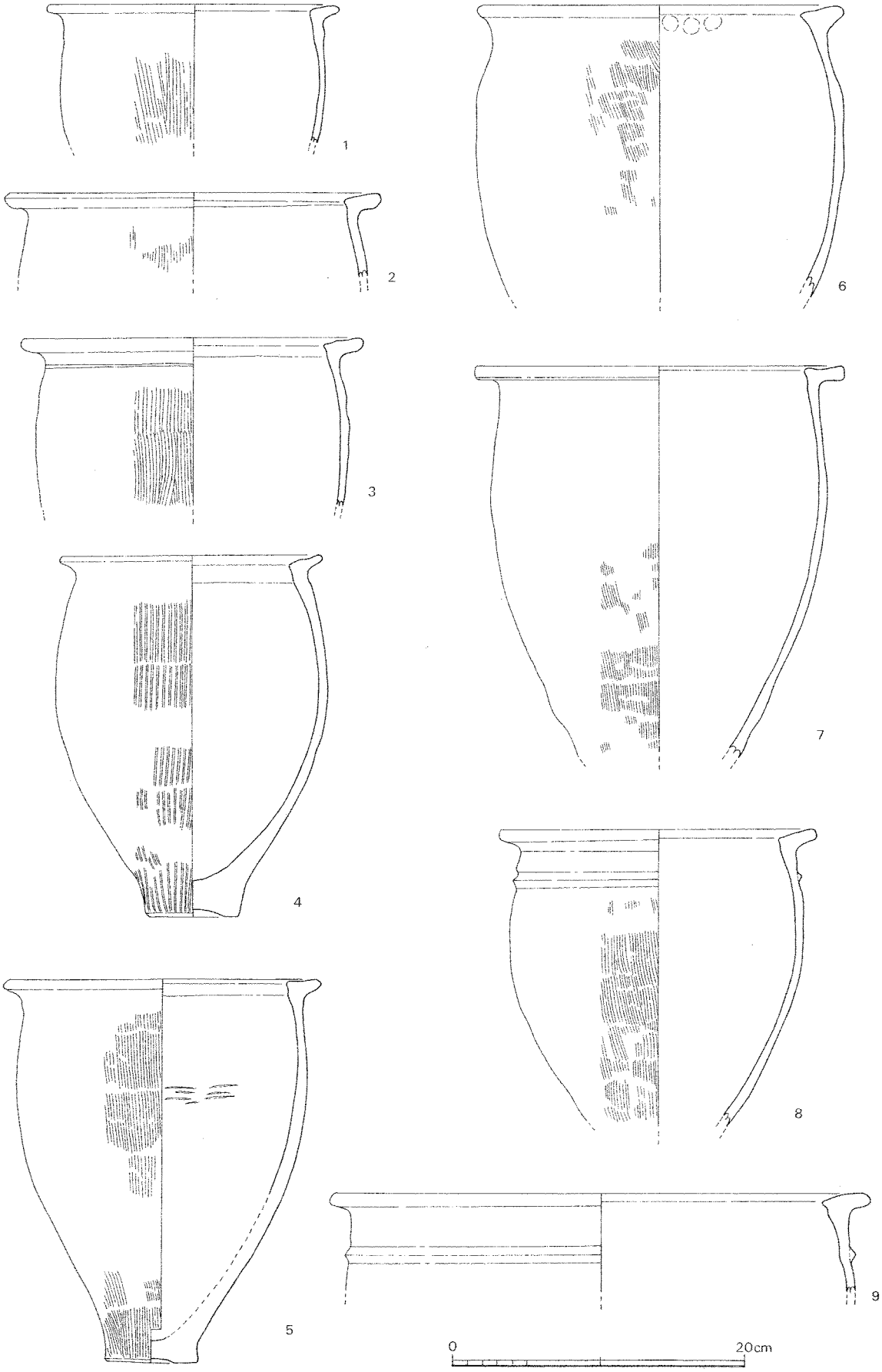
以上の7号土壙出土土器は，弥生中期前葉の須玖Ⅰ式古段階の資料で，甕棺は橋口編年のKⅡb式～KⅡc式の段階のものであろう。

○E区土器溜出土土器（第26図）

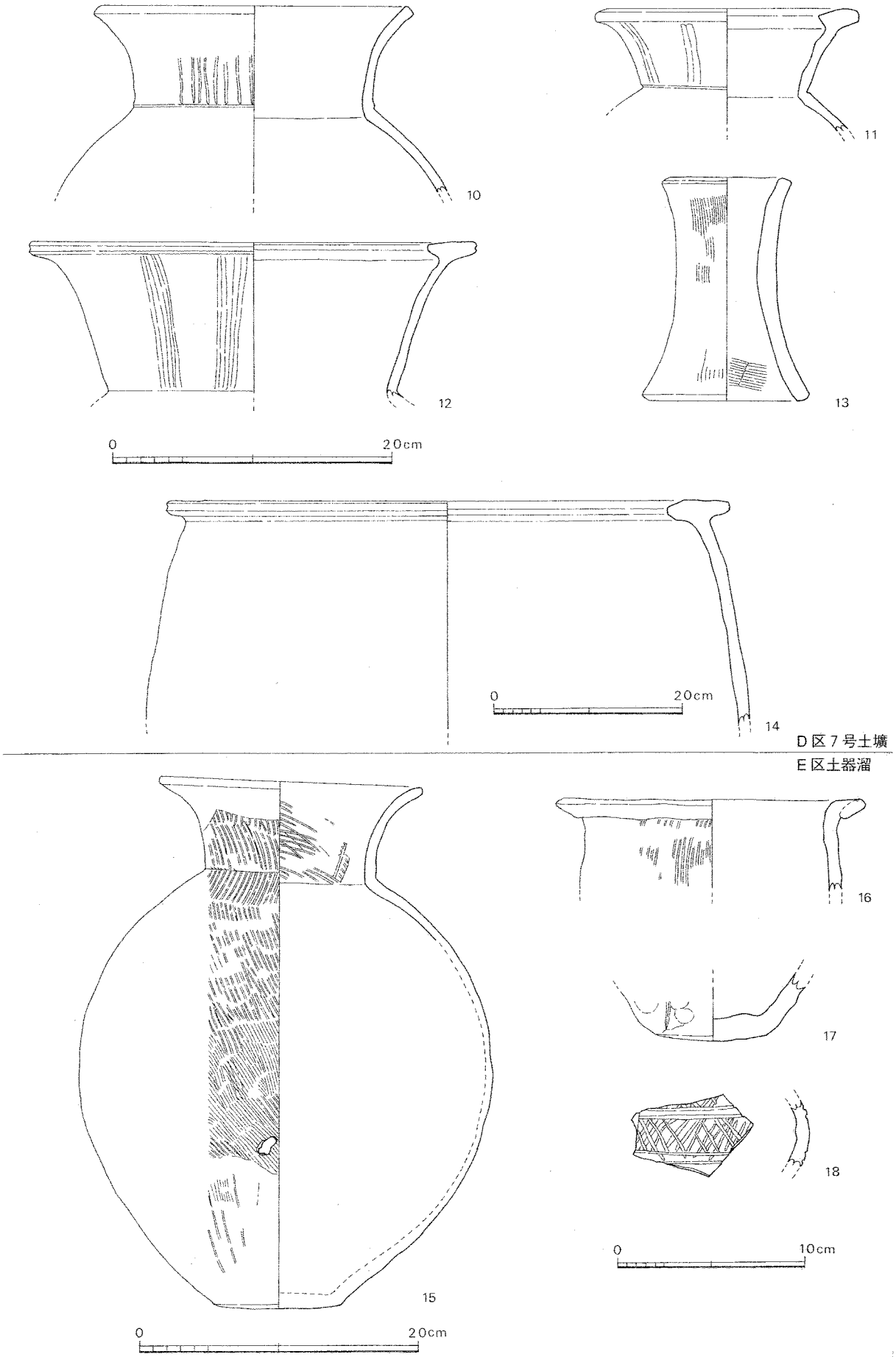
E区土器溜は，調査が最後まで続いたので整理途中で，今回の報告には間に合わなかった。特記す



第49図　B区6号土壙出土土器（1／4）



第50図　D区７号土壙出土土器①（１／４）

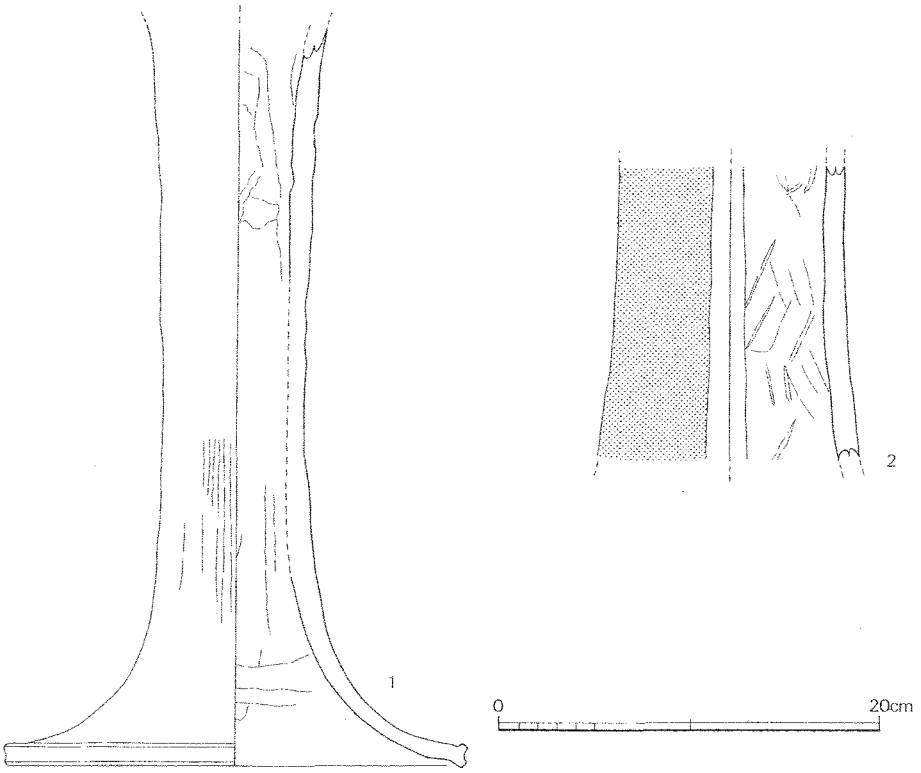


第51図　D区7号土壙出土土器②，E区土器溜出土土器（1／3，1／4，1／6）

べき土器と，朝鮮半島系土器について報告する。土器溜では，弥生中期中頃の須玖Ⅰ式新段階～弥生後期末までの土器が出土している。15は，朝顔形に開く口縁の広口壺である。胴部は中位に最大径をもつ卵形の形状で，底部は薄い凸レンズ状底をなす。外面はハケ調整され，下半をナデつけて消している。胴部下半には，焼成後に穿孔された小さな孔が認められる。にぶい橙色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。Ⅰ層出土。弥生後期中頃の資料で，なかから貨泉が１枚出土した重要遺物である。16～18は，朝鮮半島系土器である。16・17は無文系土器の甕である。16は，帯状の粘土紐口縁の甕である。外面は，ハケメをナデ消している。黒色系の褐灰色の色調で，胎土に石英・長石を含む。17は，丸底に近い平底で，器面は指オサエナデ調整される。褐灰色の色調で，胎土に石英・長石を含む。いずれもⅢ層出土。18は，三韓系の瓦質壺胴部片で，外面には淡い沈線がはいる。沈線間には，格子目状の暗文を施す。灰色の色調で，焼成良好である。Ⅲ層出土。

○筒形器台資料（第52図）

１は，平成10年度特定調査のＢ区２号濠南端から出土した筒形器台下半部である。外面は風化を受けて，丹塗はほとんどはげ落ちている。内面には，しぼり痕，板ナデ痕が残る。灰黄色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を含む。Ⅱ層出土。２は，平成９年度溜池調査で出土した資料である。透かしをもつもので，外面はタテミガキ，内面はヘラナデの後に平滑に仕上げている。にぶい黄橙色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。両者は，中期後半の須玖Ⅱ式の資料である。



第52図　筒形器台資料（１／４）

(2) **石器・石製品**（第53図～第74図）

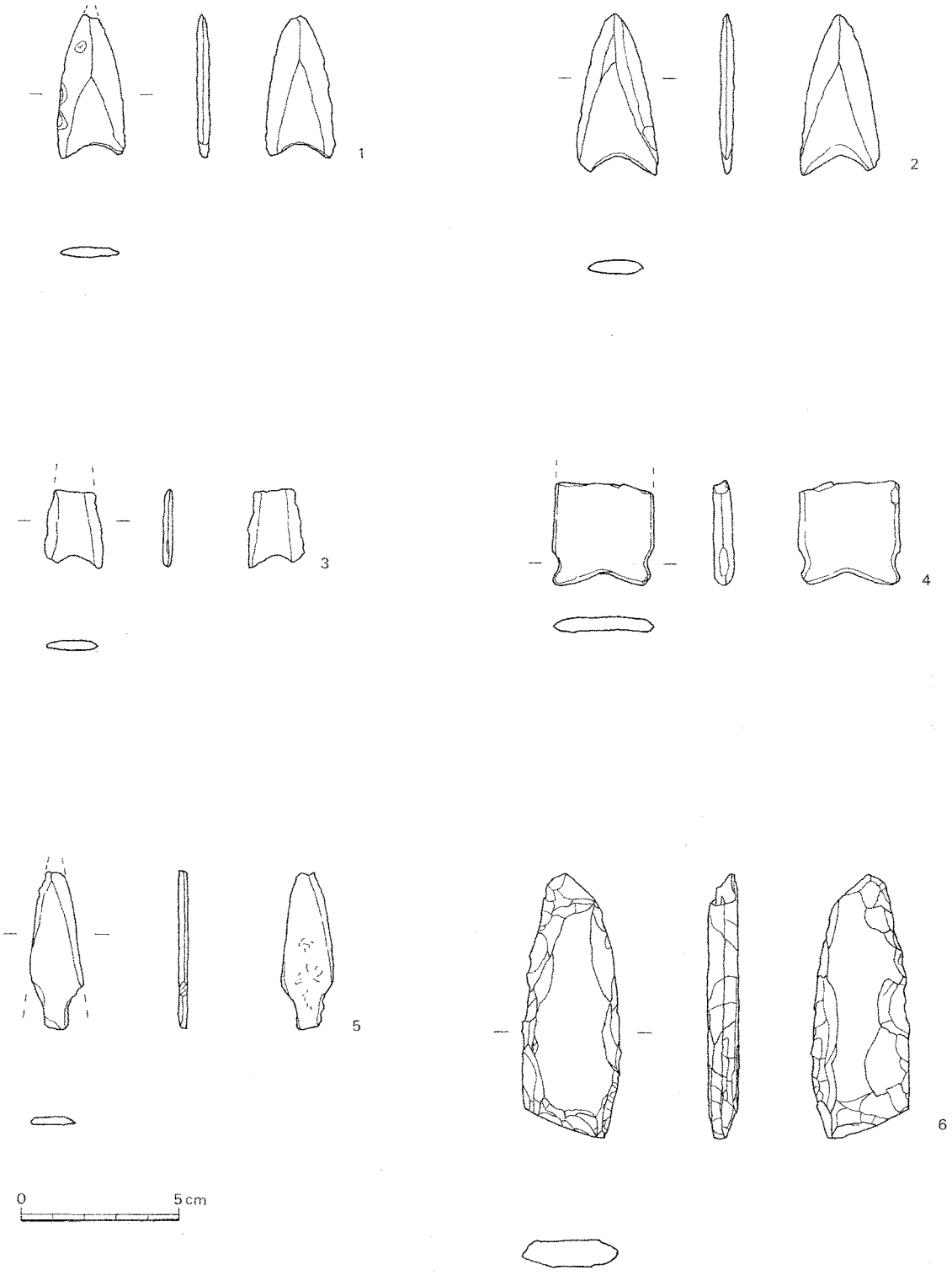
剥片石器は詳細を報告できないため，出土点数のみを紹介する。黒曜石製では，打製石鏃８，台形様石器３，ナイフ形石器２，細石核19，細石刃２が出土した。サヌカイト製では，削器２，石匙１が出土した。１～３と５は磨製石鏃である。５が有茎で他は無茎である。全て頁岩製。１・２・５が土器溜Ⅱａ層，３が土器溜Ⅱｂ層から出土した。１が3.9ｇ，２が5.5ｇ，３が1.7ｇ，５が3.1ｇを測る。６は石鏃未製品である。頁岩製，２号旧河道Ⅱ層から出土，36.6ｇ。４と７～23は磨製石剣である。９は折れた後石鏃に転用したもの，15は未製品。12が蛇文岩，15・17が粘板岩，16が脇野亜層群頁岩で他は頁岩製。４がＡ区１号濠３層，７がＢ区３層，８が２号旧河道Ⅱ層，９が２号溝Ⅲ層，10が土器溜Ⅱｂ層，11が５号土壙，12・17が土器溜Ⅱａ層，13が２号旧河道Ⅱ層，14がＡ区Ⅳ層，15がＢ区Ⅳｄ層，16がＤ区３ａ層，18がＢ区Ⅳｂ層，19が２号旧河道Ⅱ層，20がＥ区３ｂ層から出土。４が9.8ｇ，７が15.6ｇ，８が10.4ｇ，９が6.9ｇ，10が4.8ｇ，11が4.0ｇ，12が13.1ｇ，13が40.5ｇ，14が39.7ｇ，15が53.3ｇ，16が59.1ｇ，17が36.1ｇ，18が31.4ｇ，19が44.8ｇ，20が57.7ｇを測る。磨製石剣は他に１例出土した。21～25は磨製石戈である。21が粘板岩で他は頁岩である。21・22・24が２号旧河道Ⅱ層，23がＢ区Ⅳｃ層，25がＡ区３層から出土した。21が35.0ｇ，22が55.1ｇ，23が27.2ｇ，24が25.9ｇ，25が66.7ｇである。26は方柱状片刃石斧である。粘板岩製で，97.7ｇを測り，Ｃ区１号濠２層から出土した。方柱状片刃石斧は他に１例出土した。27から33は石鑿である。29が頁岩製で他は粘板岩製である。27がＣ区１号濠２層，28がＢ区２層，29がＢ区Ⅳｃ層，30・31がＢ区Ⅳｂ層，32がＡ区２ａ層，33がＢ区３層，34が２号旧河道Ⅱ層から出土した。27が17.8ｇ，28が20.0ｇ，29が12.7ｇ，30が18.5ｇ，31が10.7ｇ，32が41.0ｇ，33が40.0ｇを測る。34は方鉛鉱か亜鉛鉱を用いた石製把頭飾で，２号旧河道Ⅱ層から出土，40.9ｇを測る。35・36は石製紡錘車でともに頁岩を使用。35が２号旧河道Ⅱ層，36がＥ区３ａ層から出土。35が19.6ｇ，36が12.3ｇを測る。37から41は石錘である。37・38が砂岩，他は頁岩を使用。37がＡ区Ⅳ層，38が土器溜，39～40が２号旧河道Ⅱ層から出土。37が19.8ｇ，38が16.7ｇ，39が4.8ｇ，40が11.7ｇ，41が10.9ｇを測る。42～47は蛤刃石斧である。43は未製品である。全て頁岩製。42・46・47は２号旧河道Ⅱ層，43がＢ区Ⅳｄ層，44がＤ区２号濠２層，45が４号濠から出土。42が665.4ｇ，43が198.3ｇ，44が387ｇ，45が30.17ｇ，46が116.4ｇ，47が117.5ｇを測る。48～91は石鏃である（未製品を含む）。素材は全て頁岩を使用。48・53・55・57～59・64～66・69・73・76・79・83・87・88が２号旧河道Ⅱ層，49は土器溜，50・68は７号土壙，51・54・67はＢ区Ⅳｄ層，52はＢ区Ⅳ層，56・60・77が土器溜Ⅱｂ層，61がＢ区Ⅳｂ層，62・70がＣ区１号濠１層，63が土器溜Ⅱａ層，71がＤ区２号濠２層，72がＤ区２層，74がＡ区Ⅳ層，75・85が２号旧河道Ⅲ層，78が３号溝１層，80がＢ区２層，81が土器溜Ⅰ層，82・84・86・89がＤ区１号濠１層，90が２号溝２層，91がＢ区Ⅳｃ層から出土した。48が28.4ｇ，49が185.3ｇ，50が59.2ｇ，51が48.0ｇ，52が152.6ｇ，53が16.3ｇ，54が7.5ｇ，55が37.5ｇ，56が15.7ｇ，57が14.9ｇ，58が24.1ｇ，59が11.7ｇ，60が9.6ｇ，61が6.8ｇ，62が46.9ｇ，63が22.9ｇ，64が35.7ｇ，65が25.6ｇ，66が10.8ｇ，67が14.7ｇ，68が50.2ｇ，69が76.6ｇ，70が20.1ｇ，71が24.2ｇ，72が65.3ｇ，73が36.4ｇ，74が

37.4g，75が31.9g，76が16.1g，77が23.1g，78が25.1g，79が29.0g，80が37.8g，81が38.1g，82が29.5g，83が25.4g，84が67.2g，85が22.5g，86が14.3g，87が49.4g，88が15.8g，89が17.1g，90が16.5g，91が18.9gを測る。92～99は石庖丁である（未製品を含む）。全て頁岩製。92・95・98が2号旧河道Ⅱ層，93がB区Ⅳb層，94・99がE区3b層，96がE区3a層，97がB区3b層である。92が40.4g，93が28.1g，94が25.7g，95が35.9g，96が7.5g，97が65.5g，98が86.8g，99が28.9gである。100～165は凹石・敲器・磨石である。全て玄武岩製。100・106・113・115・123・・145・152がA区2号濠2層，101がC区1号濠4層，102・105・109・111・122・129・142・146・148・151・154・156・159・160・161・163がC区1号濠1層，103・107・128・131・137・138・147・165がD区2号濠2層，104・108・133・134・136がD区1号濠1層，110・117・157が4号濠1層，112・116・130・140・141・143・153がC区1号濠2層，114がA区1号濠1層，118がA区2号濠3層，119が3号土壙，120がA区2号濠1層，121が1号土壙，124・149・158が7号土壙，132・135・144・162・164がD区2号濠1層，139・150が4号濠2層，155がC区1号濠3層から出土。重さは，142.3g～1759.9gを測る。166と167は凝灰岩製の支脚形石製品で，地元ではクド石と呼ばれる。166が2号旧河道Ⅱ層，167がB区3層から出土した。166が1189.2g，167が3620.0gを測る。168～175は凹石等を石錘に転用したものである。全て玄武岩製。168・170がB区Ⅳb層，169がD区1号濠1層，171～173・175が2号旧河道Ⅱ層，174がE区3b層から出土した。重さは85.4g～930.6gを測る。176は玄武岩製の礫器である。湾曲した刃部を形成して，双角の尖頭部か湾曲部を使用するものであろう。類例が過去に幡鉾川本流旧河道から出土している。土器溜Ⅱb層出土，287.4gを測る。177～182は砥石である。177が粘板岩で他は砂岩を使用。177が土器溜，178がA区2号濠2層，179がB区Ⅳd層，180・181が2号旧河道Ⅱ層，182がD区2号濠2層から出土した。重さは144.1g～930.5gを測る。183は砂岩製の石錐である。3号旧河道から出土した。重さは177.4gを測る。

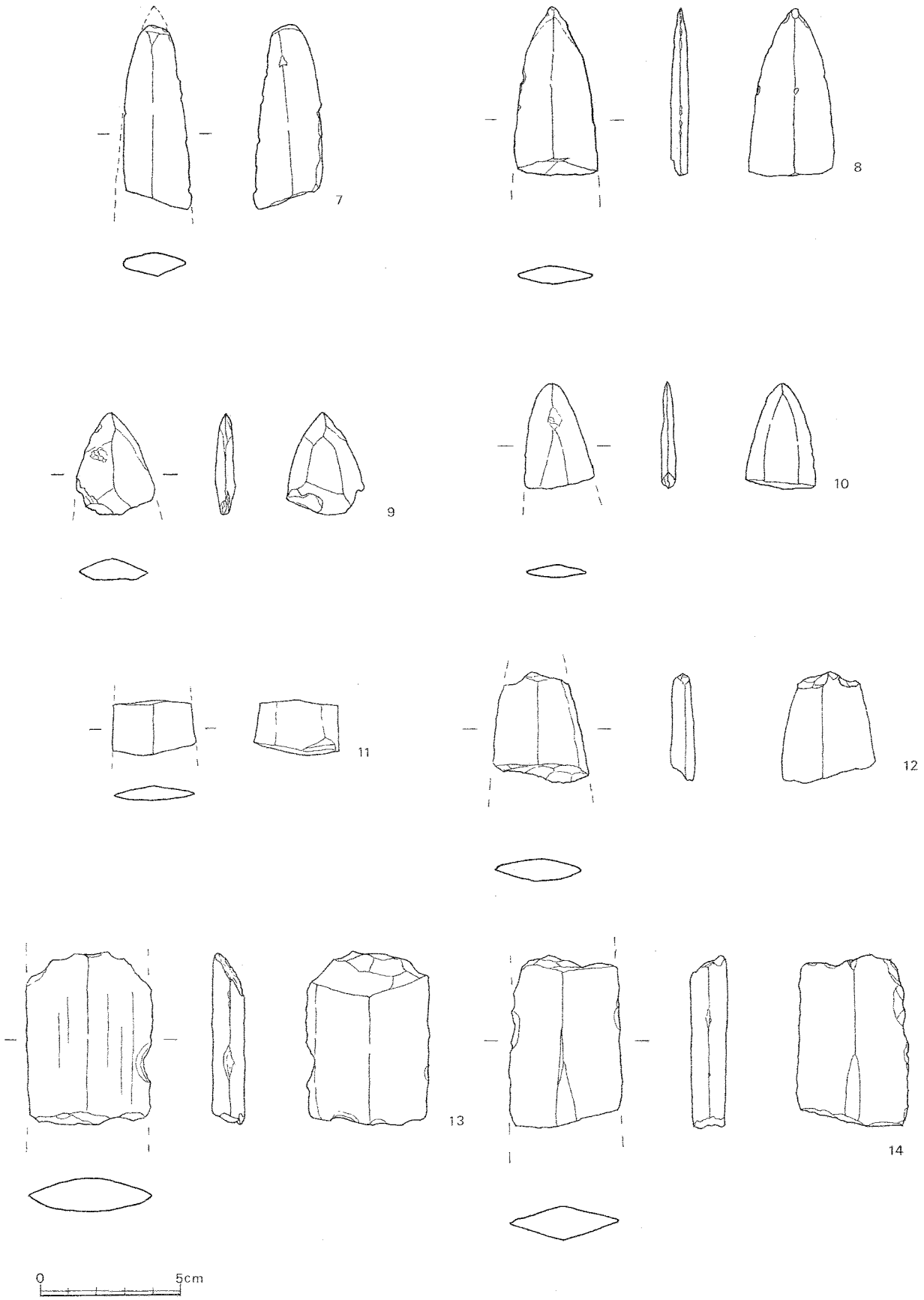
(3) 金属製品（第75図～第77図）

1～4は，貨泉である。1は土器溜のⅠ層から出土した。2は2号旧河道のⅡ層から出土したが，本来河道の西隣にある土器溜にあったものが混入したものと考えられる。3は土器溜Ⅰ層から出土した壺内に納められていた。何らかの祭儀行為の跡と考えられる。4は土器溜のⅢ層から出土した。法量は，1が直径22.40㎜，厚さ1.40㎜，重さ1.10g，方孔6.20×6.40㎜である。2は直径22.70㎜，厚さ1.60㎜，重さ2.40g，方孔7.10×6.40㎜である。3は直径22.10㎜，厚さ1.40㎜，重さ2.20g，方孔6.15×7.05㎜である。4は直径21.60㎜，厚さ1.35㎜，重さ1.90g，方孔7.10×7.20㎜である。方孔の輪郭は，1が表面背面とも，2～4が背面のみにある。現状は1と2が一部破損し，1～3は風化も受けている。4は良好である。

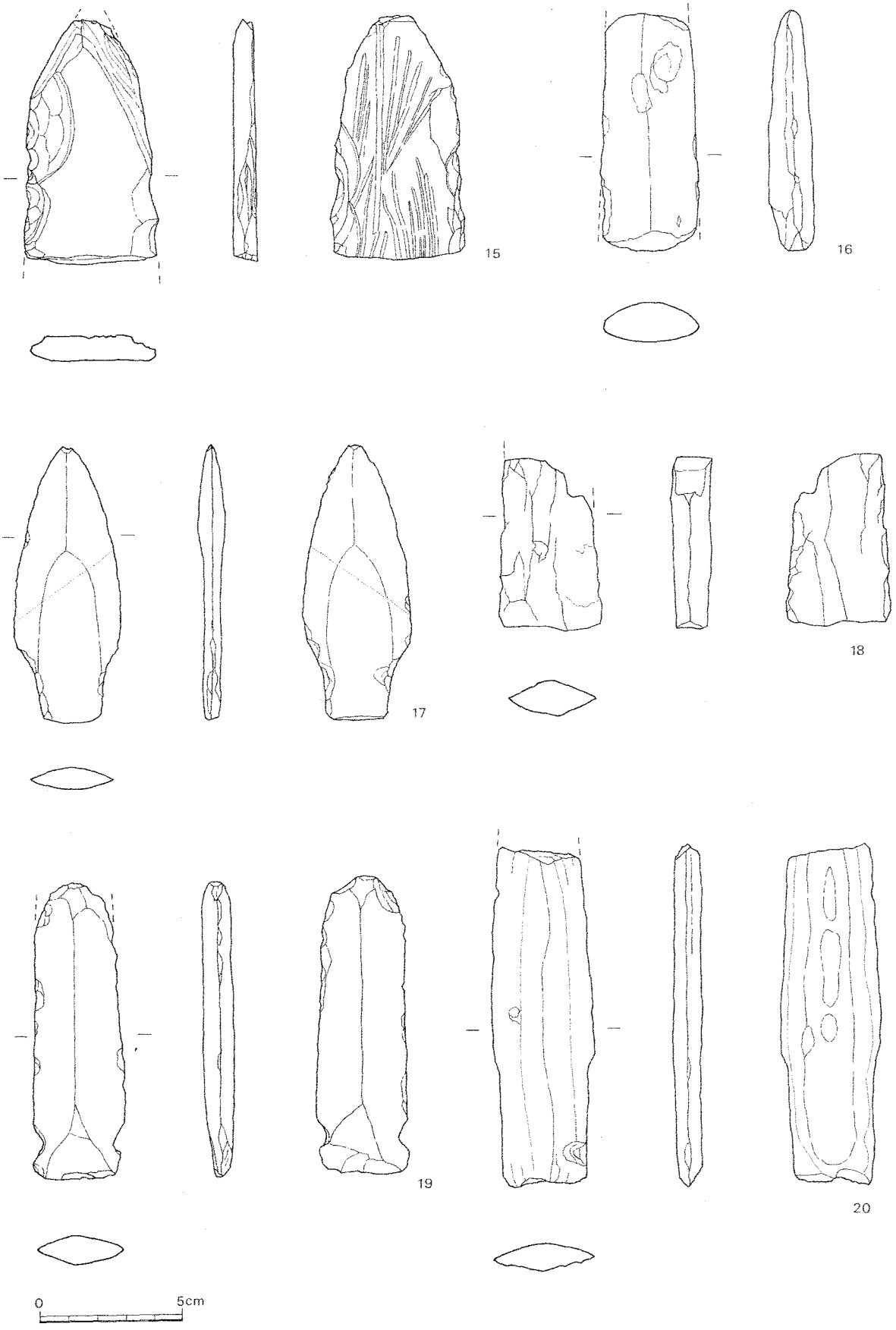
5は，楽浪製馬車具である。青銅製で一部欠失し，高さ2.1cm，上径2.8cm，下径3.2cm，胴最大径3.7cm，現存重量24gを測る。土器溜の縁部から出土した。漢代の楽浪郡で作られた馬車具の一部で，形態から車軸頭の可能性があるが，類例より小型であるので，礼器として作られたミニチュアの馬車



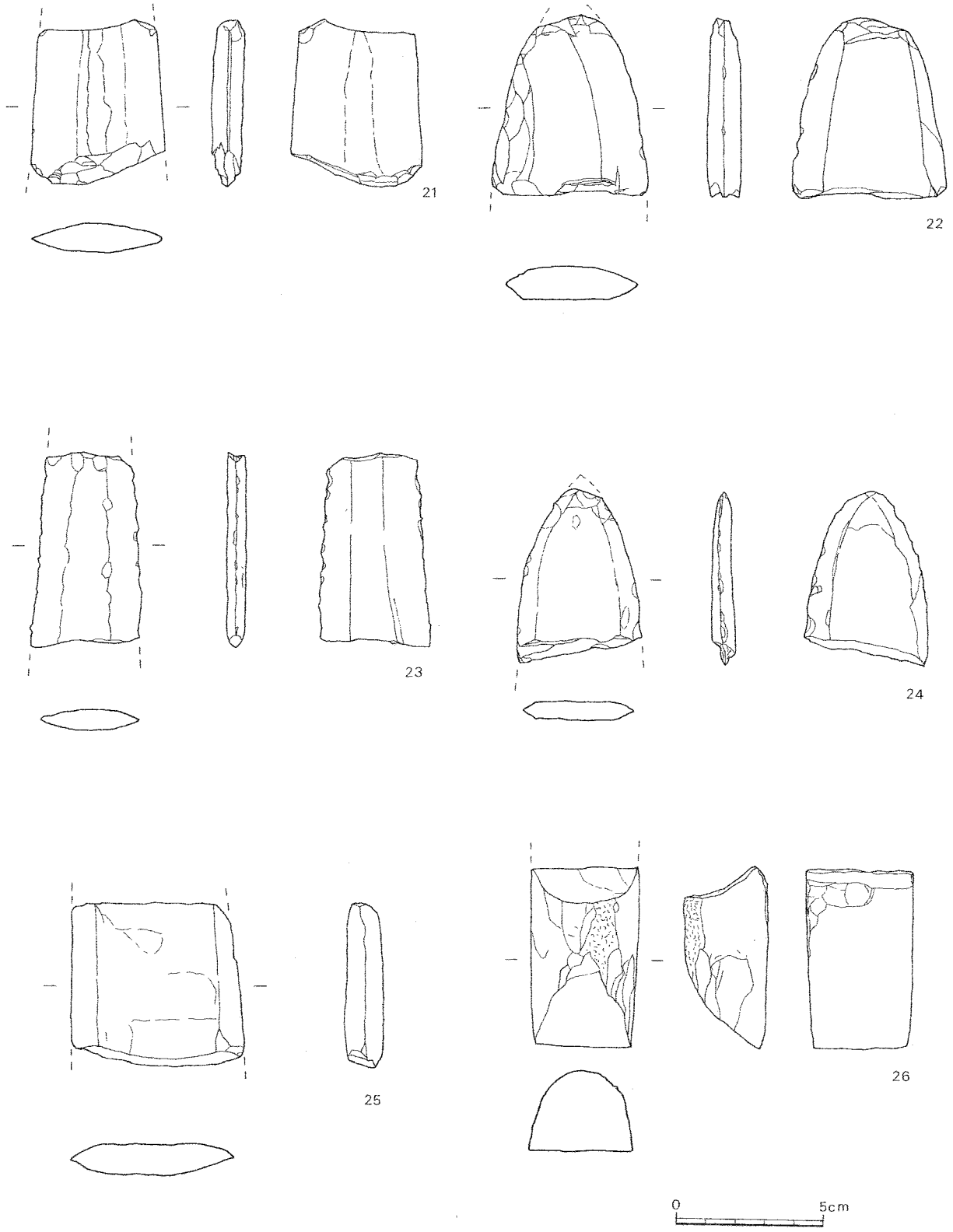
第53図　石器・石製品①（1／2）



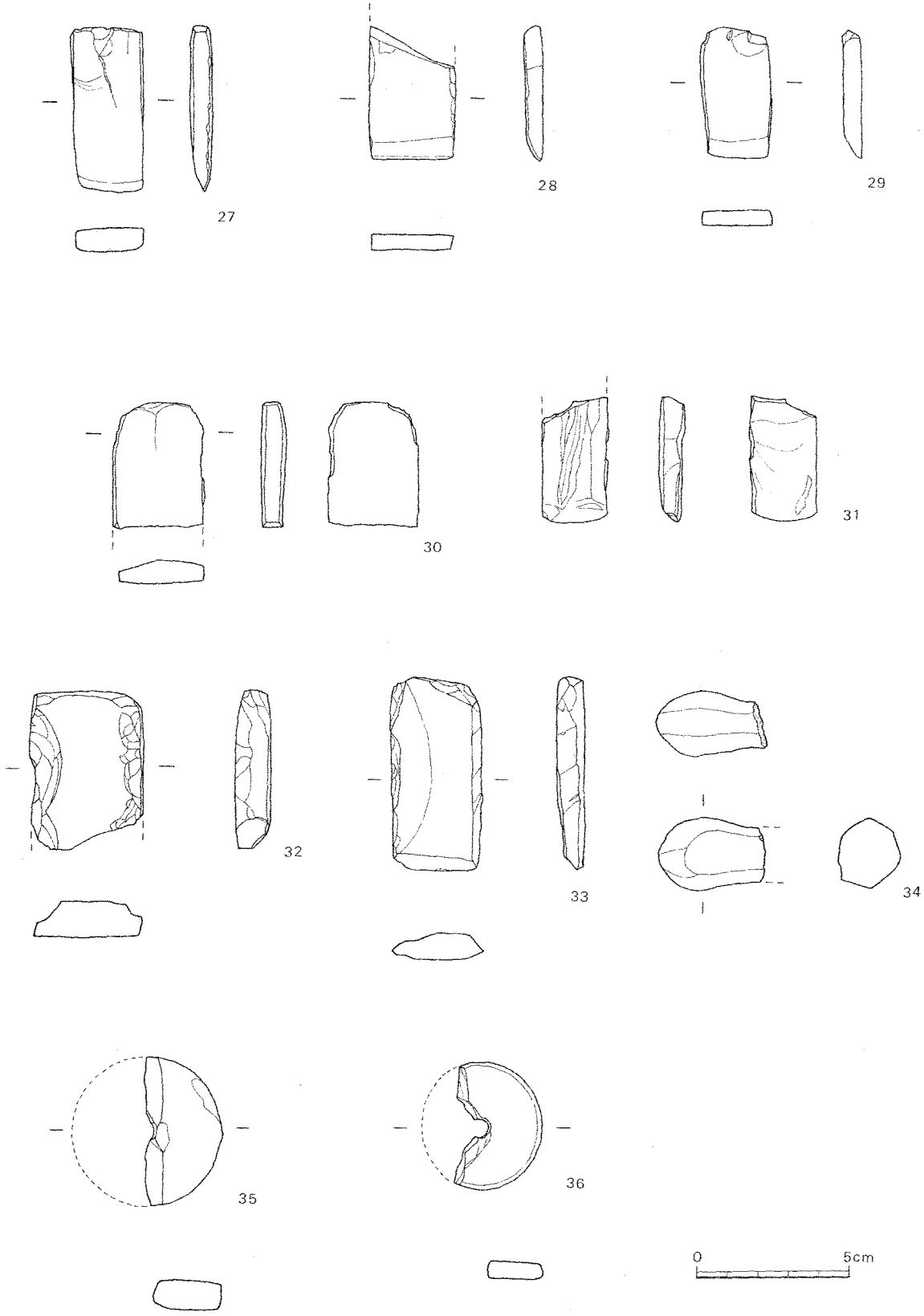
第54図　石器・石製品②（1／2）



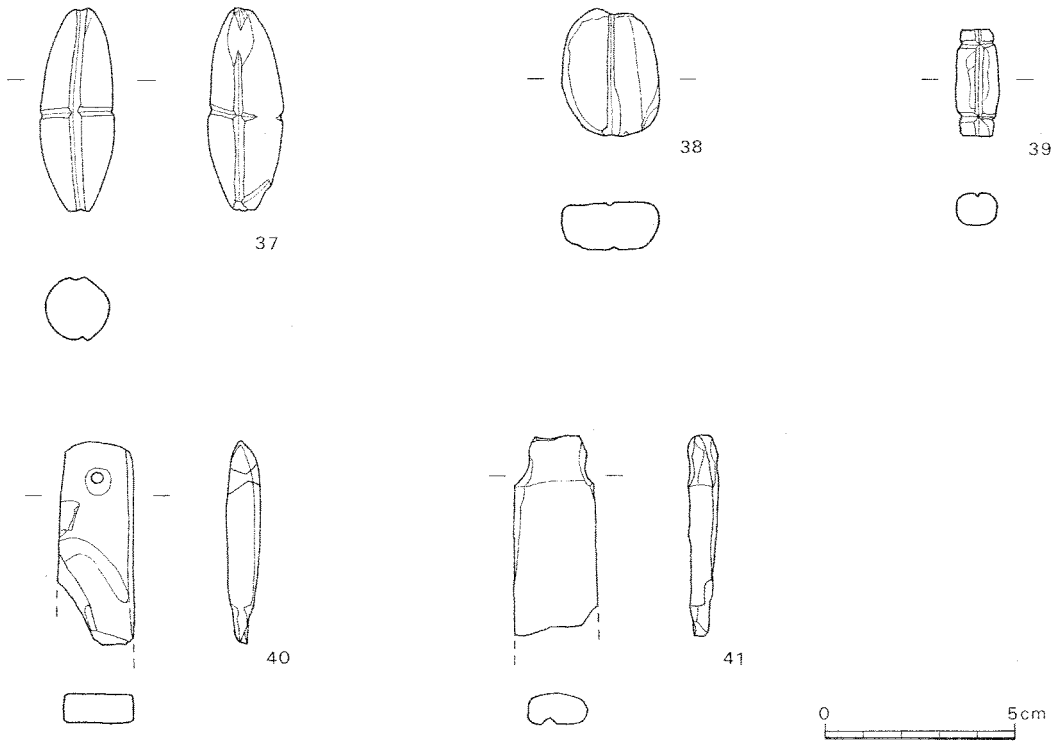
第55図　石器・石製品③（1／2）

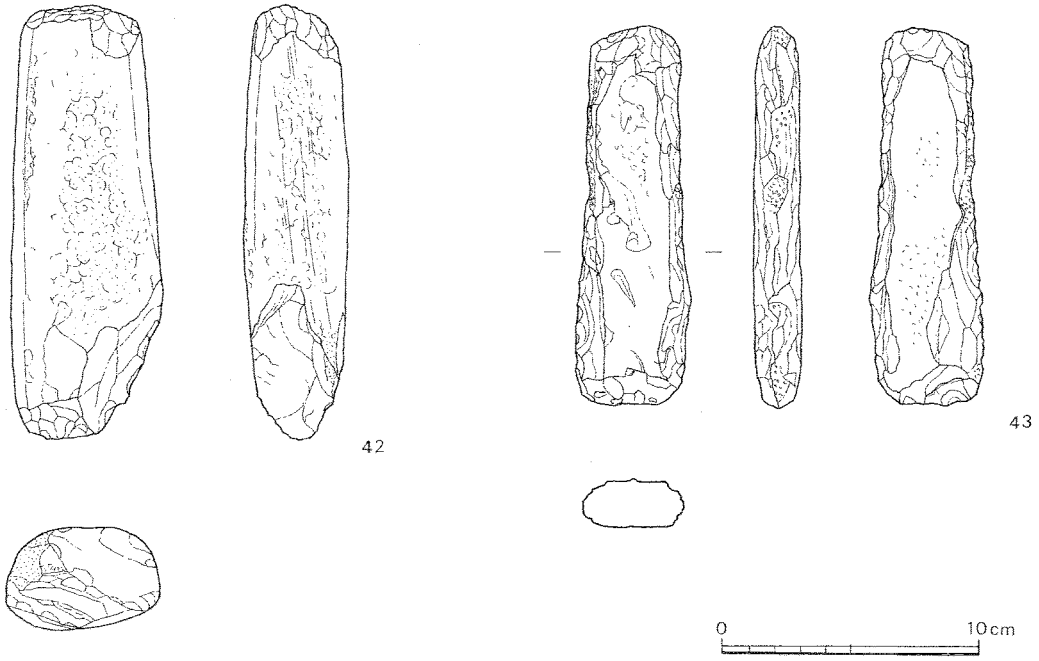


第56図　石器・石製品④（1／2）

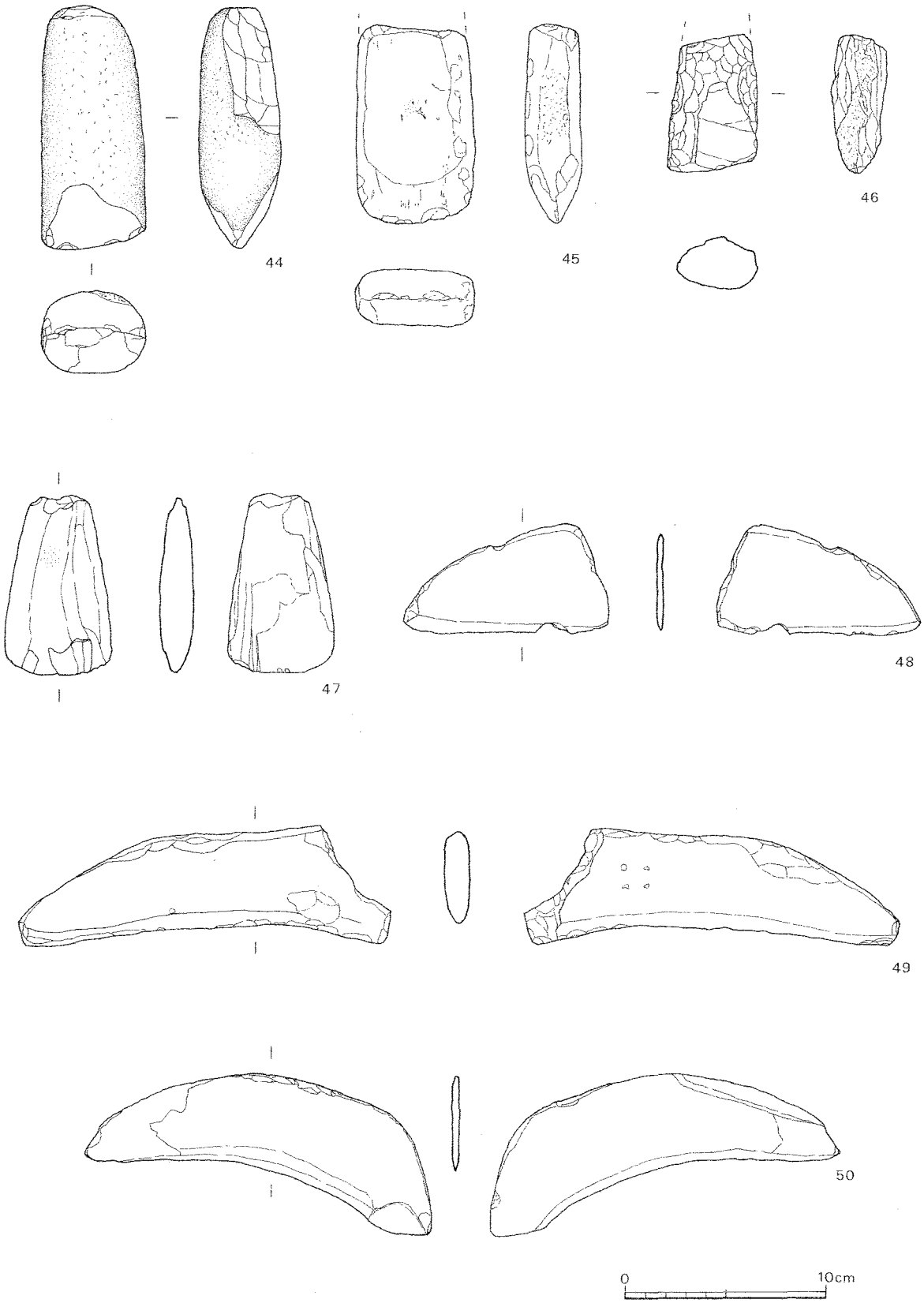


第57図　石器・石製品⑤（1／2）

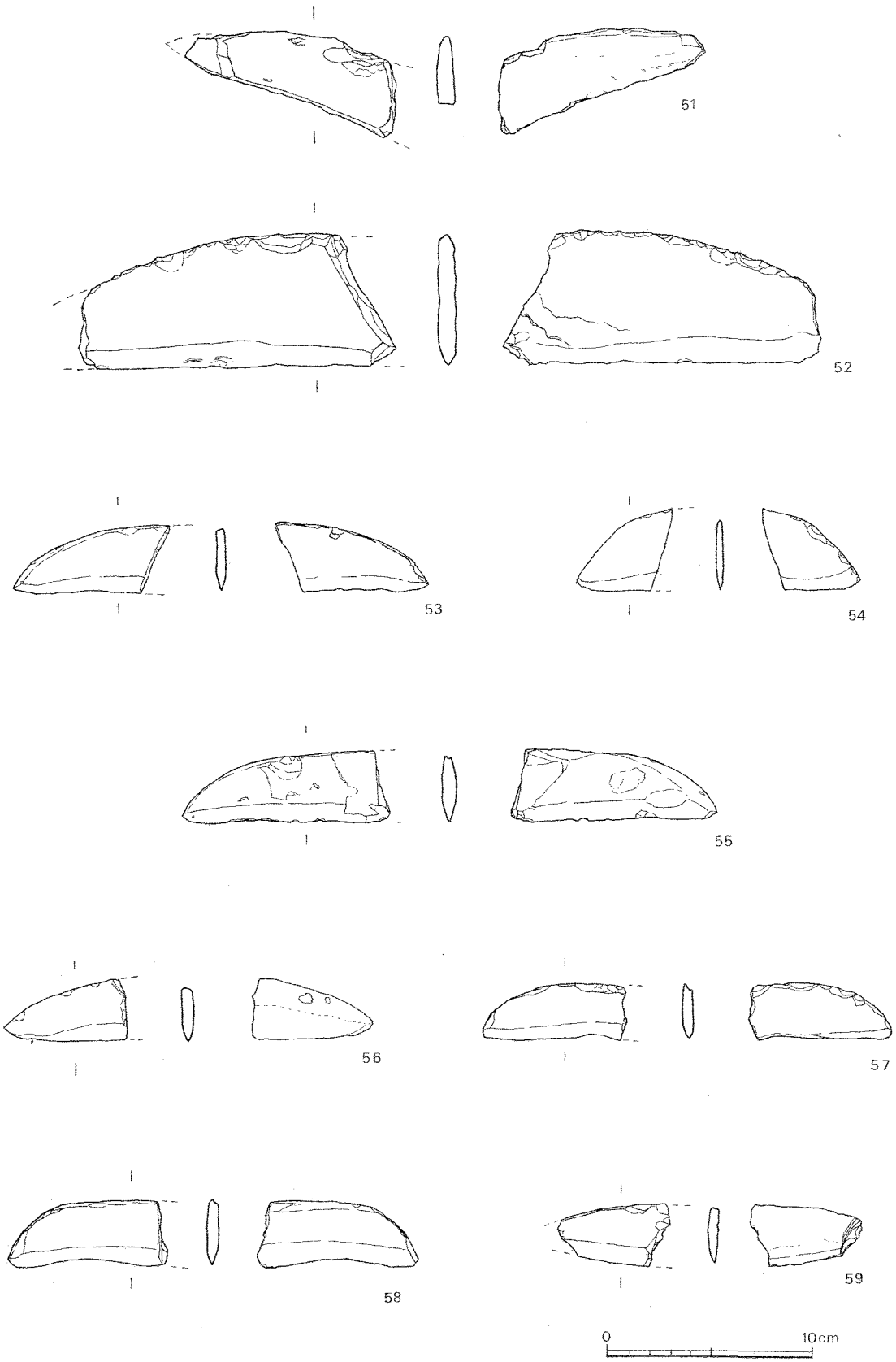




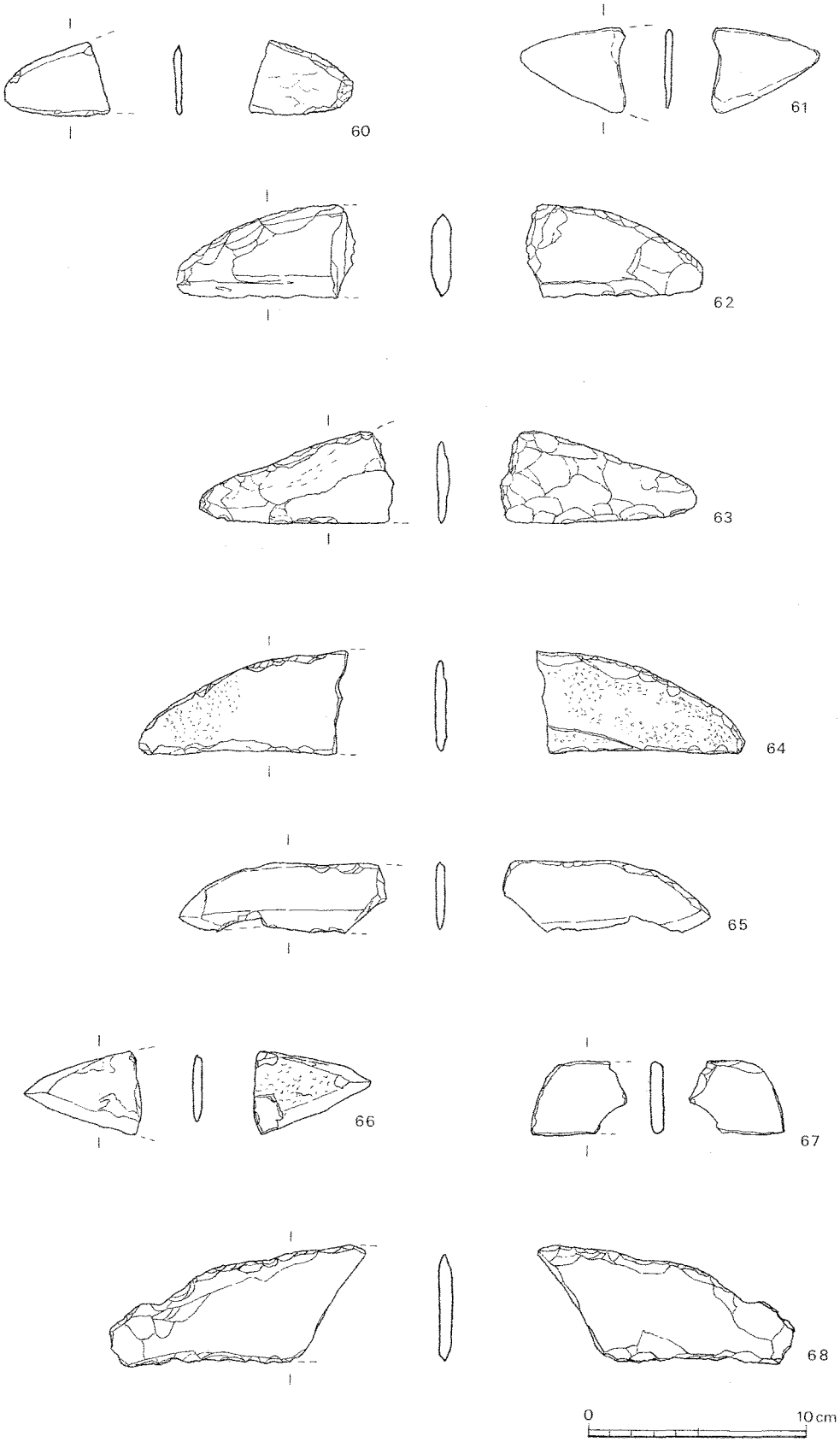
第58図　石器・石製品⑥（1／2，1／3）



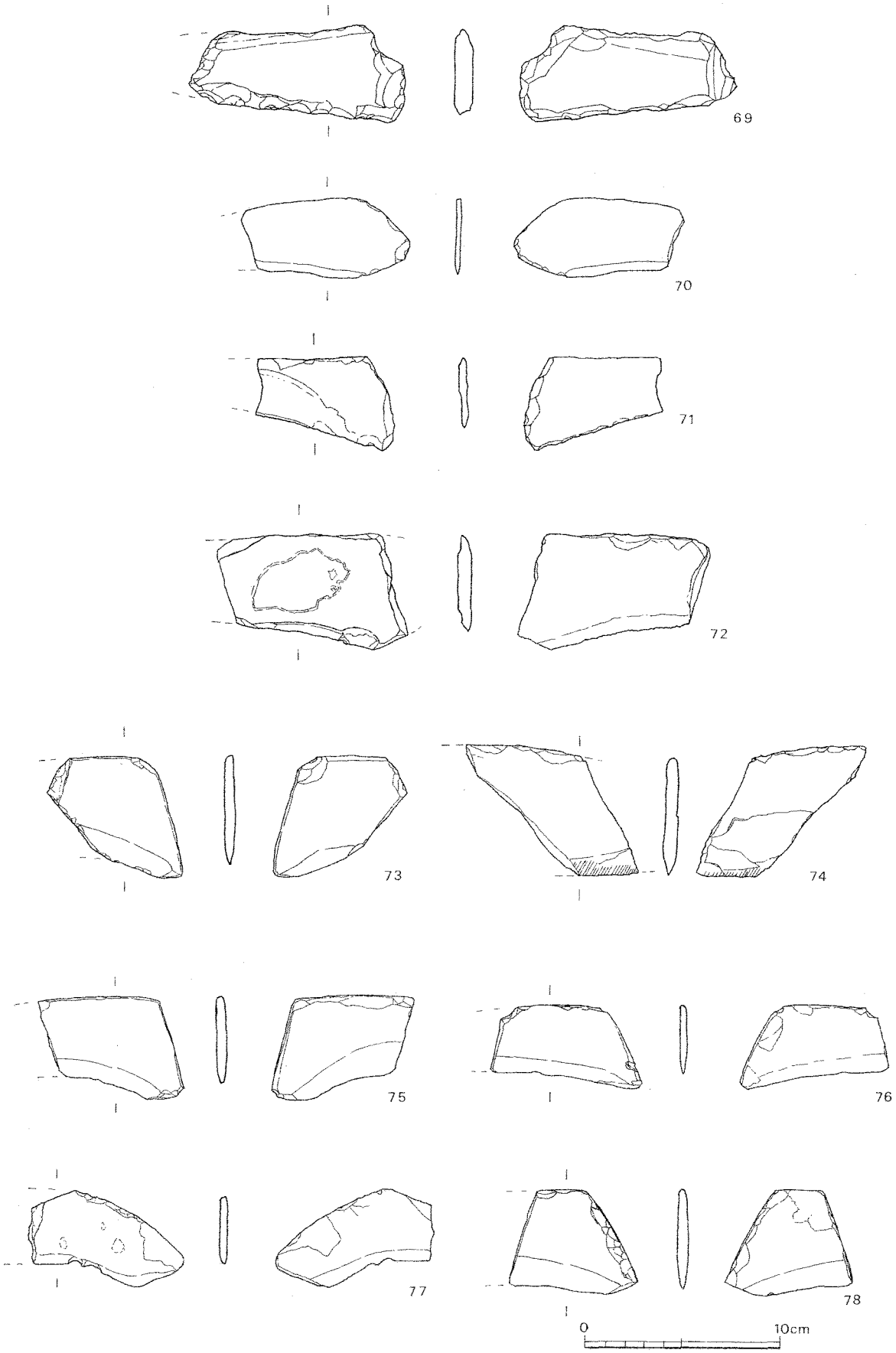
第59図　石器・石製品⑦（1／3）



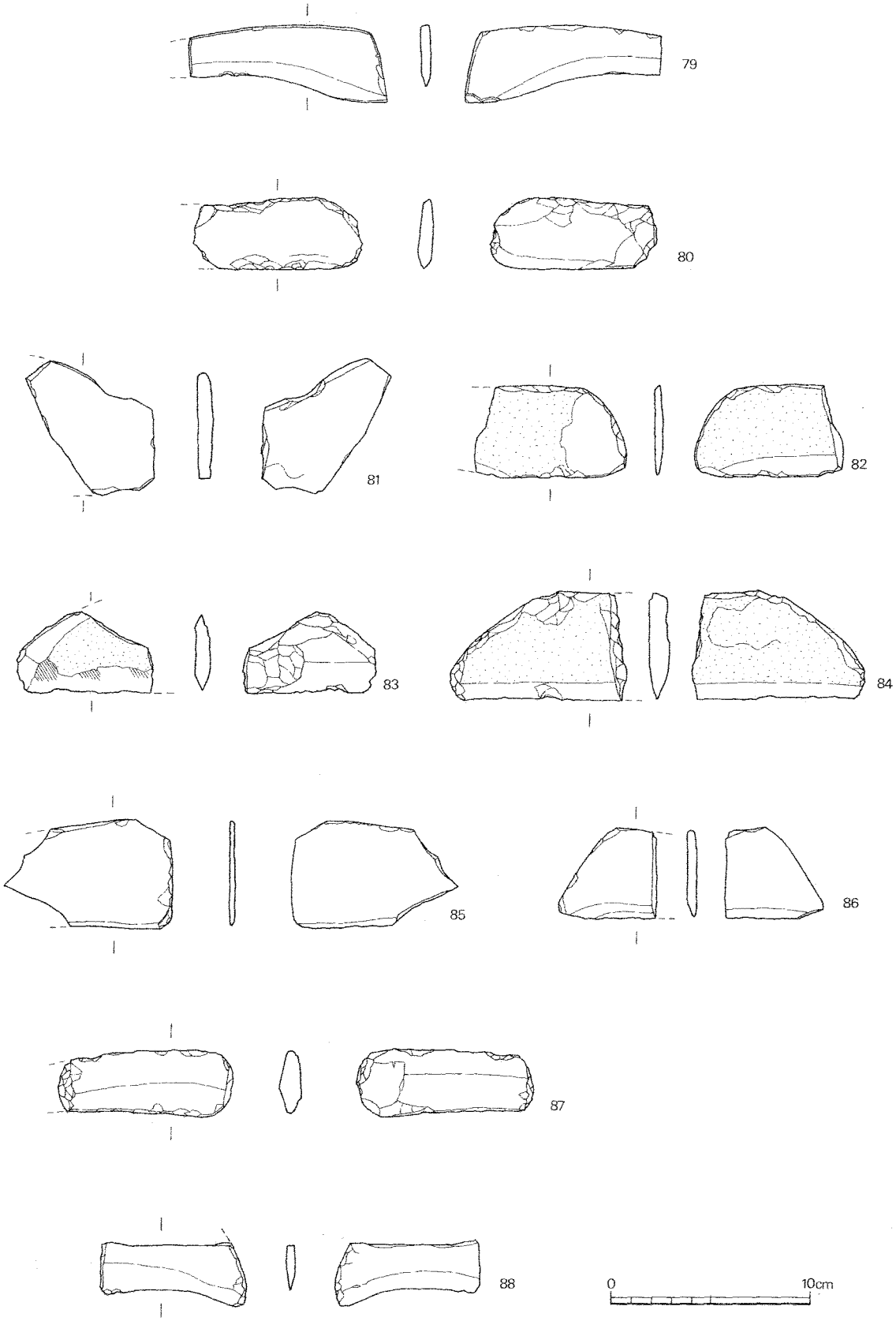
第60図　石器・石製品⑧（1／3）



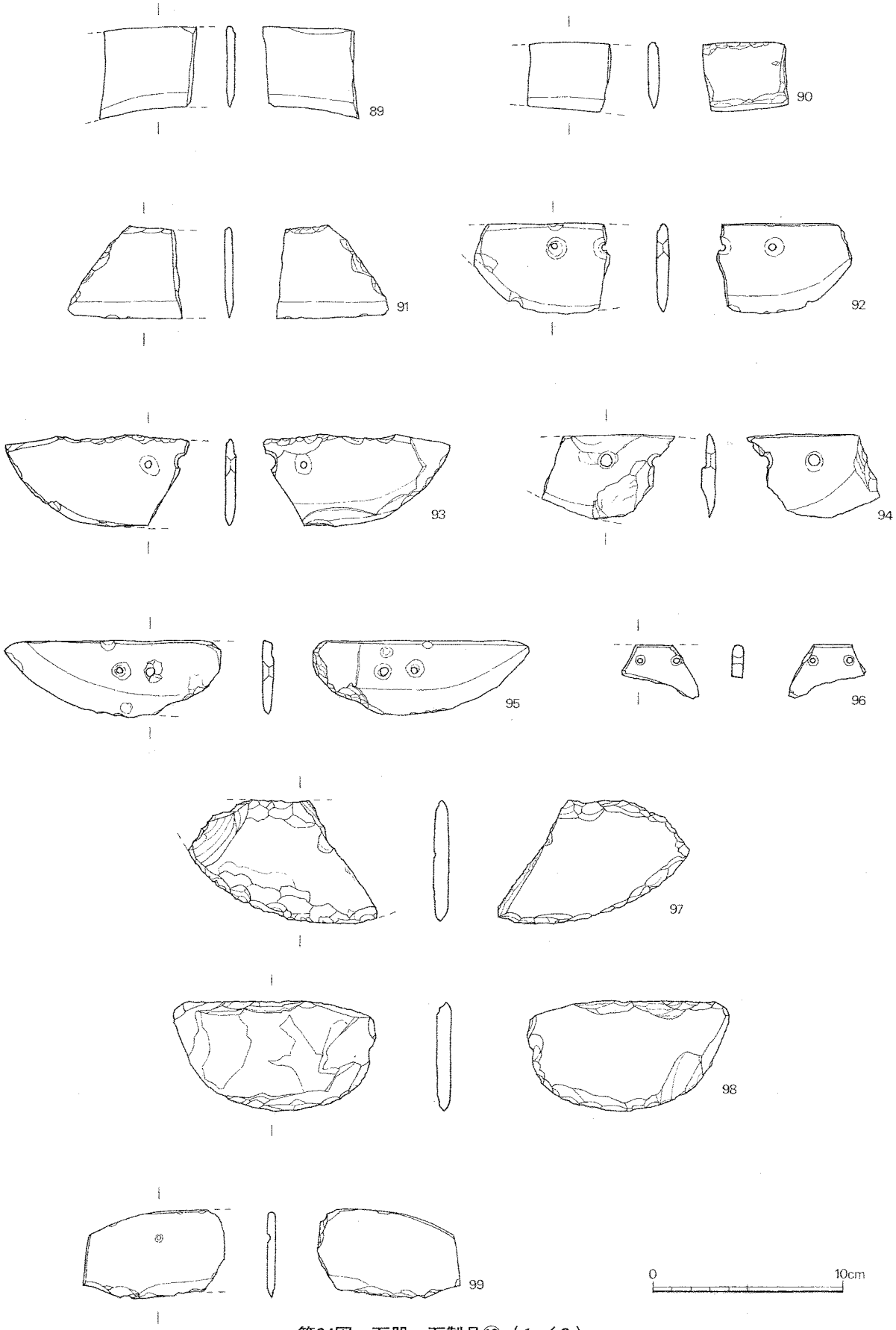
第61図　石器・石製品⑨（1／3）



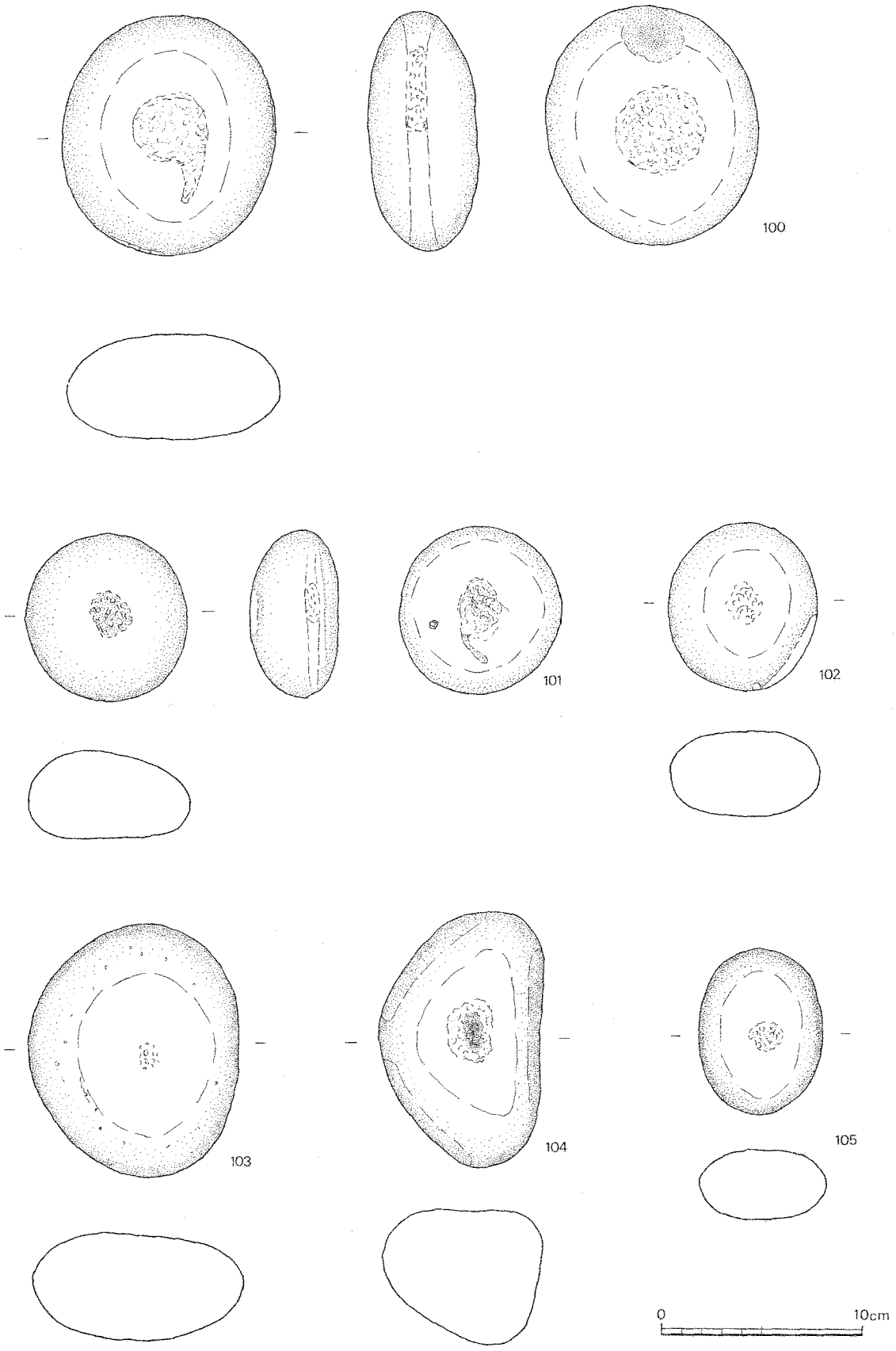
第62図　石器・石製品⑩（1／3）



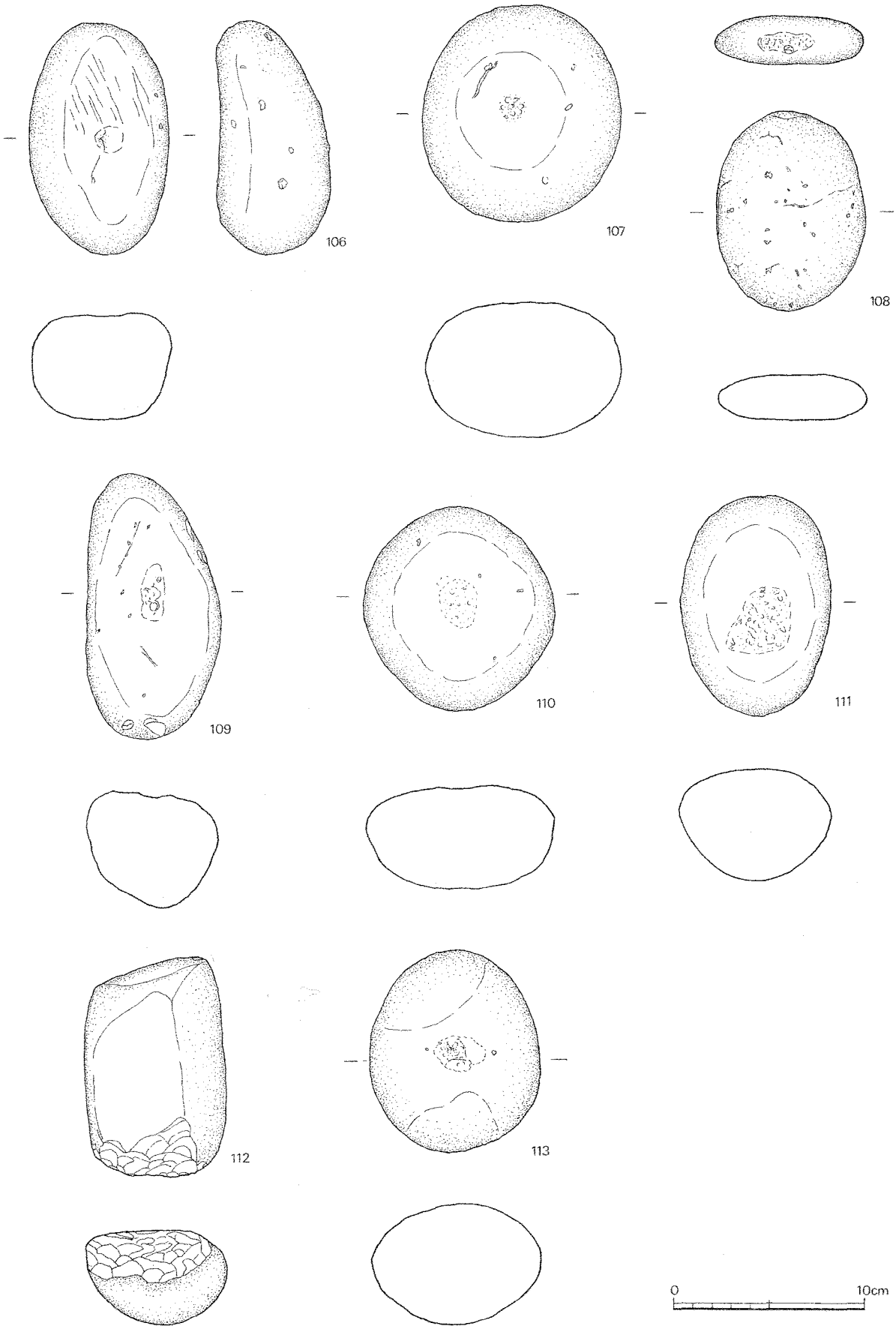
第63図　石器・石製品⑪（1／3）



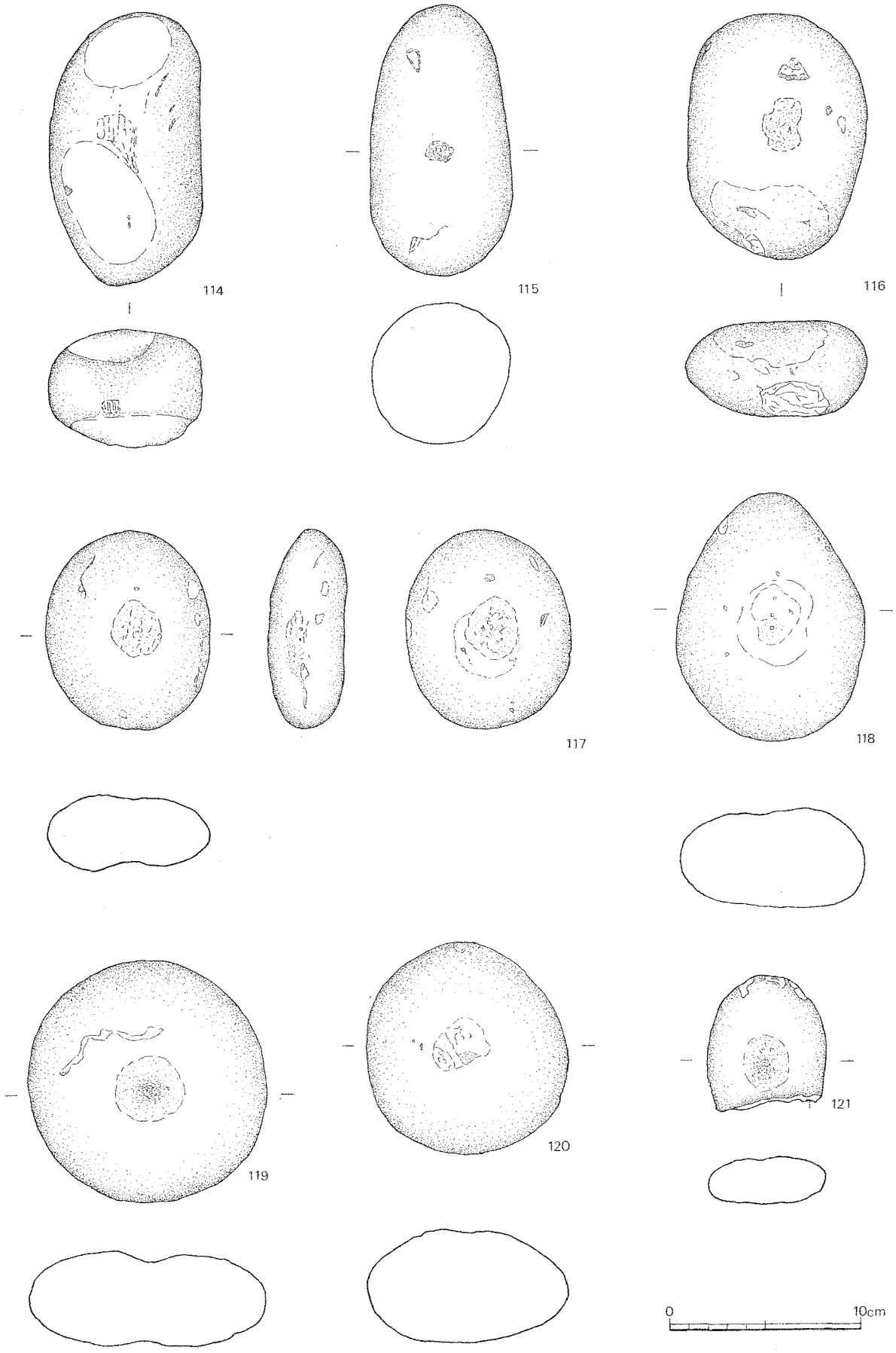
第64図　石器・石製品⑫（1／3）



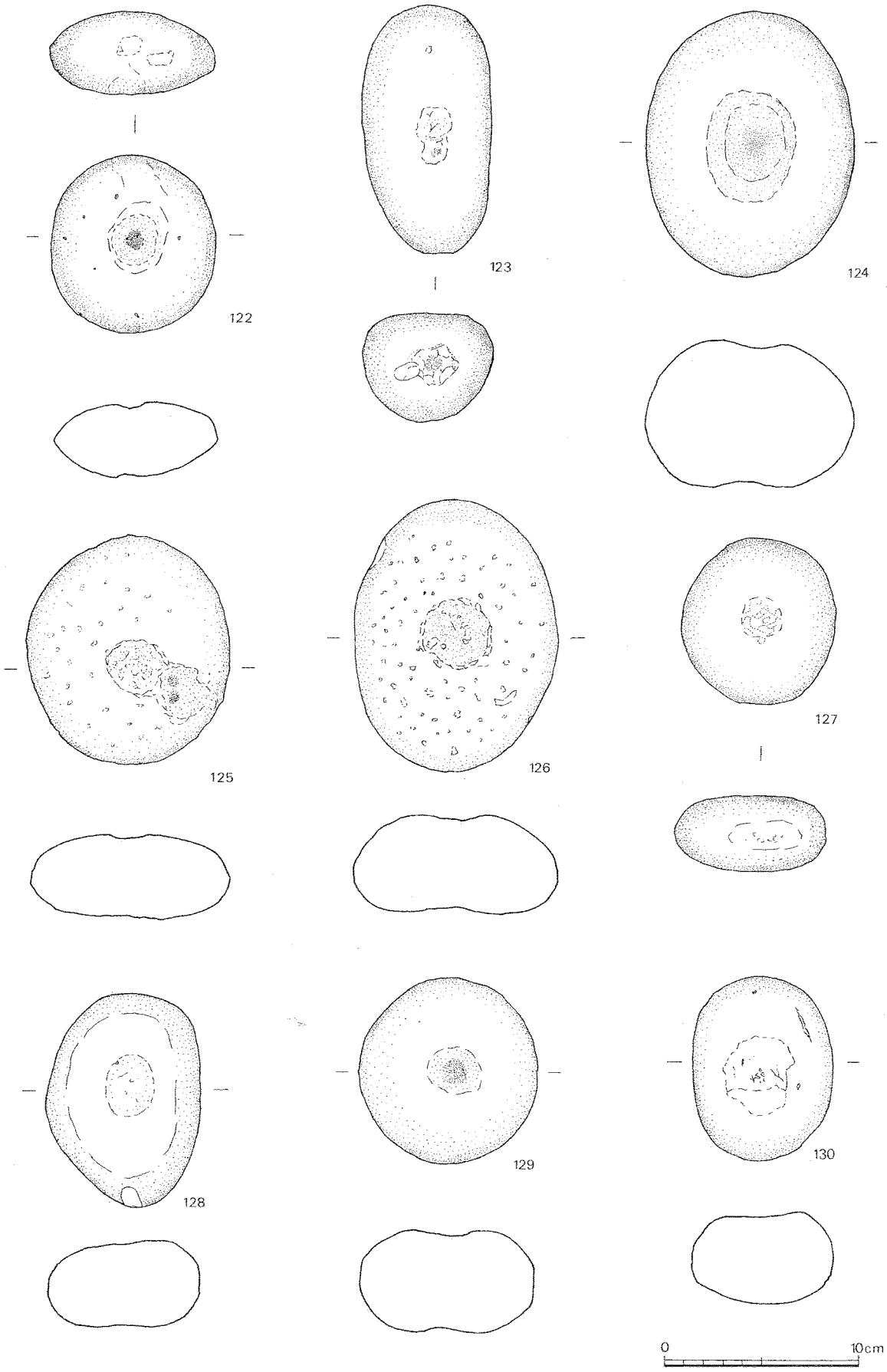
第65図　石器・石製品⑬（1／3）



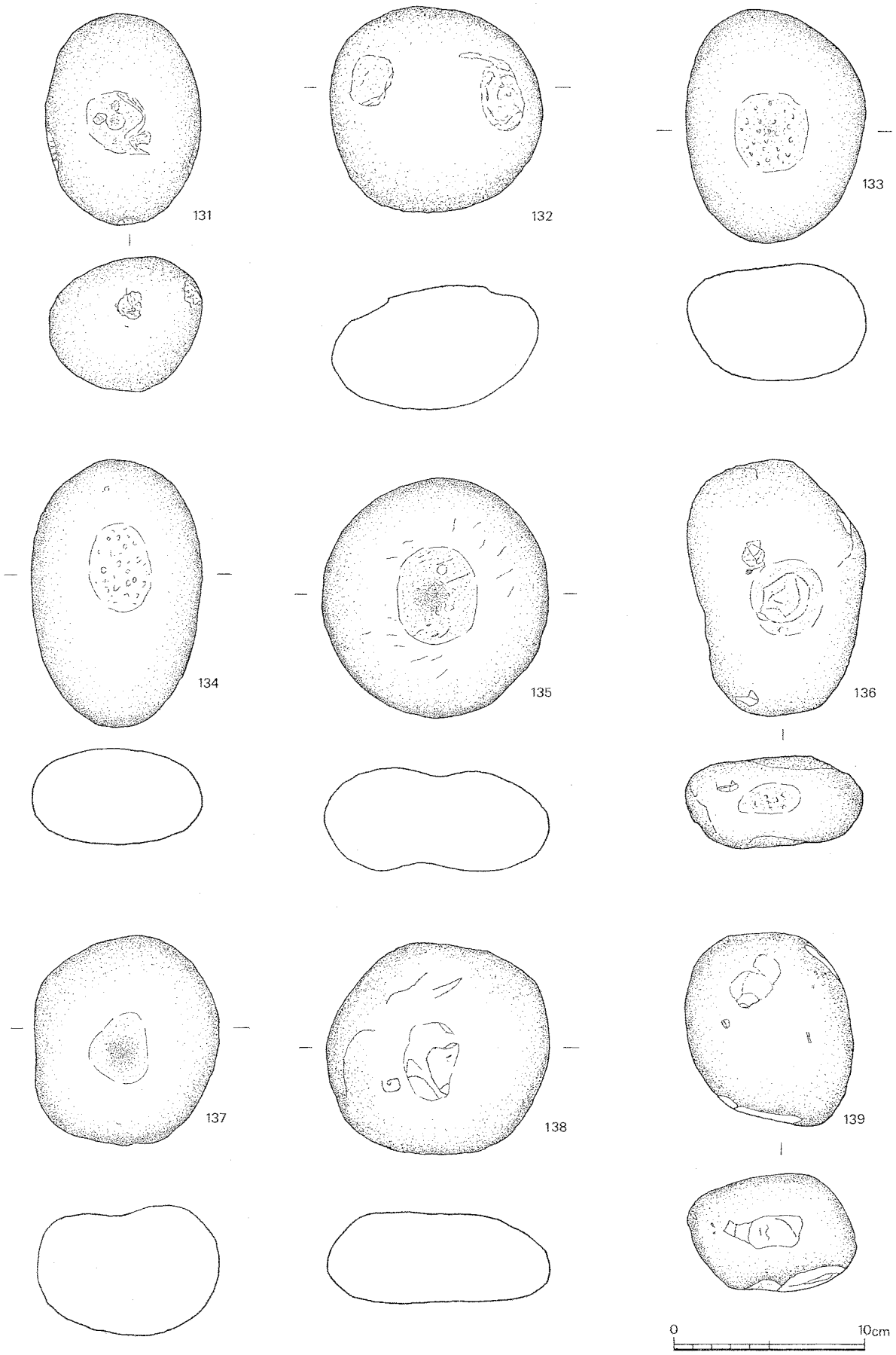
第66図　石器・石製品⑭（1／3）



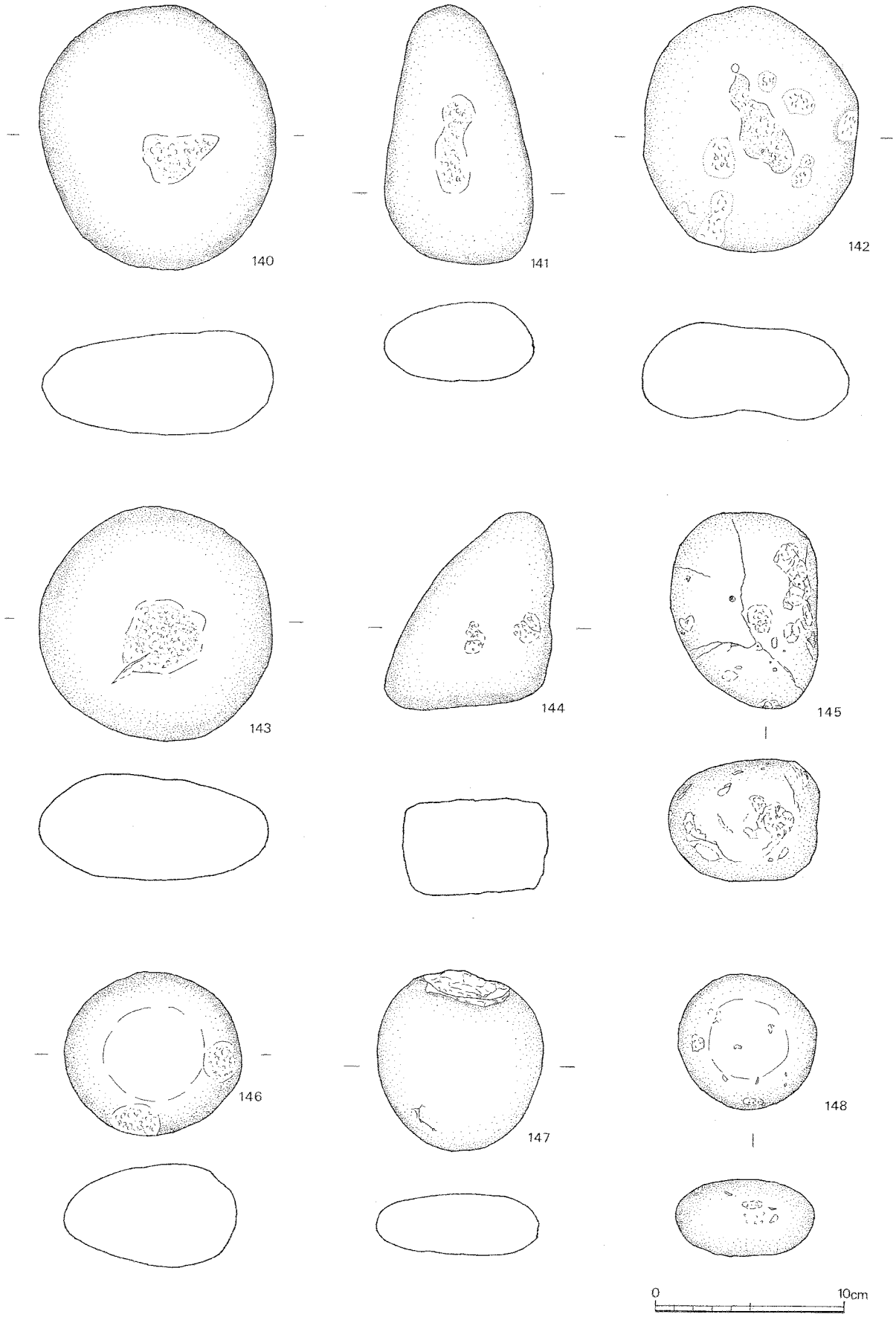
第67図　石器・石製品⑮（1／3）



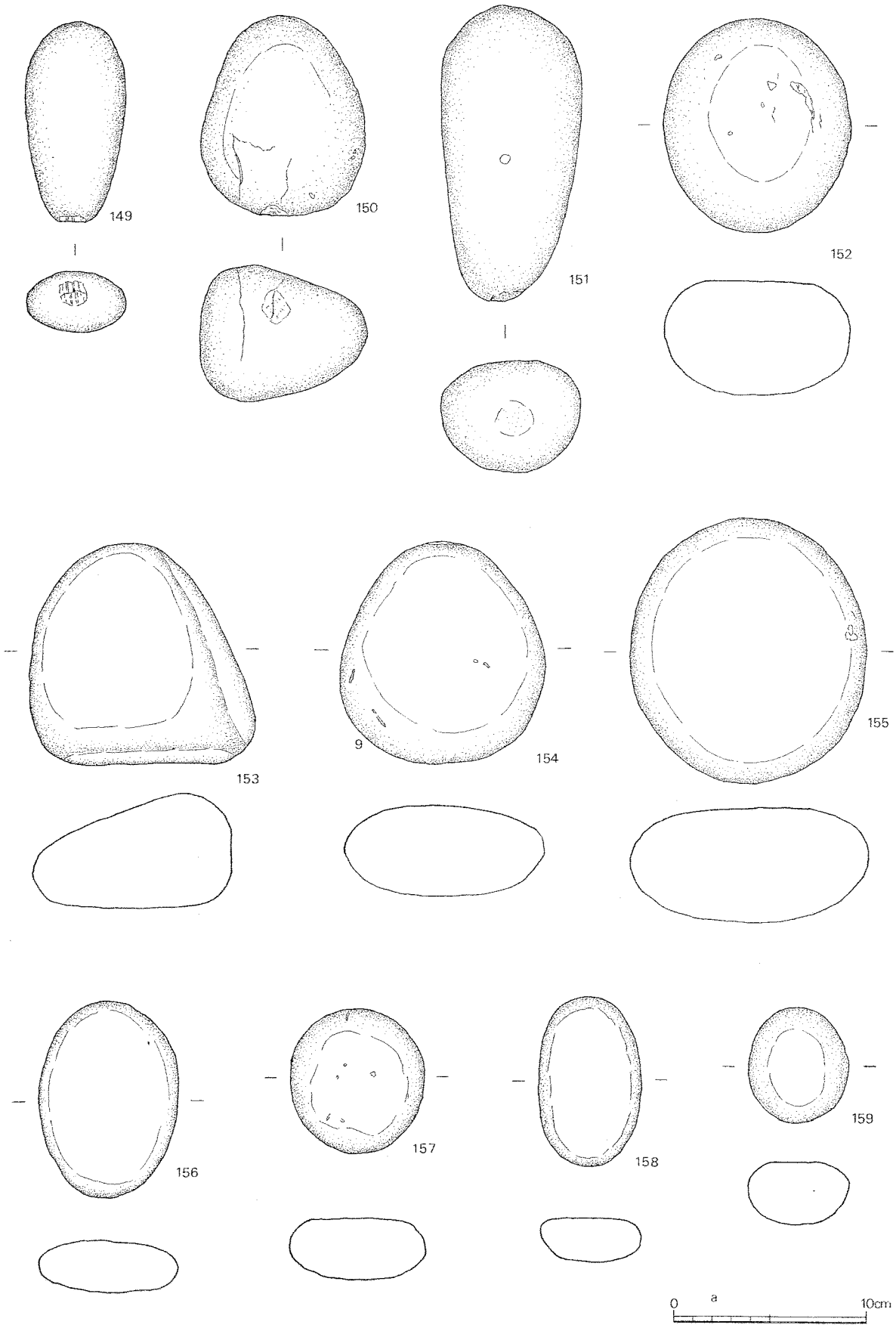
第68図　石器・石製品⑯（1／3）



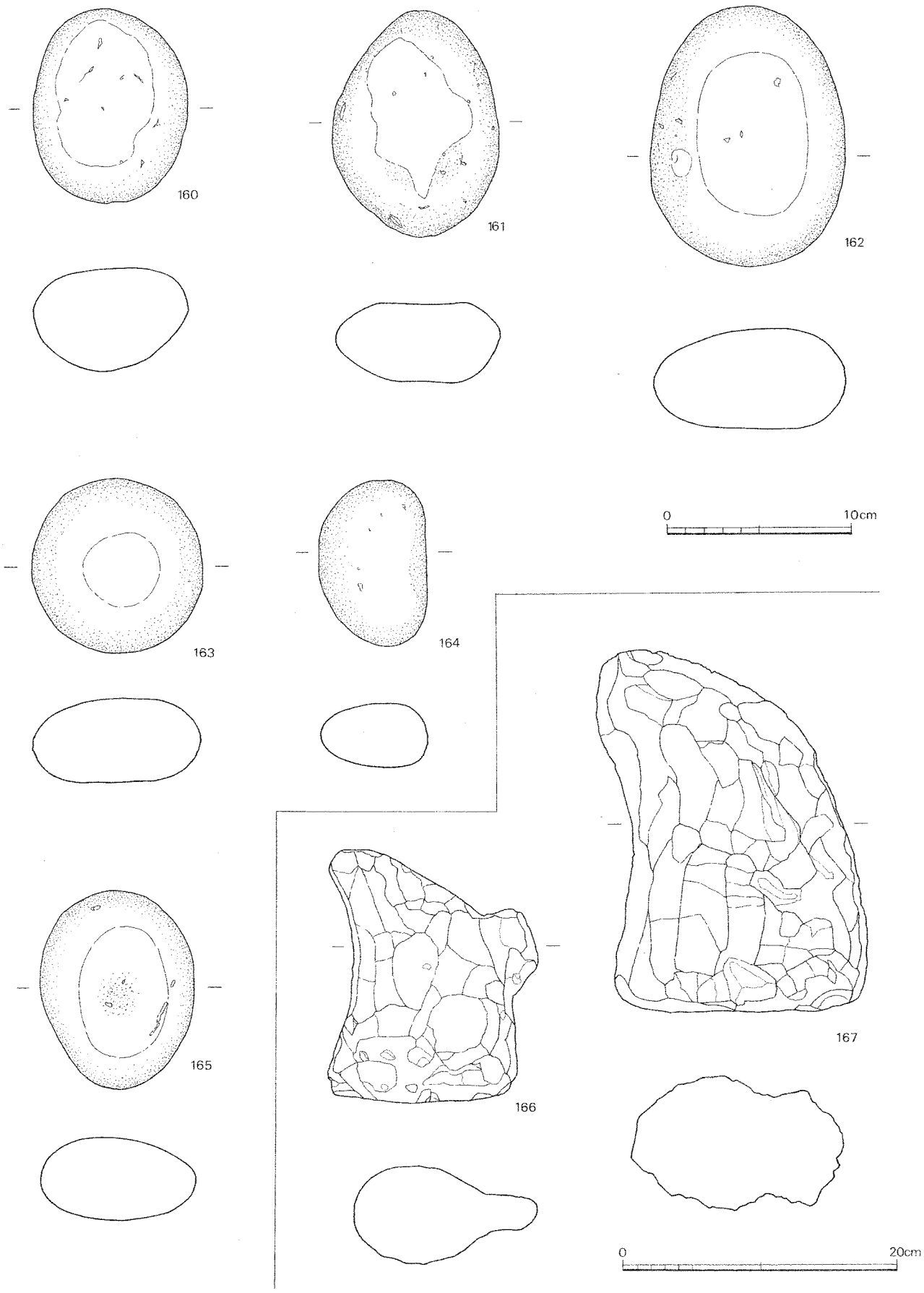
第69図　石器・石製品⑰（1／3）



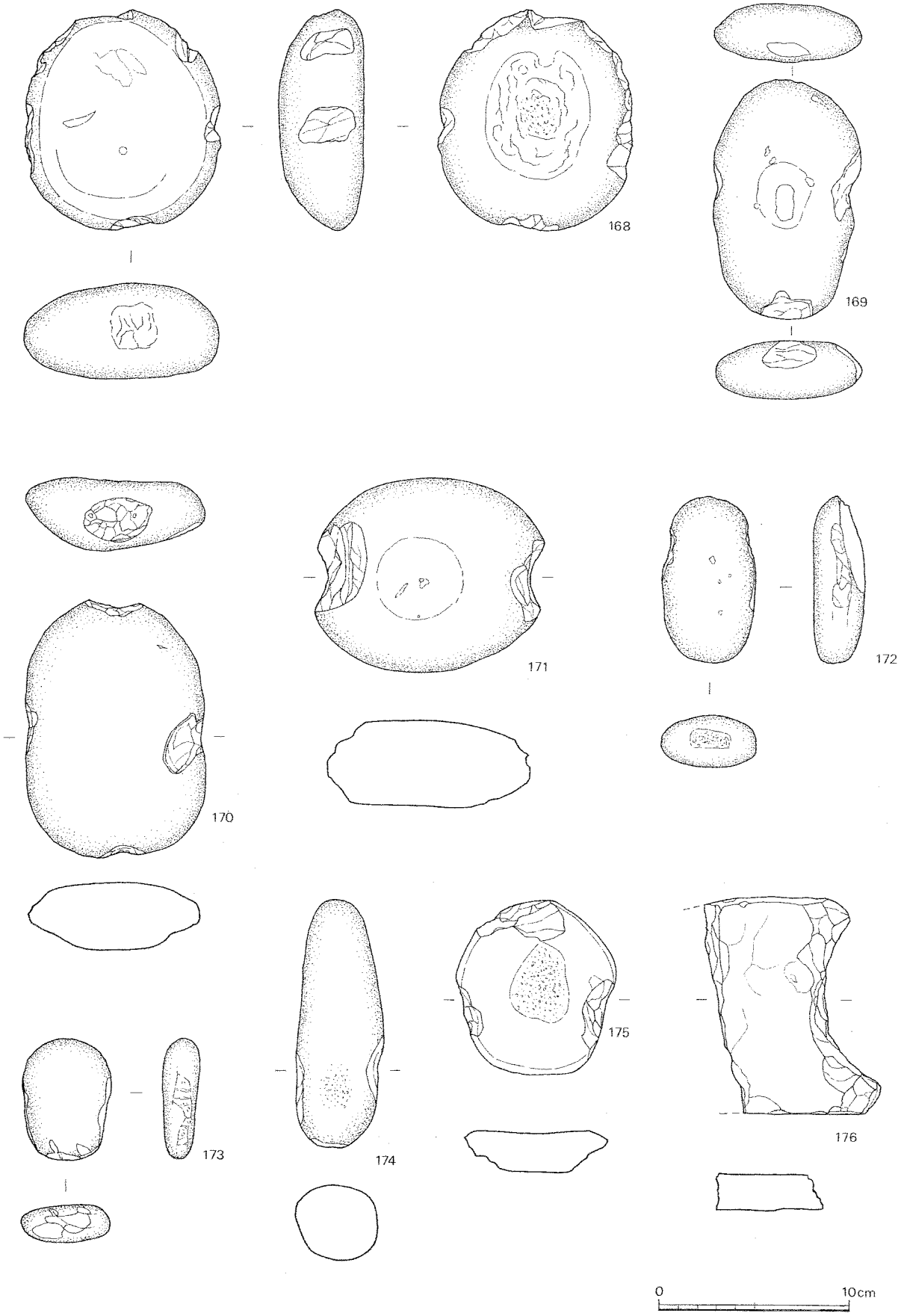
第70図　石器・石製品⑱（1／3）



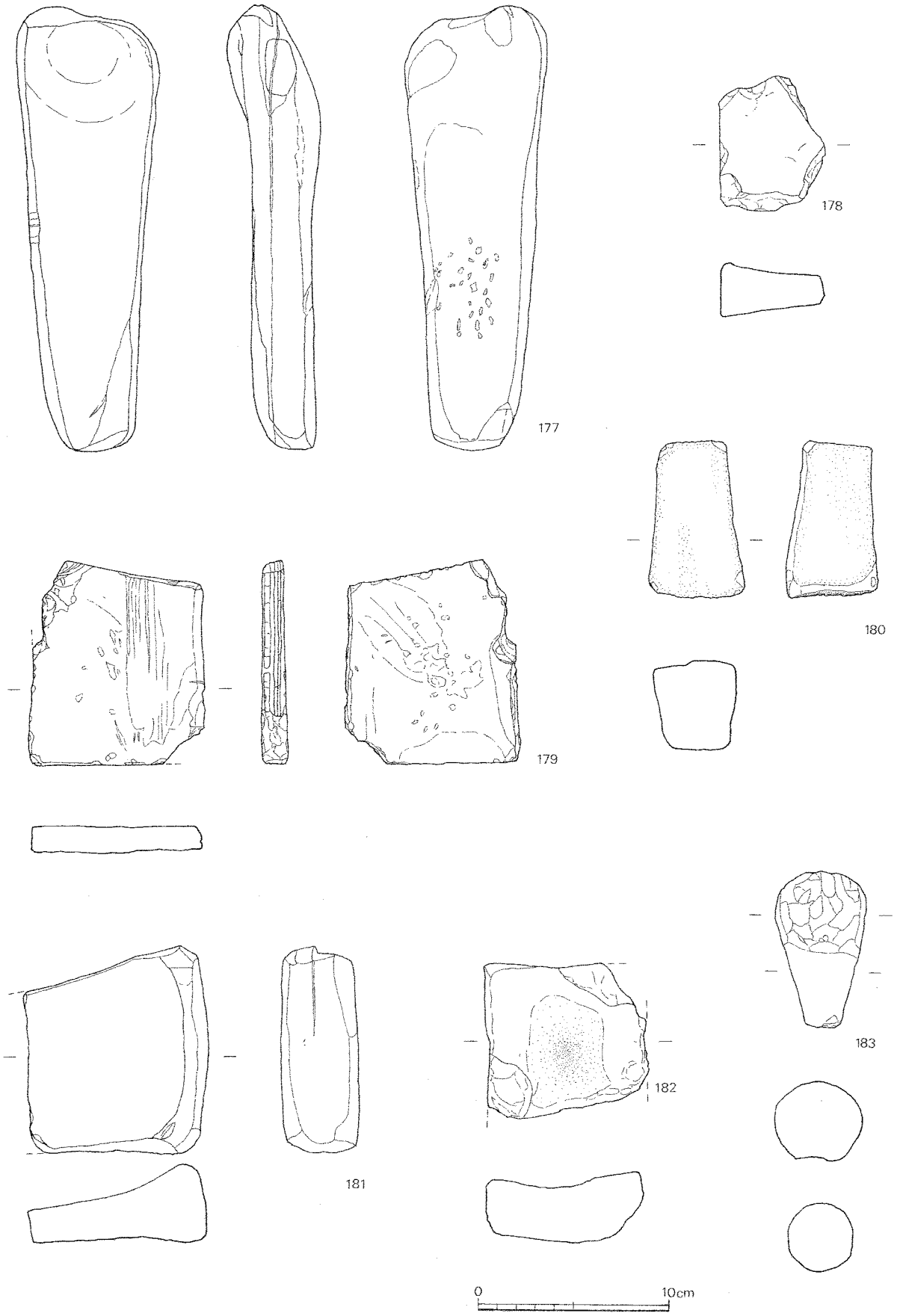
第71図　石器・石製品⑲（1／3）



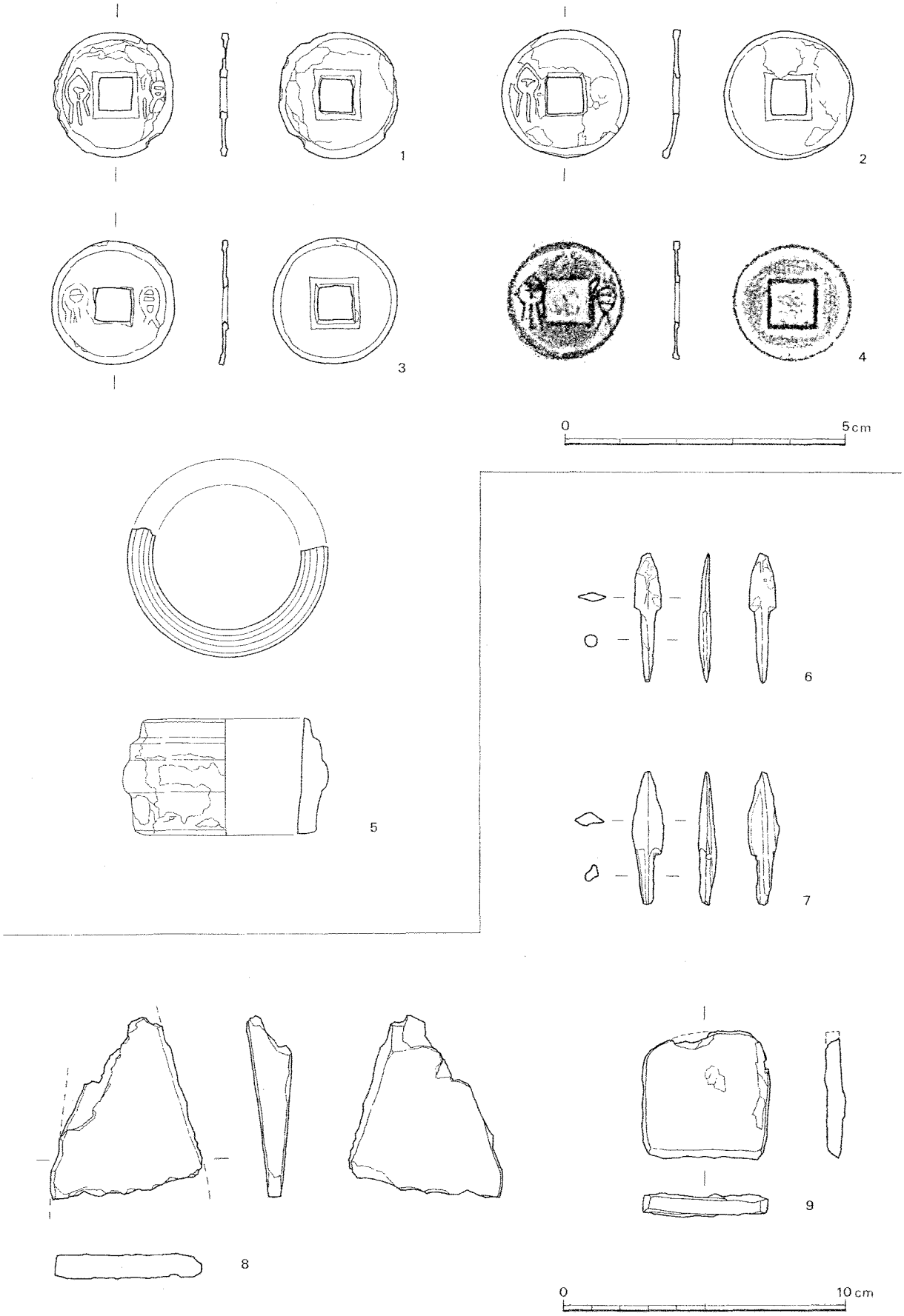
第72図　石器・石製品⑳（1／3，1／4）



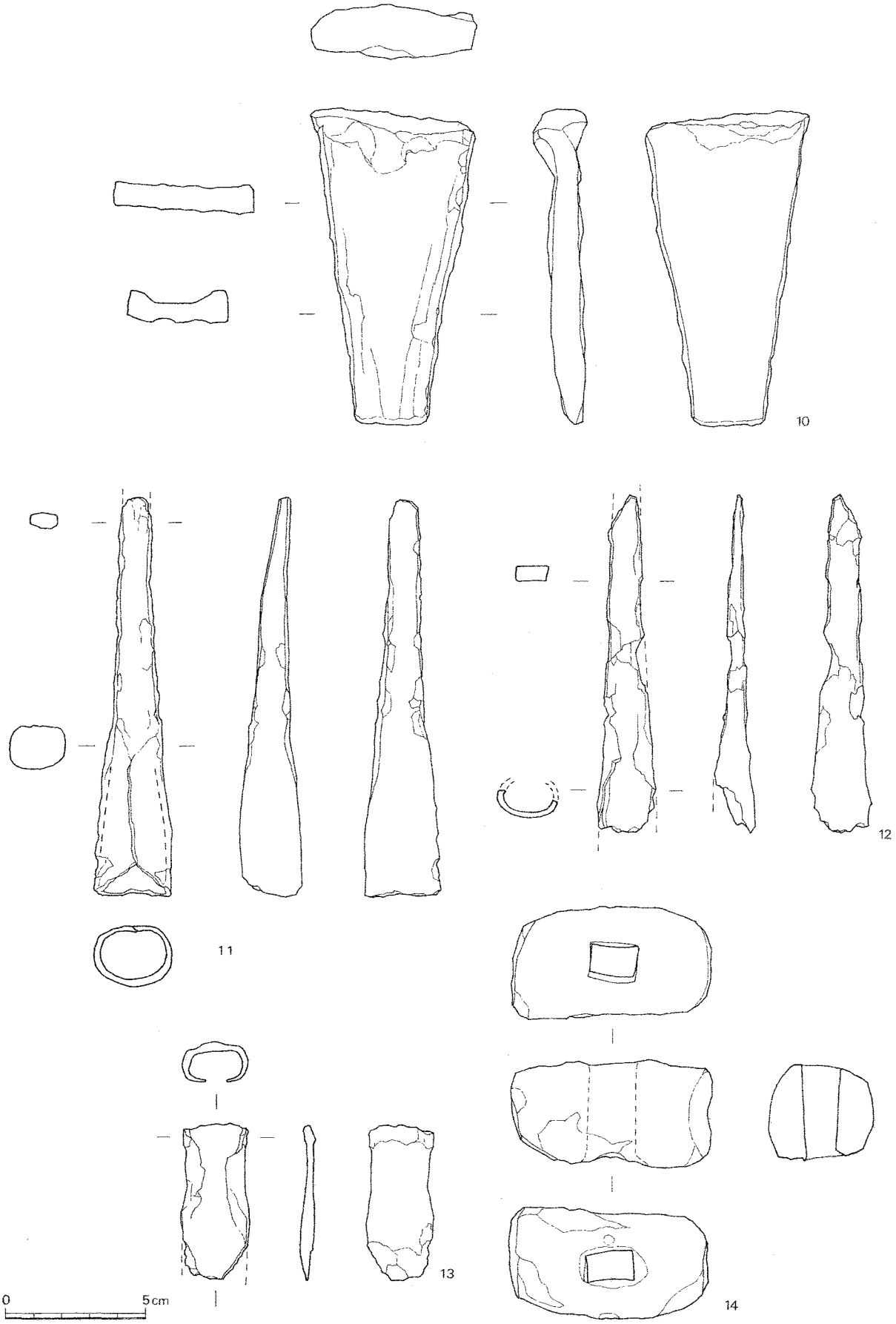
第73図　石器・石製品㉑（1／3）



第74図　石器・石製品㉒（1／3）

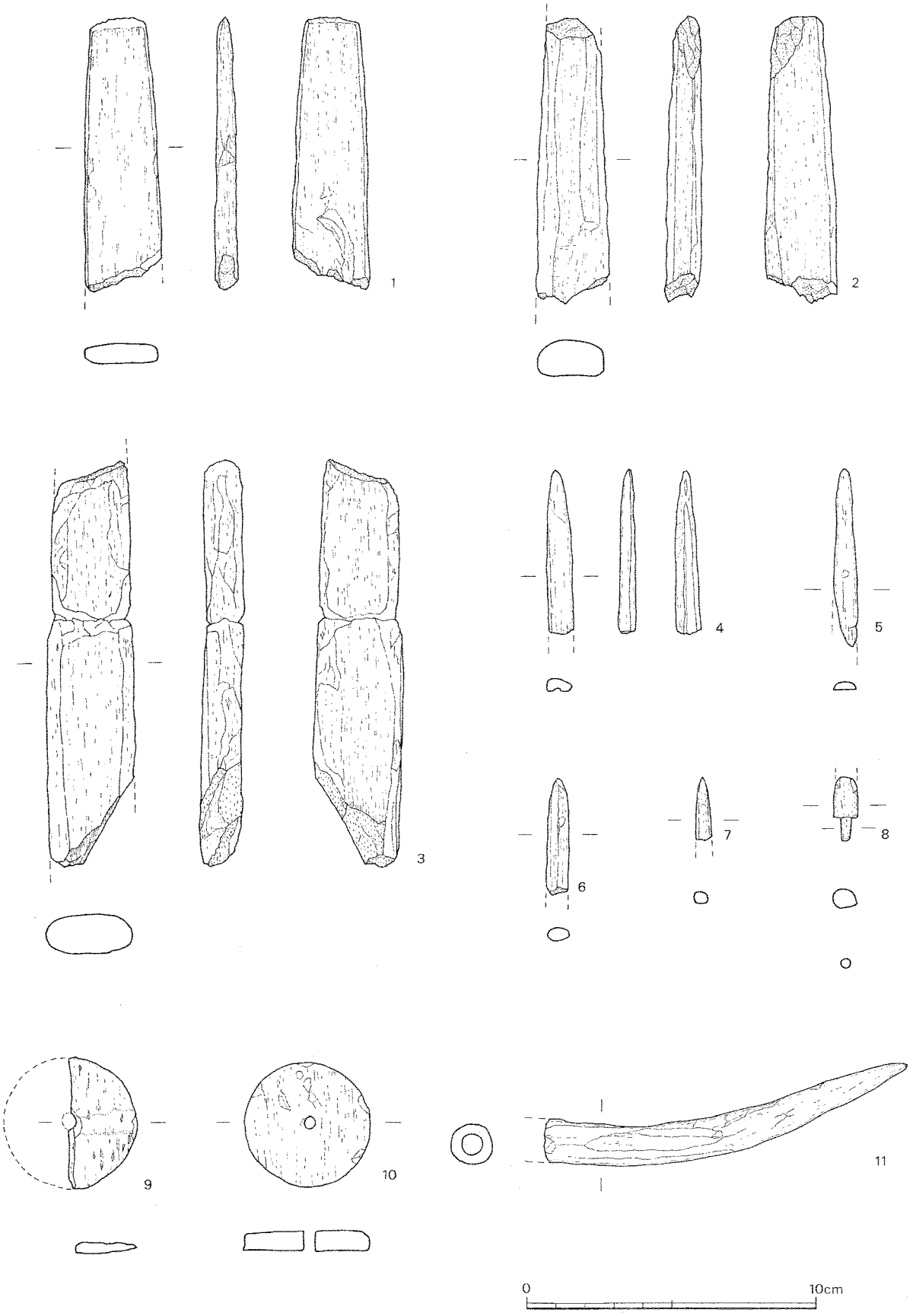


第75図　金属製品①（1／1，1／2）

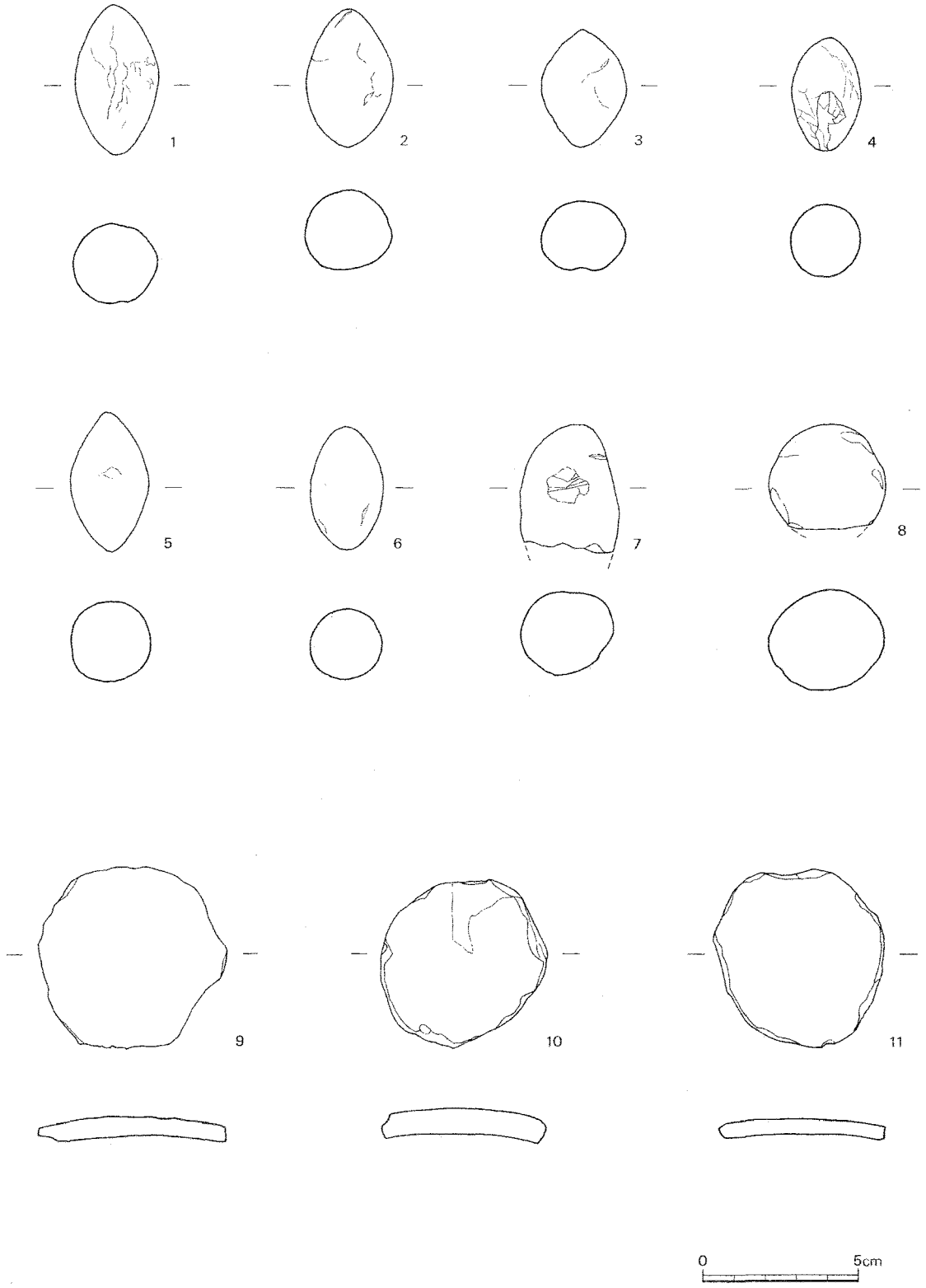


第76図　金属製品②（1／2）

第77図　金属製品③（1／2）



第78図　骨角製品（1／2）



第79図　土製品（1／2）

のものと考えられる。原の辻遺跡には弥生時代中期から後期に本品のみが伝えられ，宝器として使用されたものと考えられる。同時代の馬車具としては，山口県地蔵堂遺跡出土の金銅製蓋弓帽２点，対馬の唐崎遺跡，木坂遺跡，蒙古塚遺跡，サカドウ遺跡から青銅製蓋弓帽各１点が確認されているが，車軸頭の出土としては日本初例となる。

６と７は銅鏃である。ともに青銅製で，６は現存長4.57cm，最大幅0.95cm，最大厚0.40cm，重さ3.8ｇを測る。７は現存長4.77cm，最大幅1.13cm，最大厚0.52cm，重さ6.7ｇを測る。６は２号旧河道Ⅱ層，７はＥ区３層から出土した。また，７は鋳造の際に鋳型がずれていた痕跡がある。

８は袋状基部をもつ鋳造鉄斧である。刃部・基部ともに破損している。土器溜Ⅱ層から出土した。重さ41,2ｇを測る。今回の調査では，他に鋳造鉄斧は破片２が出土した。９と10は鋳造鉄斧の再加工品と考えられる。９は偏平片刃の鉄斧である。長さ4.48cm，幅4.54cm，重さ24.8ｇを測る。他に１例同様の遺物が出土している。10は基部が偏平になっており楔状をしているが，鉄鑿の類と思われる。長さ11.22cm，基部幅5.84cm，刃部幅2.49cm，重さ209.0ｇを測る。佐賀県吉野ヶ里遺跡で長さ約７cm程の類例が出土している。９・10ともに２号旧河道Ⅱ層から出土した。11と12は袋状基部をもつ鍛造鉄鑿である。11は現存長14.38cm，基部幅2.77cm，重さ101.5ｇを測る。12は現存長10.80cm，重さ21.1ｇを測る。11はＢ区Ⅳｂ層から，12は２号旧河道Ⅱ層から出土した。13は袋状基部をもつ鍛造鉄斧である。刃部を欠失しているが，現存長5.56cm，基部幅1.08cm，重さ15,9ｇを測る。基部端に段をつけている。２号旧河道Ⅱ層から出土した。

14は鉄鎚である。長さ7.00cm，厚さ3.71cm，穴部上面1.48cm×1.56cm，下面1.01cm×1.60cm，重さ231.0ｇを測る。２号旧河道Ⅱ層から出土した。楽浪系と考えられる。鉄鎚の出土例ではこれまで５世紀を上限としていたが，前述のように２号旧河道Ⅱ層は弥生時代後期から古墳時代前期の層であるので，これが日本最古のものとなる。

15は，板状鉄斧である。２号旧河道のⅡ層から出土した。Ⅱ層は弥生時代後期から古墳時代前期の層であるが，類例等から弥生時代後期のものと考えられる。長さ約28.5cm，幅約2.4cm～4.0cm，厚さ約0.3cm～1.6cm，重さ579.9ｇを測る。刃部をごく一部欠損している他はほぼ完形品である。板状鉄斧はこれまで日本各地で出土しており，長崎県内では小値賀町の神ノ崎遺跡などでの出土例が報告されている。形態的には幅広で三味線のバチ形をしてものと，細長い板状をしているものの２種類に大別できるが，今回の原の辻遺跡で出土したものは，後者のものである。細長い板状をしており，一方の先端部をつぶして刃部状にしている。もっとも朝鮮半島ではどちらの形状のものも数多く出土しており，日本で発見されたものは半島で作られたものが搬入されたと考えられる。名前の通りに木製の柄をつけ斧として使われたものもあるが，刃は形だけで研ぎ出さず柄をつけて使用した痕跡もないものも多く見つかっている。後者は，いわば鉄のインゴットであり，鉄器製作のための地金の役割をもっていたと推定される。中国の史書『三国志』魏書東夷伝や『後漢書』には，弁韓や辰韓で鉄がとれ，市や交易での取り引きの際に鉄が貨幣として使われていたことが記されている。この貨幣とされた鉄が後者の板状鉄斧と考えられる。鉄素材としての価値の裏付けによって代用貨幣となったものである。

今回の原の辻遺跡で出土したものはこの後者である。刃を研ぎ出した形跡も柄を付けていた痕跡もない。弥生時代後期に朝鮮半島との交易によって，原の辻遺跡に搬入されたものと思われる。また，14の鉄鎚と同じ２号旧河道のⅡ層から出土している。鉄器製作のための地金と鍛冶工具の同一層位からの出土は，弥生時代後期から古墳時代前期にかけて原の辻遺跡において鍛冶工房が存在していたことを裏づけるものであり，重要な発見であった。なお，鍛冶工房の場所については，出土地点が旧河道内であり，単にその付近とは言い難く，鉄滓等の出土確認を含め今後の調査の課題である。

(4) 木製品

１号～３号旧河道内と２号溝内から，各種建築部材や鍬などの農具，槽などの生活用品等大量の木製品が出土した。今回は時間的制約があり詳細な報告はできないが，次の機会に報告したい。

(5) 骨角器（第78図）

１～３は，鯨骨製アワビおこしである。１は先端部のみであり，土器溜Ⅰ層から出土した。２・３は前部，後部ともに欠失している。２は２号旧河道Ⅱ層から，３は２号旧河道上のＥ区３ｂ層から出土した。４～６は骨製ヤスである。４が２号旧河道Ⅱ層，５が土器溜Ⅲ層，６が２号旧河道Ⅲ層から出土した。７は骨鏃である。２号旧河道Ⅱ層から出土した。８は骨製の矢の根挟みである。２号旧河道Ⅱ層から出土した。９と10は骨製紡垂車である。ともに２号旧河道Ⅱ層から出土した。11は鹿角製の刀子の柄である。２号旧河道Ⅱ層から出土した。また，土器溜Ⅲ層から卜骨も出土した。

(6) 土製品（第79図）

１～７は紡垂形の土製投弾である。１が土器溜Ⅱｃ層，２がＢ区２層，３がＤ区２号濠１層，４がＥ区１号濠２層，５・６が土器溜Ⅱａ層，７がＢ区３層から出土した。重さは１が27.4ｇ，２が20.0ｇ，３が20.0ｇ，４が15.0ｇ，５が20.7ｇ，６が15.0ｇ，７が31.6ｇである。９～11は，土器片の周囲を丸く面取りした円盤状土製品である。９が２号旧河道内，10が２号旧河道Ⅱ層，11が土器溜Ⅰ層から出土した。重さが９が29.6ｇ，10が32.3ｇ，11が21.3ｇである。

(7) 装飾品

藍色のガラス小玉が２つ出土した。１つは径3.65㎜の完形品で，土器溜から出土した。もう１つは半欠失したもので現存最大径3.70㎜を測る。２号旧河道内から出土した。

参考文献

１．橋口達也「甕棺の編年的研究」
（『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告ＸＸＸＩ中巻』　福岡県教育委員会　1979）
２．柳田康雄「九州」（『古墳時代の研究』６　雄山閣　1991）
３．東潮『古代東アジアの鉄と倭』（溪水社　1999）

4．まとめ（第80図）

最後に平成11年度環濠等状況調査の成果について簡単にまとめてみたい。遺構では，旧河道３条，濠４条，溝３条，土壙７基，土器溜１，掘立柱建物跡１，足跡状遺構等を確認した。以下，検出した遺構の内容をもとに，今回の調査地区の状況の時期的変遷を考察する。

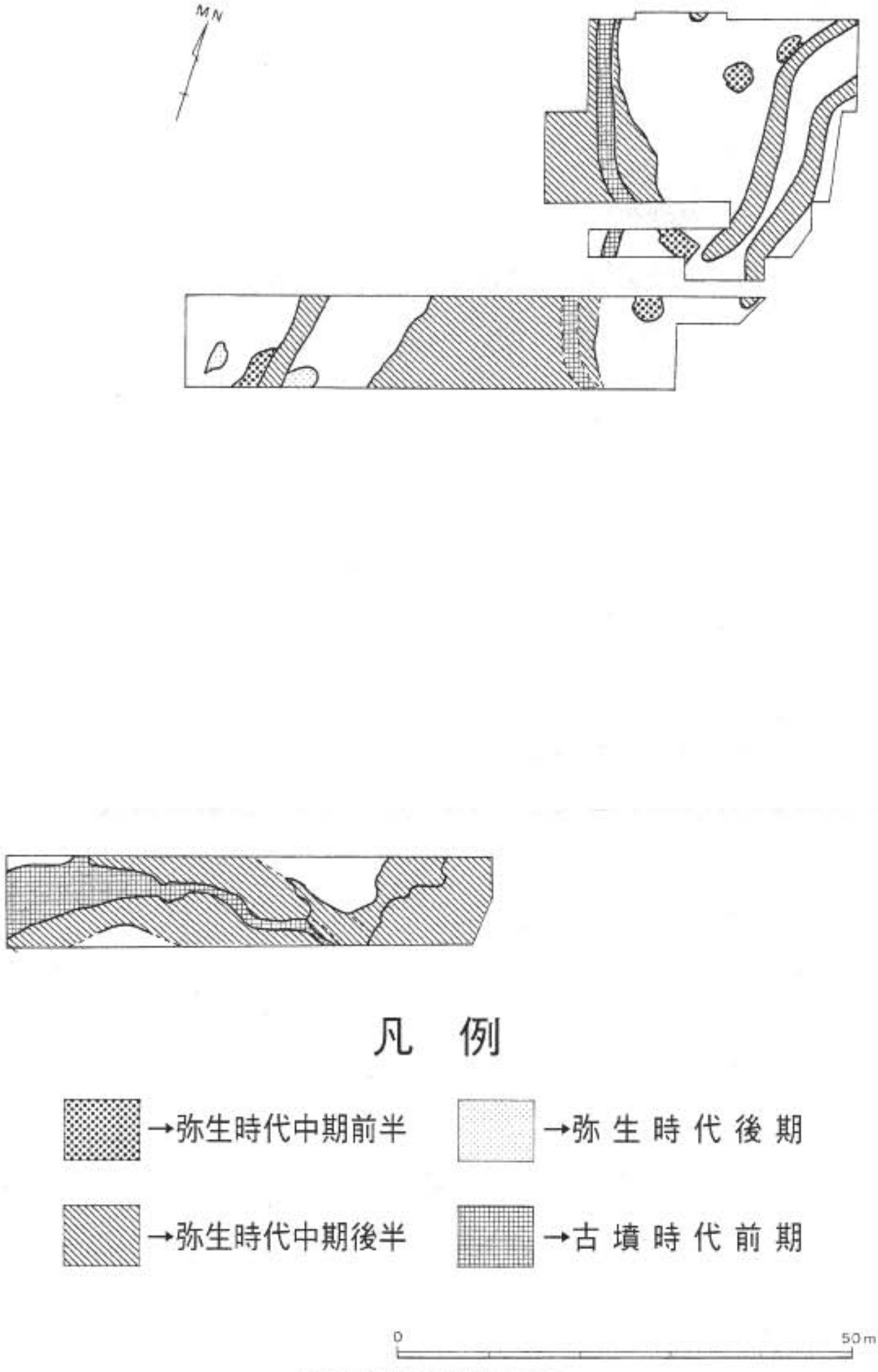
弥生時代中期前半に掘られた１号濠，２号濠は環濠であると考えられる。原の辻遺跡では，弥生時代前期末に居住が始まったことが過去の調査で明らかになっているが，この弥生時代中期前半，須玖Ⅰ式土器古段階の時期に多重環濠が成立し，遺跡の中央に位置する台地を中心に，本格的な拠点集落として整備されたことが明らかになったことは，重要な発見であった。

弥生時代中期後半には多重環濠の外濠にあたる３号濠が加わり，さらに一支国の王都としての景観がこの時期に備わったが，これら多重環濠は旧河道の手前で止まることも今回の調査で明らかになった。環濠は途切れることなく完結することが防御的に考えると望ましいが，おそらくその防御的補完は，１号旧河道や２号旧河道など台地西縁に沿って流れる旧河道が天然の要害として担っていたと考えられる。旧河道より南から環濠がまた始まるかどうかは，今後の調査の課題である。また，３号濠と１号旧河道の間の防御的空白地には１号建物跡があり，これを埋めるような状況を呈している。１号建物跡はやぐらのような建物で，建物と濠，旧河道間は柵列があったと考えられる。

土器溜は弥生時代中期中葉を上限とするが，中期後半から後期を主体とする。貨泉４枚（内１枚は２号旧河道に混入）や楽浪系馬車具，卜骨，数多くの丹塗り土器などを出土したこの遺構は，附属する微高地に何らかの祭儀施設があったことを意味している。遺跡内低地における祭儀施設はこれまで確認されていないが，いかなる施設であったのか今後の調査結果が期待される。

弥生時代後期になると，自然埋没していっていた１号濠，２号濠は，再び掘り直される。昨年度の船着き場付近水路等状況調査で，弥生時代後期に１号旧河道西側微高地における居住域は放棄され，換わって５条におよぶ濠群が形成されたことを確認した。「倭国大乱」前中の軍事的緊張状況の現れと考えられたが，環濠の掘り直しもまた，その現れと考えられる。また旧河道のうち，１号旧河道と３号旧河道は弥生時代後期から古墳時代前期にかけて，埋め立てられて水田が造営されたと考えられる。「魏志倭人伝」に記される「差有田地耕田猶不足食」の状況，人口の増加に伴う食料不足の解消を目的としたものであろう。２号旧河道の弥生時代後期から古墳時代前期にかけての層からは，多くの鉄製品が出土したが，特に板状鉄斧と鉄鎚の出土は，この時期に原の辻遺跡において鍛冶工房が存在していたことを裏付けるものであった。工房の場所の特定については，今後の調査の課題である。

今回の調査においても，倭人の大陸や朝鮮半島との交流拠点としての一支国王都，原の辻遺跡の重要性を証明する多くの遺物が出土した。朝鮮系無文土器は出土数が減少傾向にあるが，これは調査地区がこの土器をもたらした朝鮮半島渡来の人々の集住域と考えられる，遺跡北西端の幡鉾川本流に囲まれた微高地から遠ざかっていることを反映しているものであろう。原の辻遺跡調査研究事業特定調査は，来年度も台地西部下の低地をさらに南下し，環濠や旧河道の状況を追跡調査する予定である。

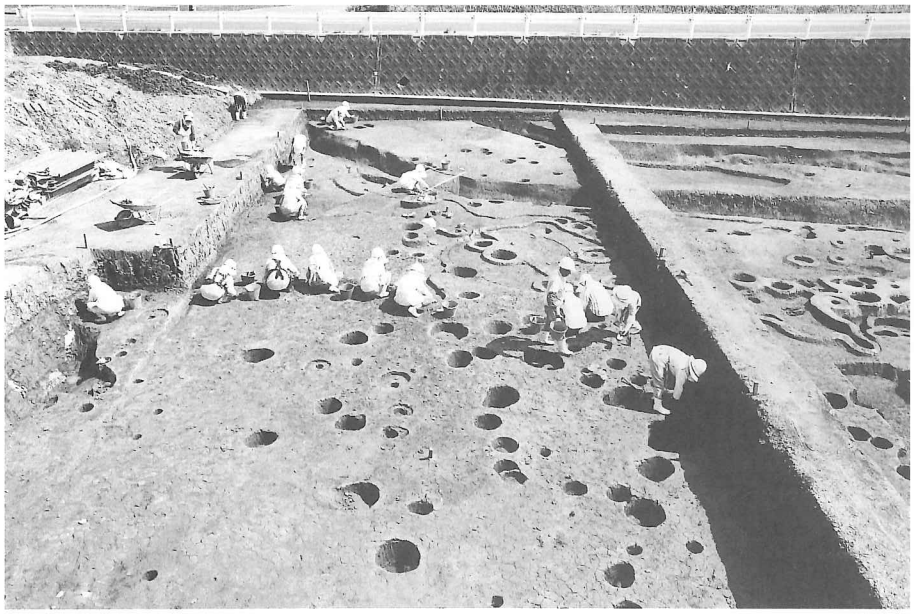


第80図　時期別遺構配置図（1／500）

図　　版

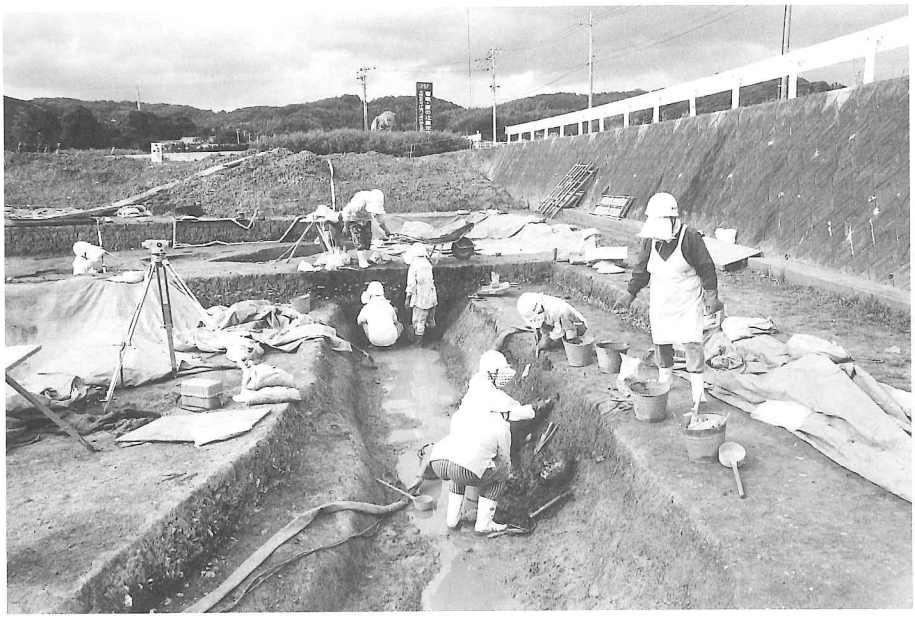
調査風景

調査風景



調査風景

図版 2

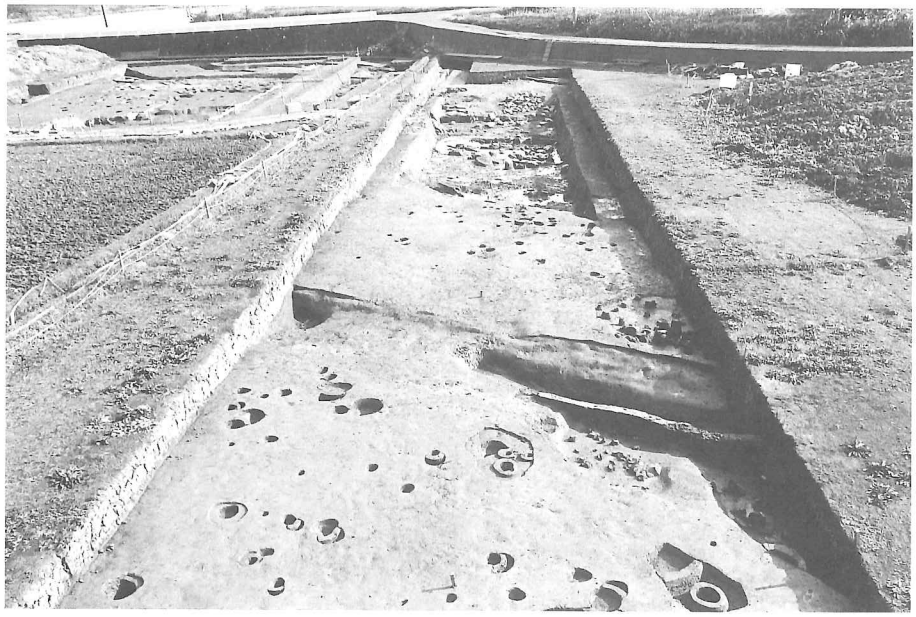


調査風景

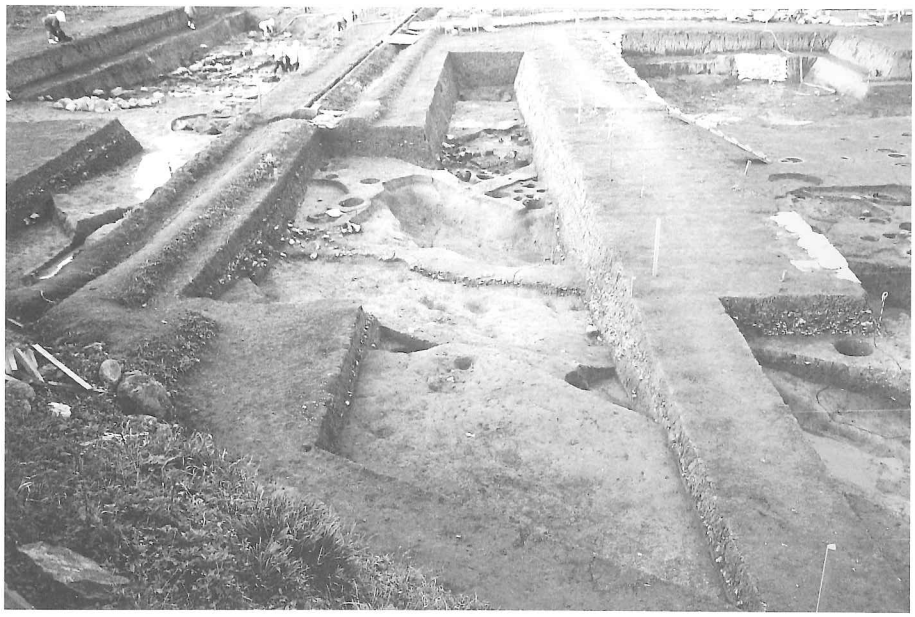
調査風景

調査風景

A区全景（西から）



B区全景（西から）



D区全景（東から）

図版 4

E 区全景（東から）

E 区全景（西から）

A 区 1 号旧河道
検出状況（北から）

A区１号旧河道
遺物出土状況

B区１号旧河道全景
（東から）

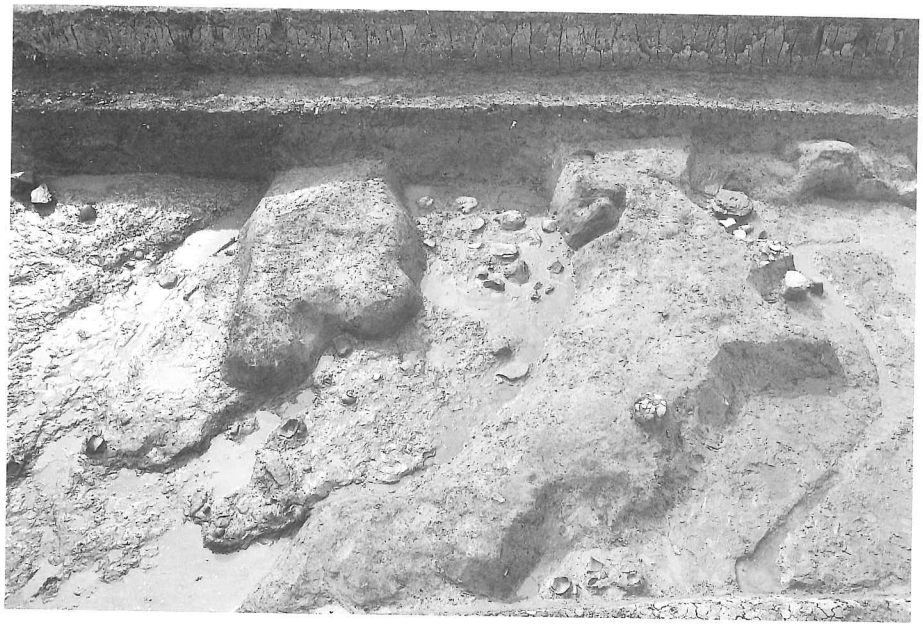
B区１号旧河道北壁
横断土層

図版 6

B区１号旧河道南壁
横断土層

B区１号旧河道南壁
横断土層

B区１号旧河道東岸
検出状況（西から）



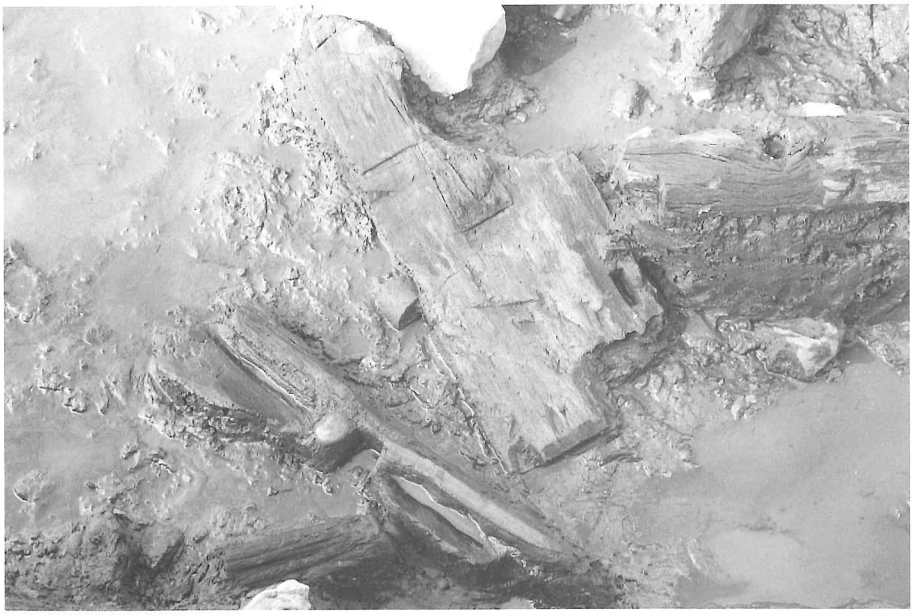
B区1号旧河道内
検出状況

B区1号旧河道内
検出遺構

B区1号旧河道
遺物出土状況

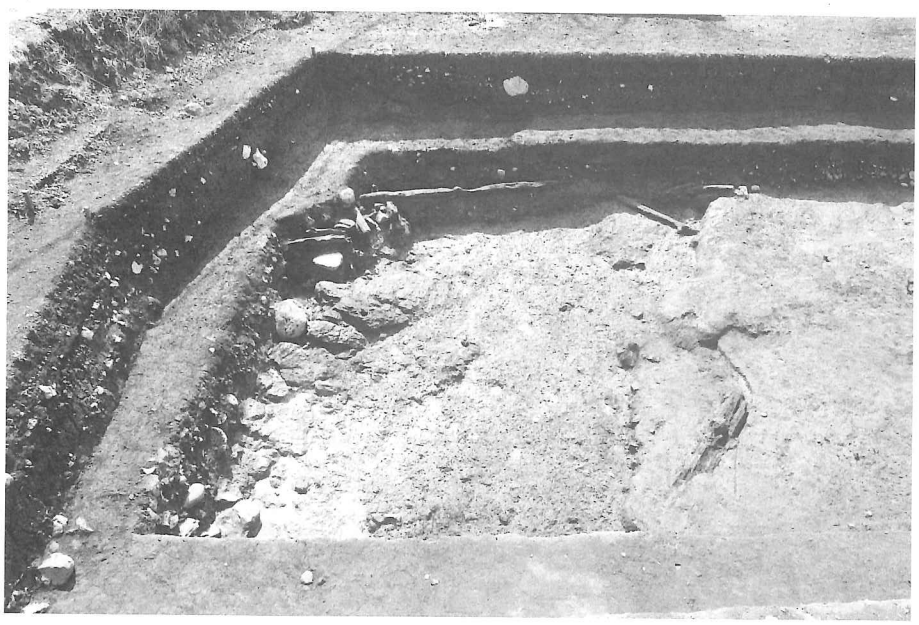
図版 8

B区1号旧河道
遺物出土状況



B区1号旧河道
遺物出土状況

B区1号旧河道
遺物出土状況



2 号旧河道
検出状況（北から）

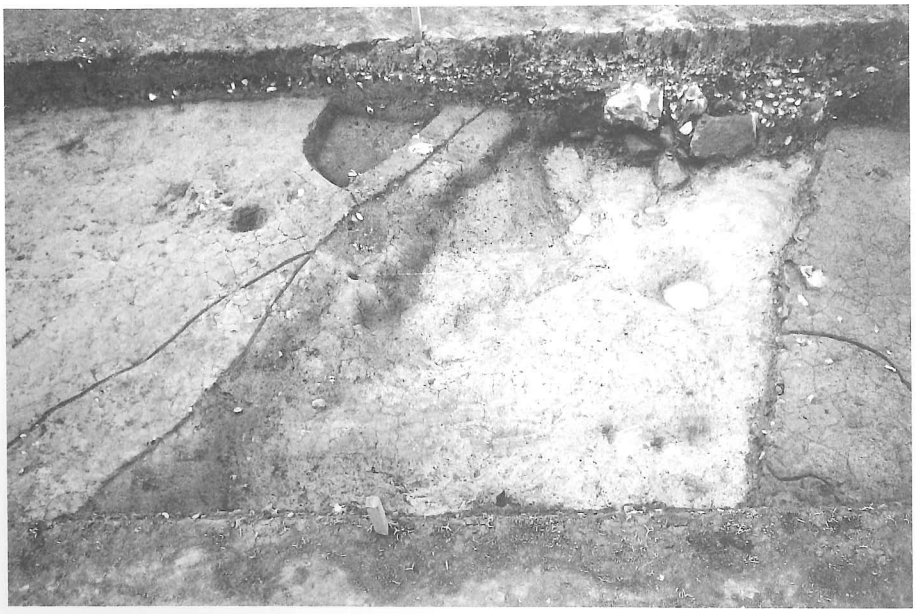
2 号旧河道
遺物出土状況

1 号濠・2 号濠
検出状況（南から）

図版10

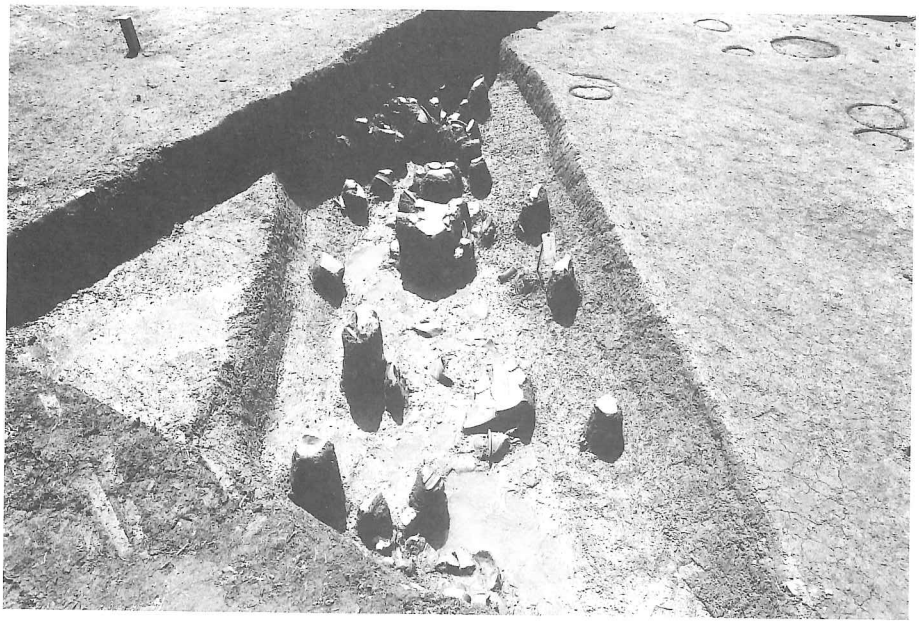
1号濠・2号濠
検出状況（北東から）

A区1号濠
検出状況



D区1号濠
検出状況

C区１号濠
横断土層



A区１号濠
遺物出土状況

C区１号濠
遺物出土状況

図版12

C号１号濠
遺物出土状況

C区１号濠
遺物出土状況

D区１号濠
遺物出土状況

A区２号濠
検出状況（北から）

D区２号濠
検出状況（北から）

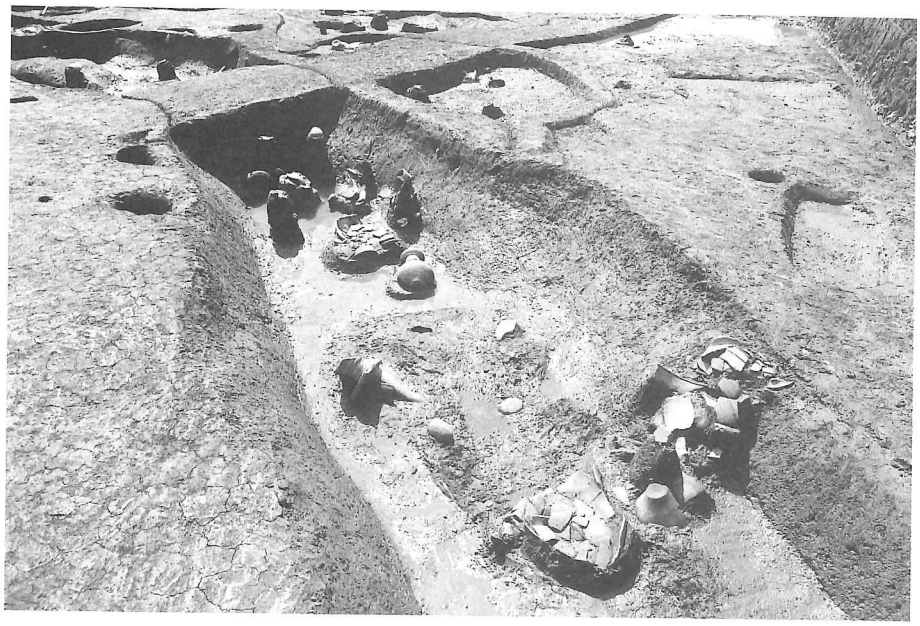
D区２号濠
検出状況（南から）

図版14

A区２号濠
横断土層

D区２号濠
横断土層

A区２号濠
遺物出土状況

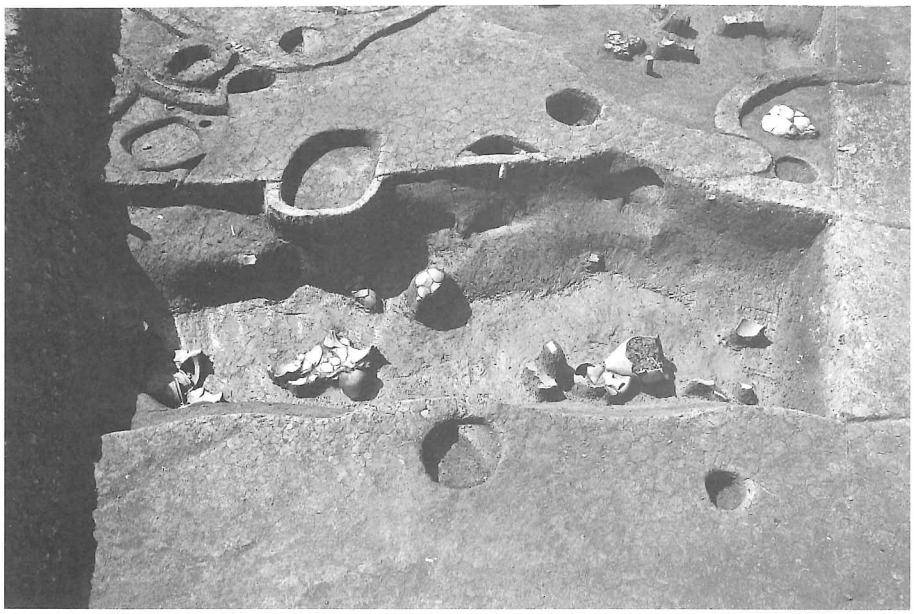


A区２号濠
遺物出土状況

A区２号濠
遺物出土状況

A区２号濠
遺物出土状況

図版16



A区２号濠
遺物出土状況

A区２号濠
遺物出土状況

A区２号濠
遺物出土状況

D区２号濠
遺物出土状況

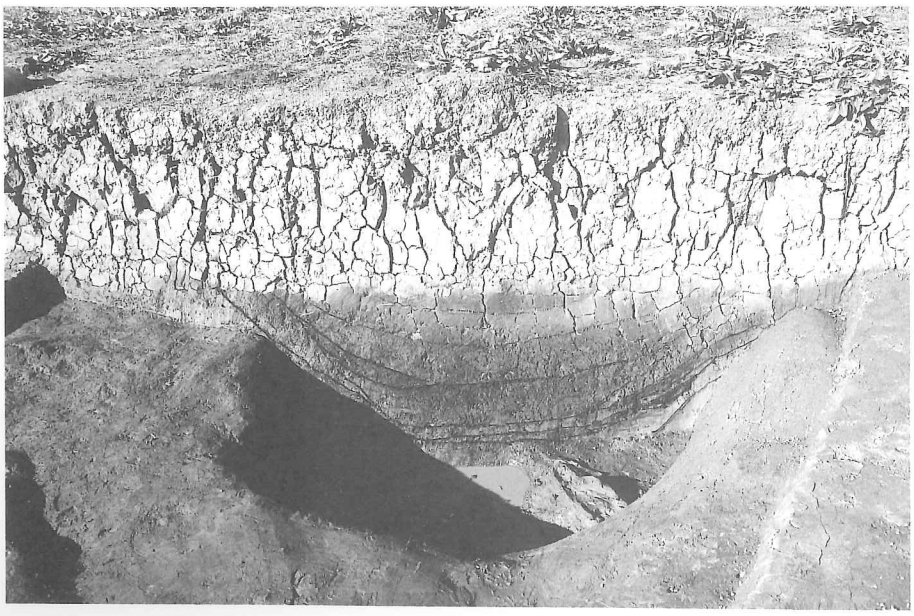
D区２号濠
遺物出土状況

D区２号濠
遺物出土状況

図版18

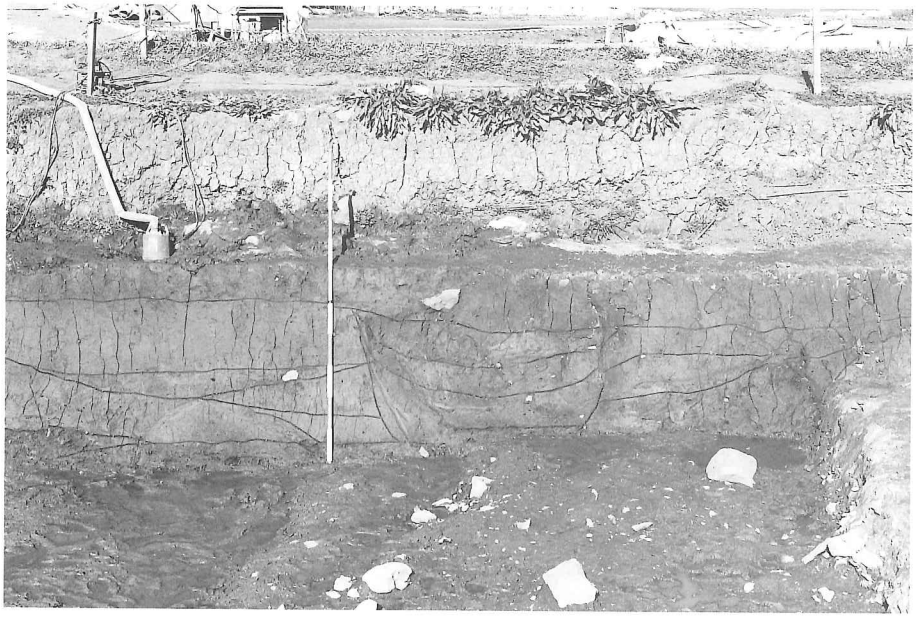
3号濠検出状況（北西から）

4号濠検出状況（南西から）



4号濠横断土層

A区１号溝検出状況
（北から）

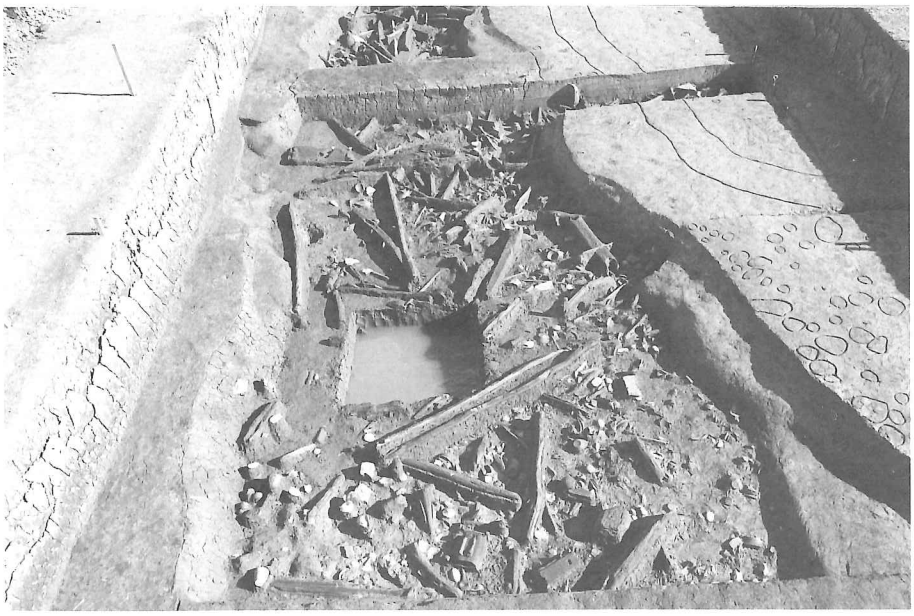


B区１号溝横断土層

D区１号溝検出状況（南から）

図版20

2号溝検出状況
（東から）



2号溝検出状況
（西から）

2号溝・
3号旧河道
遺物出土状況

2号溝・
3号旧河道
遺物出土状況

2号溝・
3号旧河道
遺物出土状況

2号溝・
3号旧河道
遺物出土状況

図版22

2号溝・
3号旧河道
遺物出土状況

2号溝・
3号旧河道
遺物出土状況

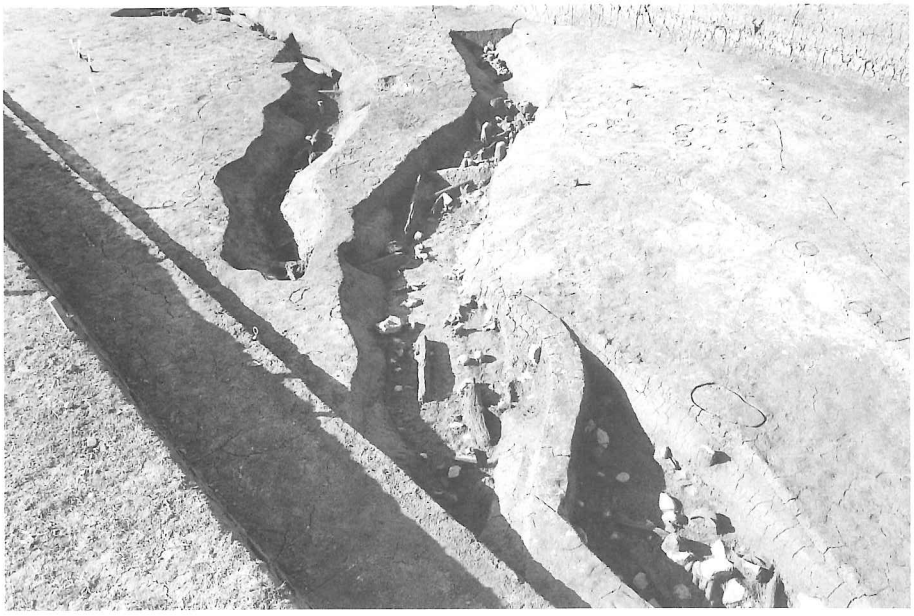
2号溝・
3号旧河道
遺物出土状況

2号溝・
3号旧河道
遺物出土状況

2号溝・
3号旧河道
遺物出土状況

2号溝・
3号旧河道
調査風景

図版24



3号濠検出状況
（南東から）

1号土壙
遺物出土状況

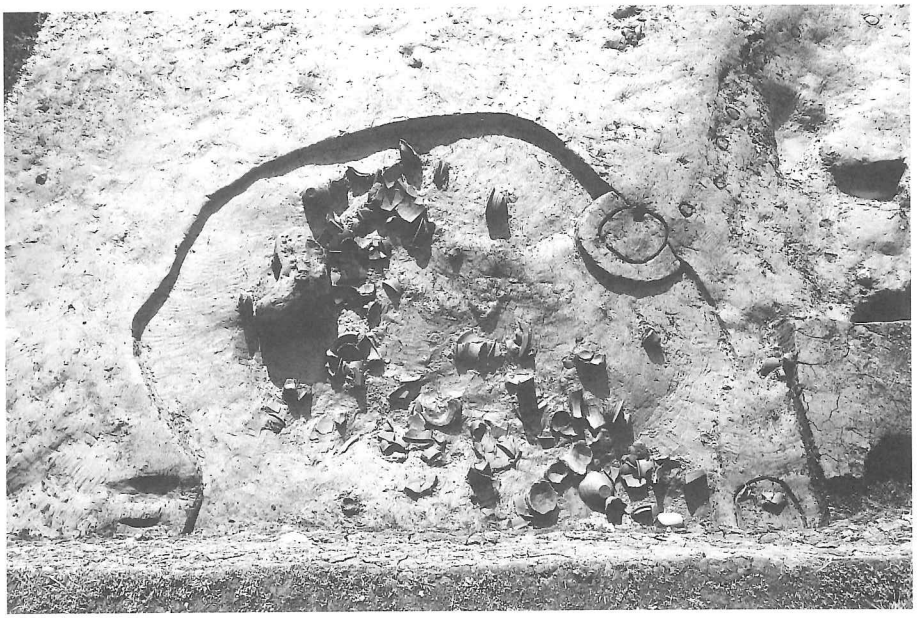
2号土壙
遺物出土状況

3号土壙
遺物出土状況

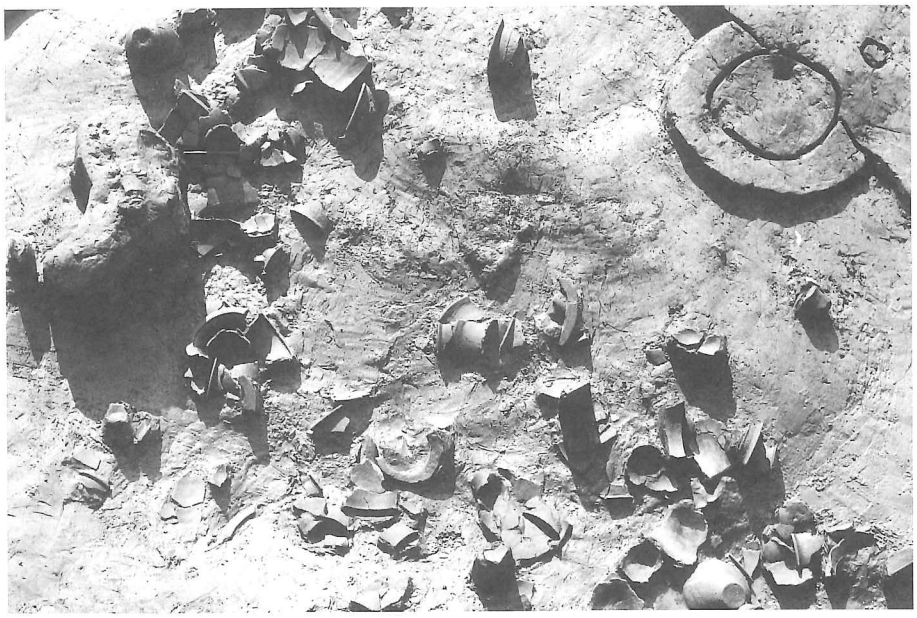
4号土壙
遺物出土状況

5号土壙
遺物出土状況

図版26



6号土壙検出状況（北から）

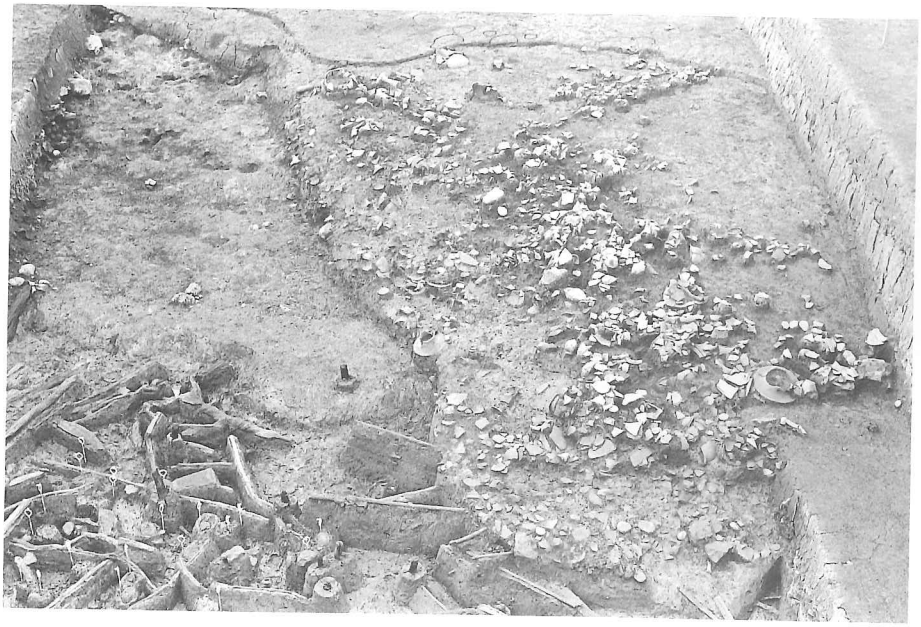


6号土壙
遺物出土状況

7号土壙検出状況（北西から）

7号土壙
遺物出土状況

7号土壙
遺物出土状況



土器溜（東部）
検出状況（東から）

図版28

土器溜（東部）
検出状況（南から）

土器溜（西部）
検出状況（南東から）

土器溜（西部）
検出状況（南から）

土器溜貨泉出土状況

土器溜貨泉出土状況

土器溜卜骨出土状況

図版30

土器溜遺物出土状況

土器溜遺物出土状況

1号建物跡検出状況
（西から）

報告書抄録

ふりがな	はるのつじいせき
書名	原の辻遺跡
副書名	原の辻遺跡特定調査事業発掘調査報告書
巻次	Ⅱ
シリーズ名	原の辻遺跡調査事務所調査報告書
シリーズ番号	第19集
編著者名	宮崎貴夫・杉原敦史
編集機関	長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所
所在地	〒811-5322 長崎県壱岐郡芦辺町深江鶴亀触1092番地1 TEL09204(5)4080
発行年月日	西暦2000年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
原の辻遺跡 (はるつじ)	長崎県壱岐郡芦辺町深江鶴亀触 (ながさきけん いきぐん あしべちょう ふかえ つるきふれ)	42423	93	33°45′34″	129°45′6″	19990714 ～ 20000331	1,572㎡	特定調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
原の辻遺跡	集落・ 包含地	弥生時代 古墳時代	旧河道3条 濠4条 溝3条 土壙7	弥生土器，石器， 木製品，金属器， 朝鮮系無文土器， 楽浪系馬車具， 貨泉，卜骨， 土師器，須恵器	

原の辻遺跡調査事務所調査報告書第19集

原の辻遺跡

2000. 3. 31

発行　長崎県教育委員会
長崎市江戸町2番13号

印刷　株式会社　昭和堂印刷